



知法大師新狀記

六





弘法大師行狀記卷之十一

東寺の灌頂院ハ大師在世此間いまだ造畢せし  
 まざれどもかしく傳燈の清くはつらなり  
 たりて実惠僧都よりつらなりつらなり清入定  
 乃後其の大法も勢は長者とて寂寂不土木の  
 成風と終給ふ一堂の據へぬ壇のうらり大師の終  
 母に給とあはれなりまはるる大康寺給ふ  
 東塔院此道場とらるる曼荼の寫像儀物とて  
 密藏の舊容不む久らくとあはれぬ其法之莊嚴赫々





くして華冠の河くわくわんのふひくあつるがごとく承和じやうわ  
 十年十一月十六日僧都表としてまうりて國家の  
 漸しぜんたはるま言宗傳法結縁支箇の灌頂くわんていすはふ  
 ありて修しゆまへき規式と奏そうしりて同年十二月  
 十三日吉紹大法師のきちじやう先小僧法阿闍梨あせり職任法  
 授らるまは東も具支灌頂のもど考かうかり大師  
 齋さい束如道具惠果附属の衲衣なういすは時ときあらんと利  
 給へり白眉青眼の碩せき法羅らとまうりてあま會場  
 おつりける練竹蕭れんちくせう角かく法倫はうりん梵ぼん延えん小のせうせみそた儀  
 とくもく毛け流りゅうは十人じゆ 惠え峯ほう三さん徳とく 樂がく衆しゆ二十人じゆ 信しん乃の  
高たか嶺りやう衆しゆ頭とう

淨じやう衆しゆ十人じゆ樂がくの淨じやう衆しゆ十人じゆ勅しやく請しやう師し一人ひとり阿闍梨あせりの  
 中なかつ子し十二人じふににん淨じやう衆しゆの童子どうし四人よににん都と廬ろ百ひやく有あ余あ衆しゆ病びやう院いん  
 より列りやうと整ととのへ大馬道おほまみちより灌頂院くわんてい小せう入いる梵ぼん嶺りやう空くうは  
 和わ音おん樂がく地ぢ以いふありり少せう人にん感激おんげきし見みふふは  
 隨ずい喜ぎまげと又またくありまに真ま惠え大法だほ戒がい場じやうは  
 初はつふのぞみ言ごん座ざの希まれふきみ給たまはるとは言ごん祖そ大師だいし  
 忽たち然ぜんとく法ほふ延えんお新しん規ぎし給たまへり大法だほ奇き特とくの思し  
 とありてあましく眼まなこと閉とめて謝あまがせりうさふて  
 是こゝとくしてまうりて儀ぎ宛えん結けつして給たまりとの如ごとく  
 以もつ時とき母ぼやまとい言ごん座ざの傍かたはらと廻めぐりたりおまへり



大師の意願餘人あつて居てまづ大法一人  
 是と評し大いひくくし聖者の出沒ハ穢  
 の有元より権化の隠顯豈凡意のまゝなり  
 かくじやまゝありしよりあつて高祖の君素  
 かくりえ先皇の牒符とまがりて宋の長友と  
 人との精舎と一若く授職の壇とかがれし中  
 も 継體の天子泰く 帝座とよりて以家  
 小入り祖師の先跡と尋て灌頂の大通法印と  
 給ふ事 宇多法皇はめて世の規模と  
 所謂延喜元年十二月十三日圓城の傳正益信

于時一 極して大阿闍梨と 醍醐の法師聖寶  
 長者 于時大傍都 二長者 と選く嘆徳の和尙と入室以上足利日  
 律師よりちて教授の大法と以て毫忽八十餘口み  
 あり法嶺の龍象惠苑の琳琅たり 親王公卿  
 侍臣官察威儀扈從雲法か地とて勢りた  
 光風の遠くわふくはくあり又佛日の宮中今  
 まさ小まのとれかきとや昔先畏三苑の帝位と  
 して法苑小あび給ひ小智圓明の月光と中天の  
 雲小朗あし今禪定仙院の王家と遁て道林あり  
 給ふ回程曼荼の藥ふありと末寺法庭を薫芳り



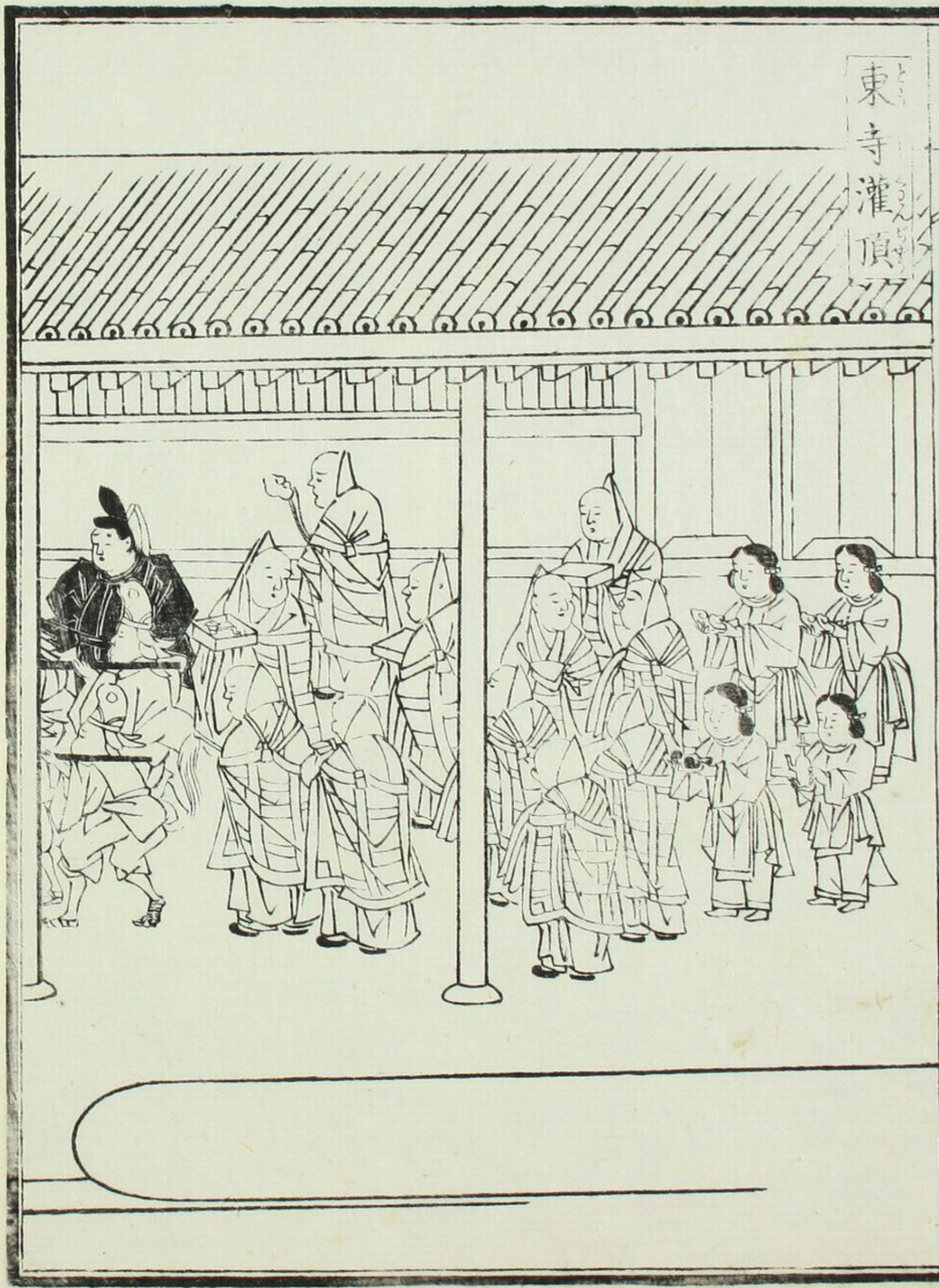
西域東密土境へぐるくとくど及美奈乃瑤圖成  
 まてく三密の乍璽と作ぎともよ風紀やびと  
 此ののどや又永延三年三月九日 圓融院乃  
 法皇廣澤の大僧正寛朝と師とて灌頂の壇に入  
 り給ふまじひく人よ 先皇の嘉凝とさぐ移て  
 延壽の芳躅追へり三台九棘の質法劔佩と芽一  
 て綺羅と外一南東北嶺の秋衆法具と捧て威儀  
 と整ふとまよりまはくく二百餘廻の涼煖と送り  
 徳治三年法孟春と迎て禪定 法皇遙ふ  
 字多 圓融の曩行と慕ひ延壽永延の往事と

うつる法務大僧正禪助と唄して授職の軌範を  
 一八十余に於薜納と率して道場の毛衆と以蘭  
 坂の瓊枝庭少つたり緇林の碩材襟とさうぶ大  
 舎於壯觀と古と換して上古小碑磔をり  
 法皇 尊儀と密壇あす慈まじく一時的地大を振  
 動して天忽小光耀河り昔巨唐天寶年中開元  
 寺於精舎あして舎光孝元琮がた是より不空三藏  
 此そくよみ祓灌頂と授一時地の地大を振一うば  
 三藏はかりと稱嘆一給て身子が心識の感むる  
 りと悦びり古と久も見え今と地りよ世病澆偽



東寺灌頂

行狀記卷之十一



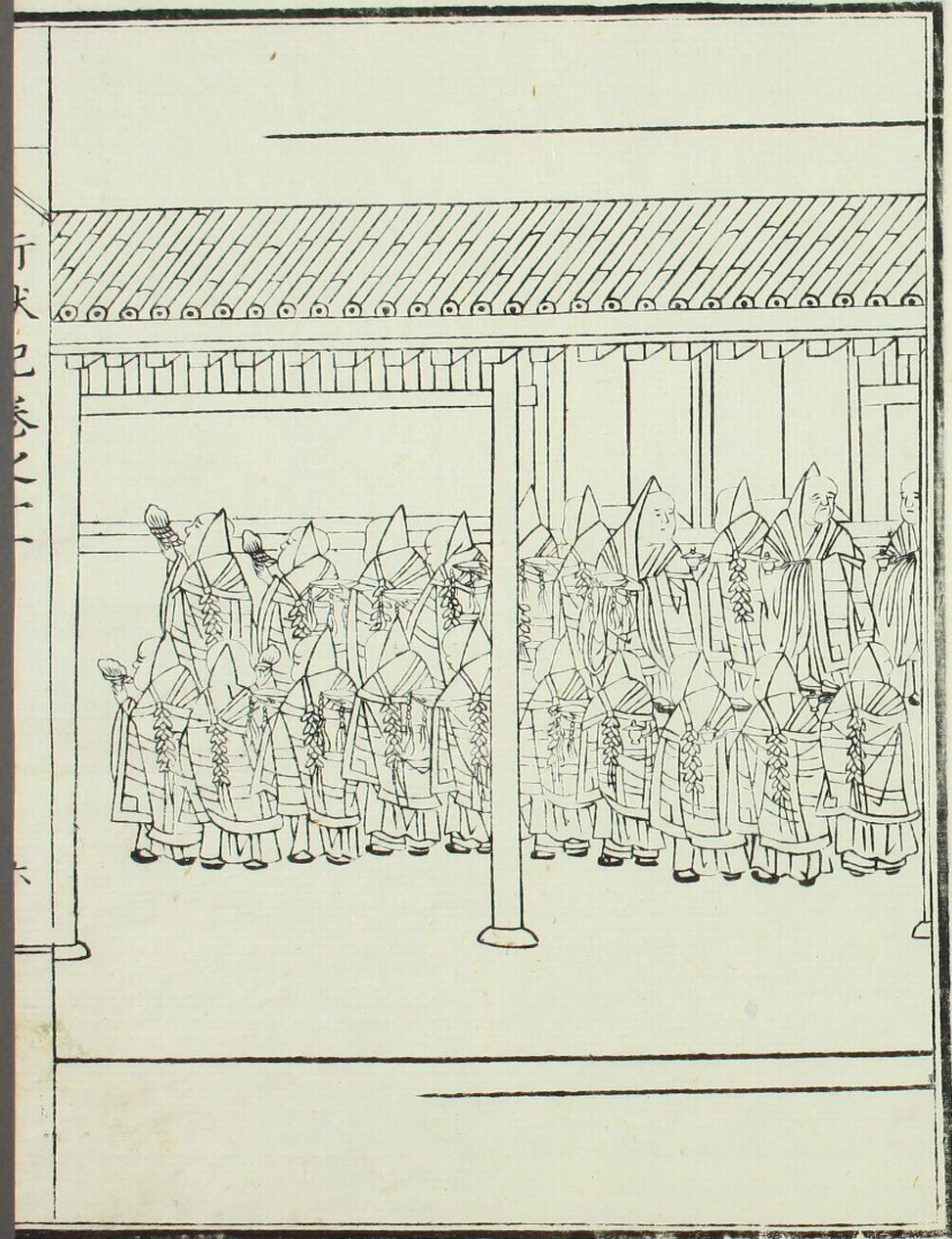
實惠僧都  
表々奉て東  
寺は灌頂の  
規式と修  
の圖



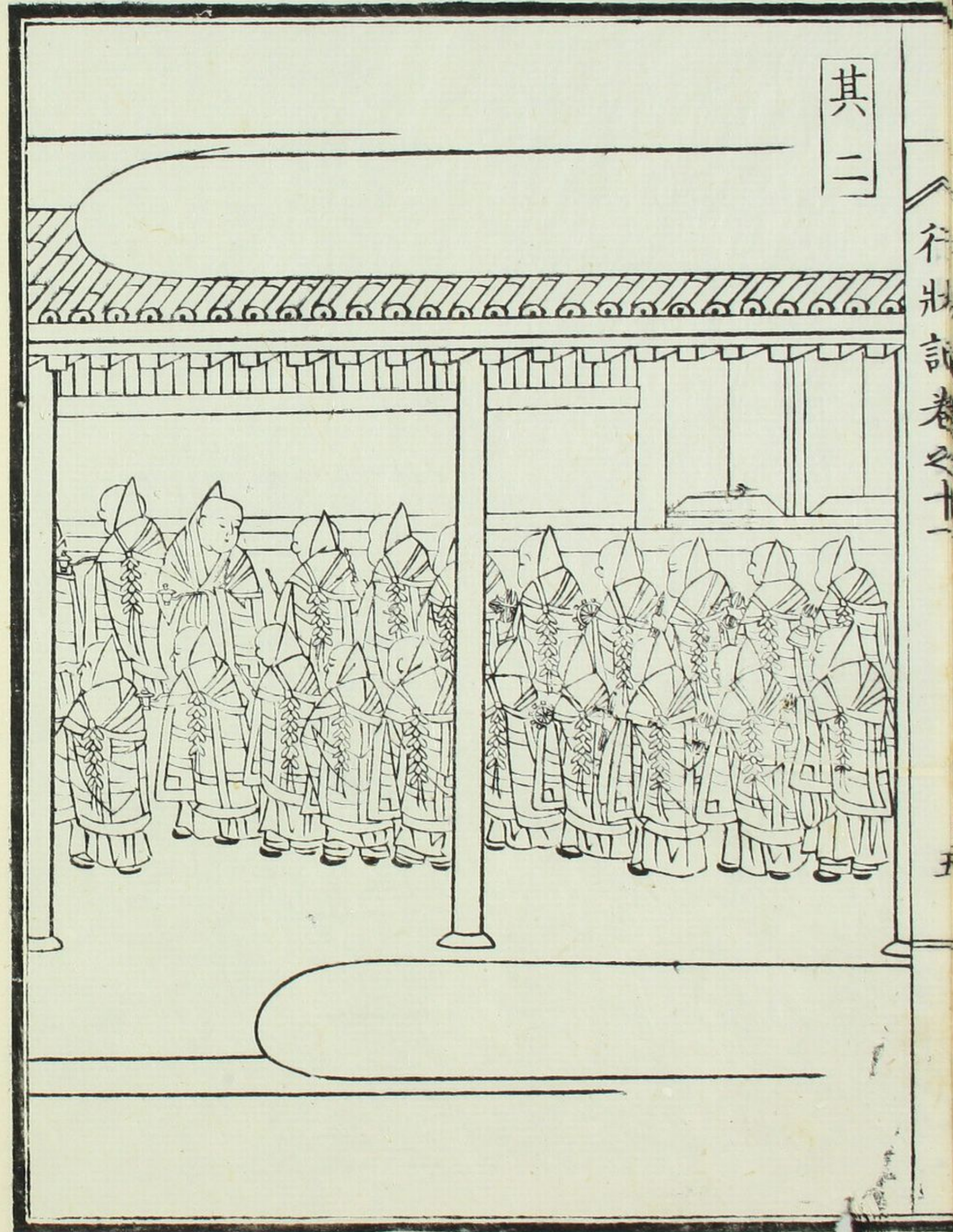
行狀記卷之十一

五





行狀記卷之十一



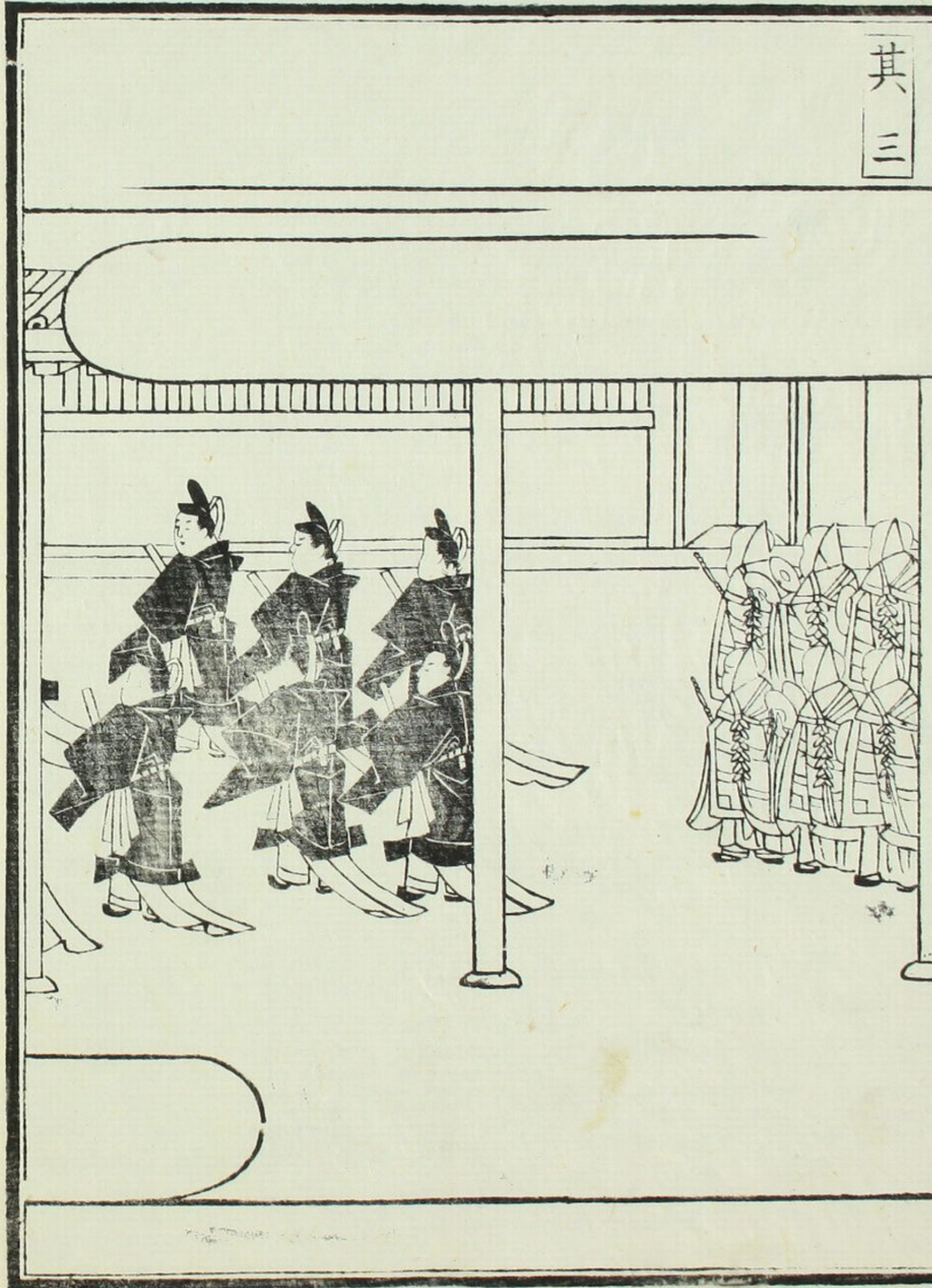
其二

行狀記卷之十一

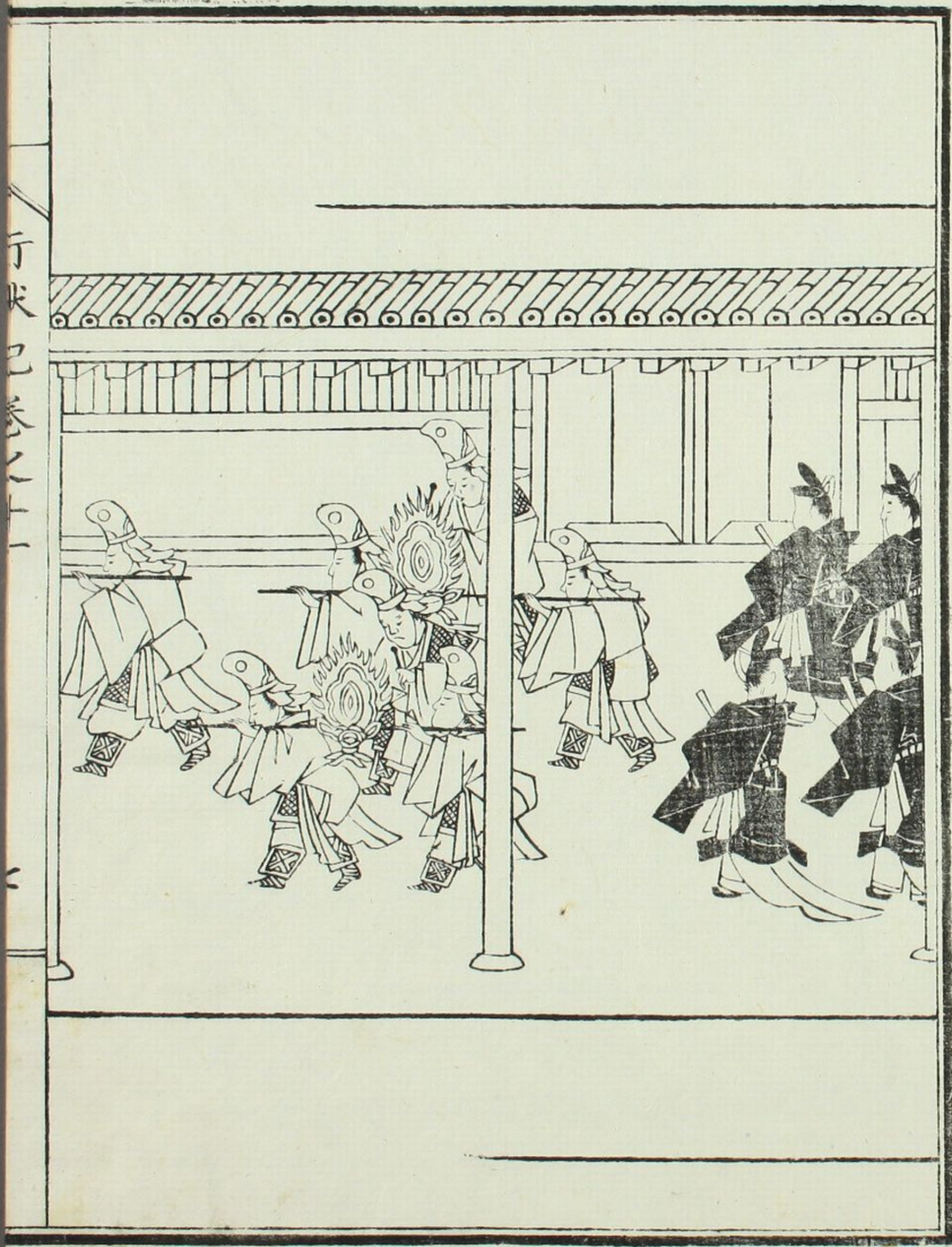


其三

行狀詞卷之卅一



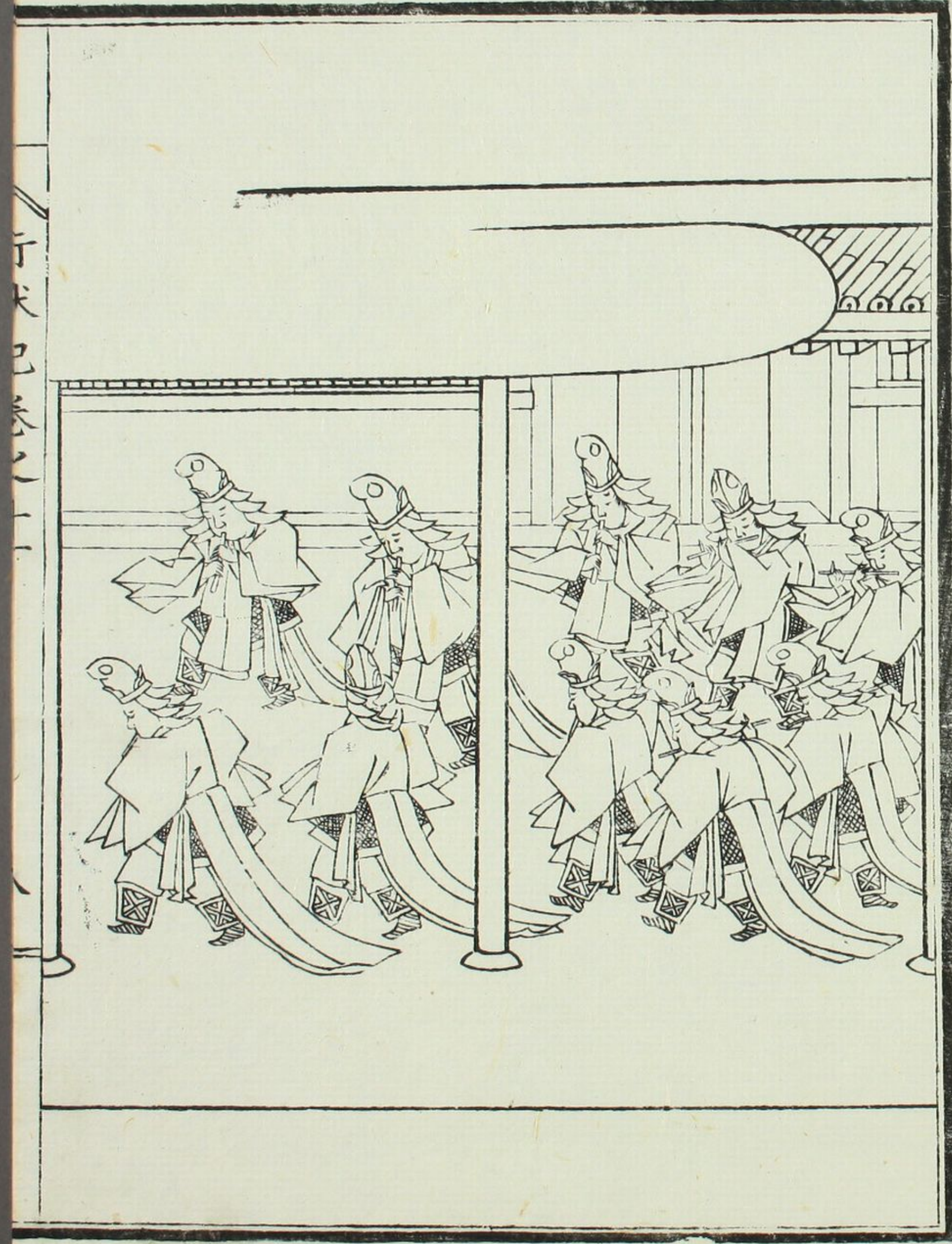
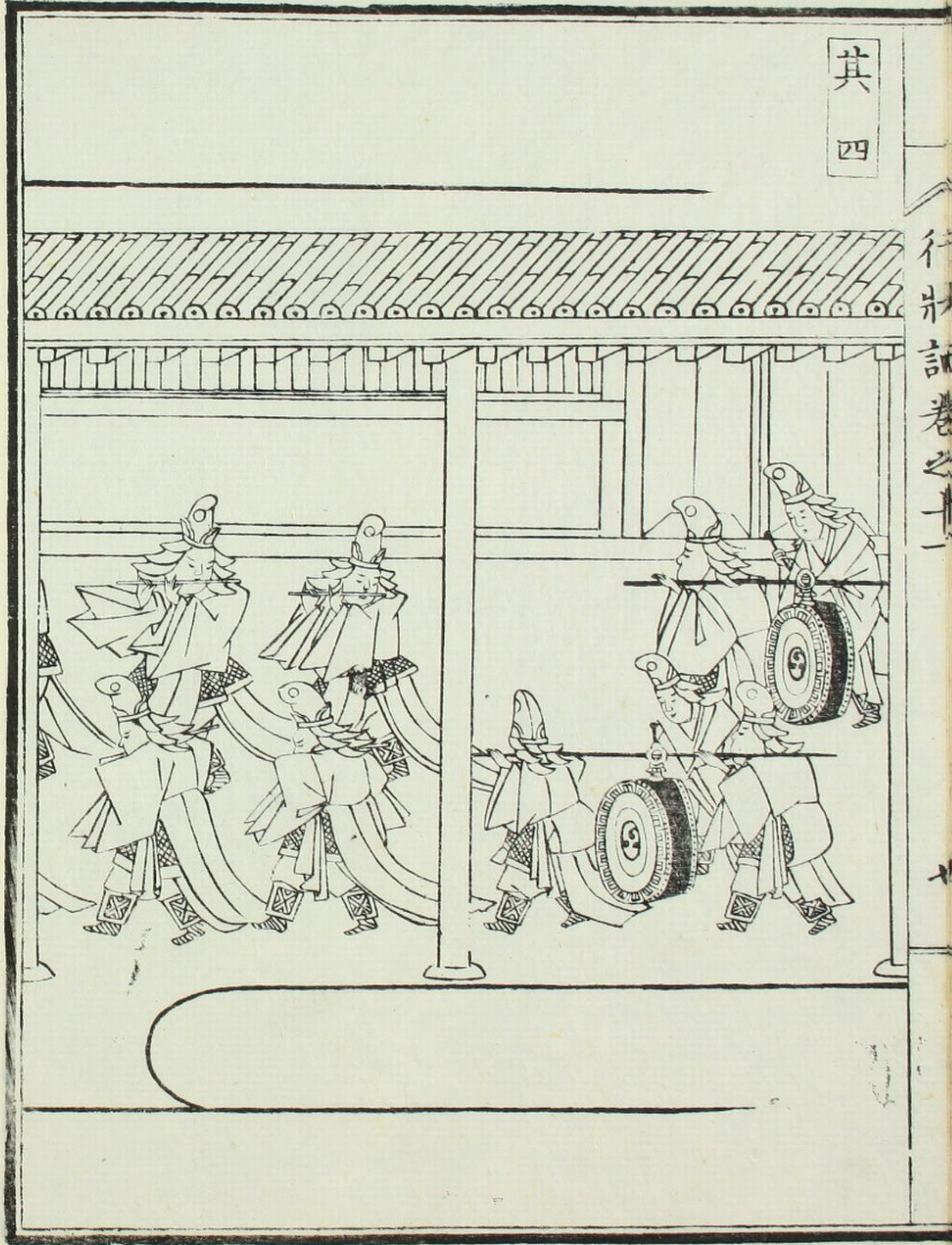
行狀詞卷之卅一





其四

行狀詞卷之十一

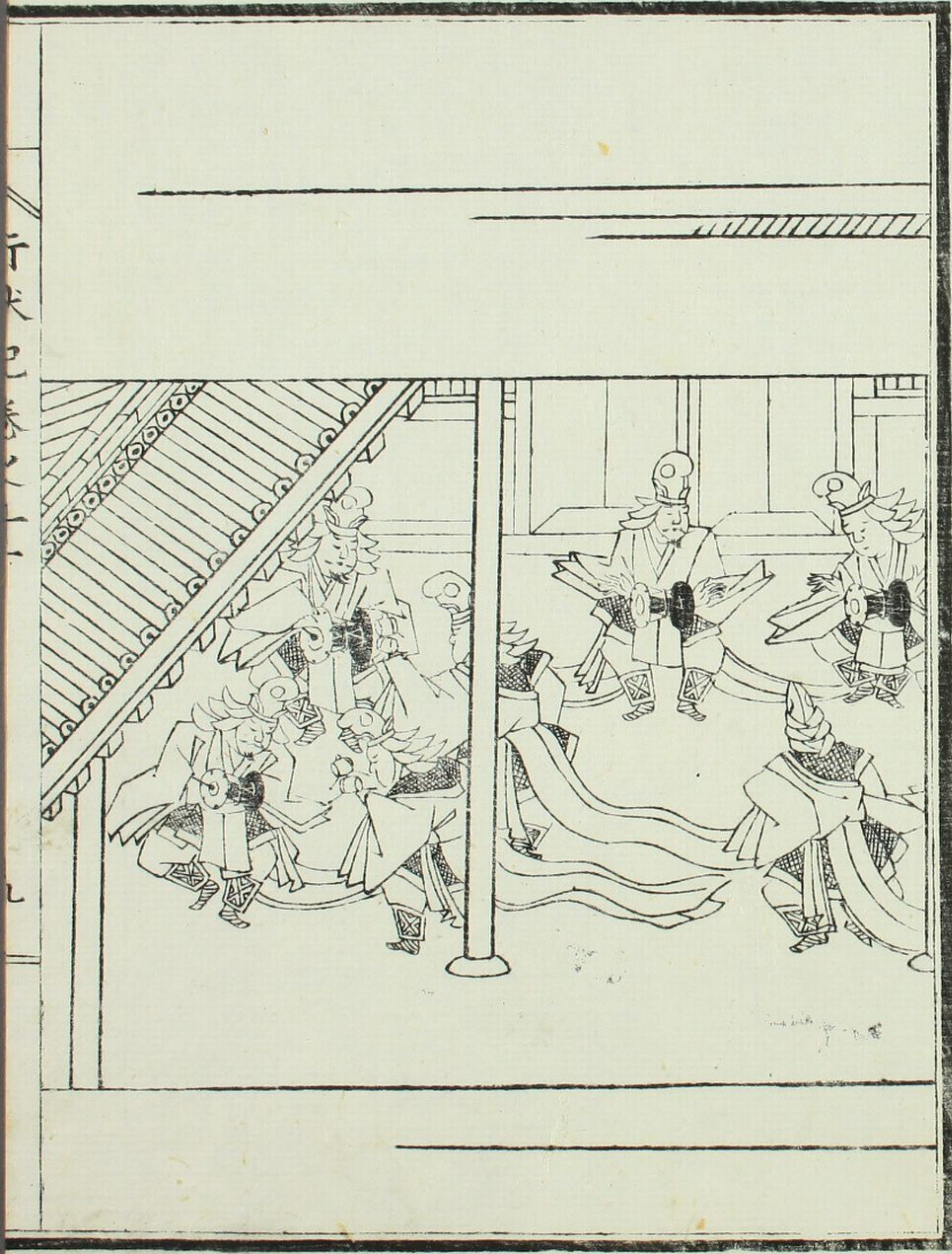
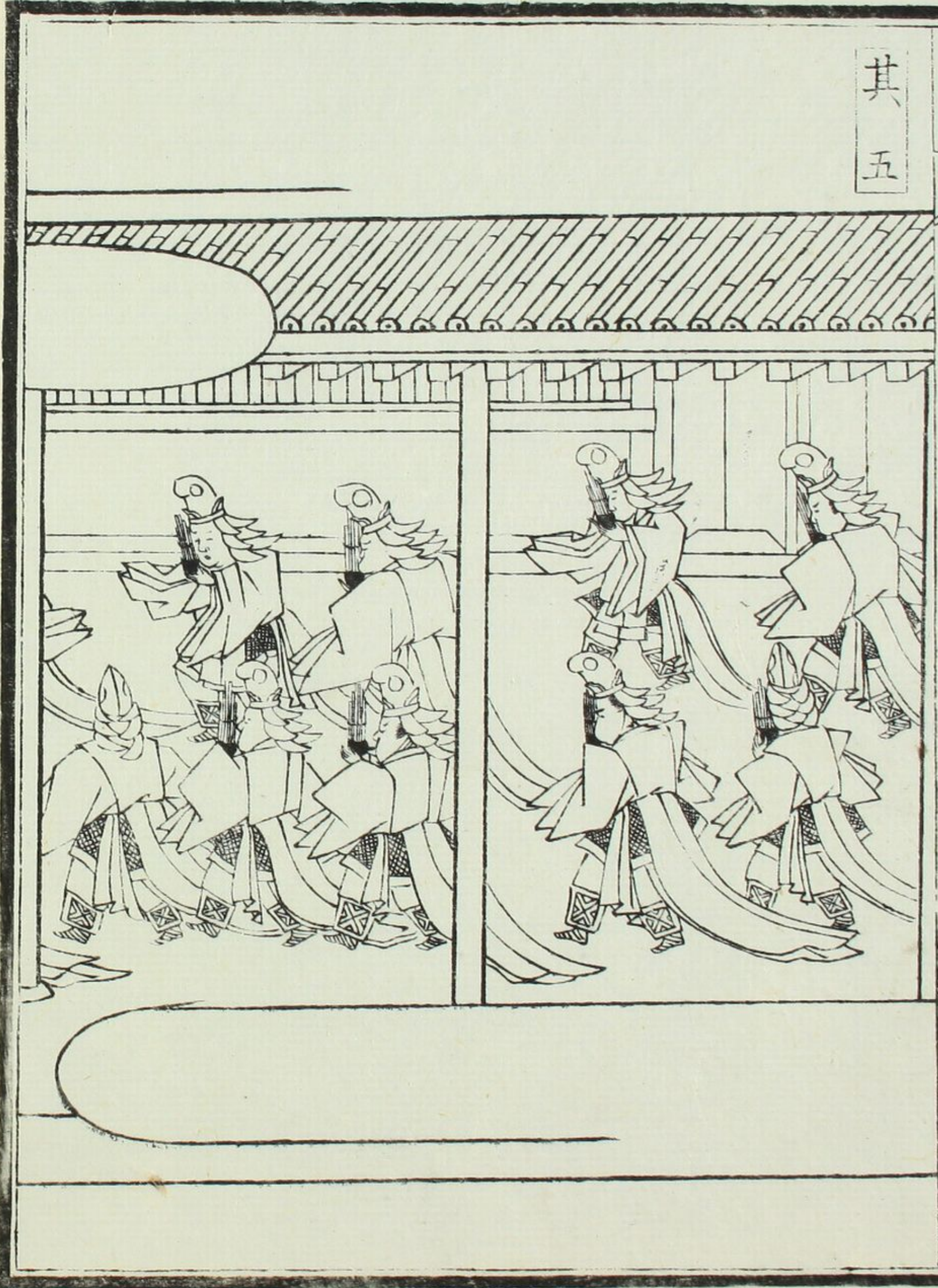


行狀詞卷之十一



其五

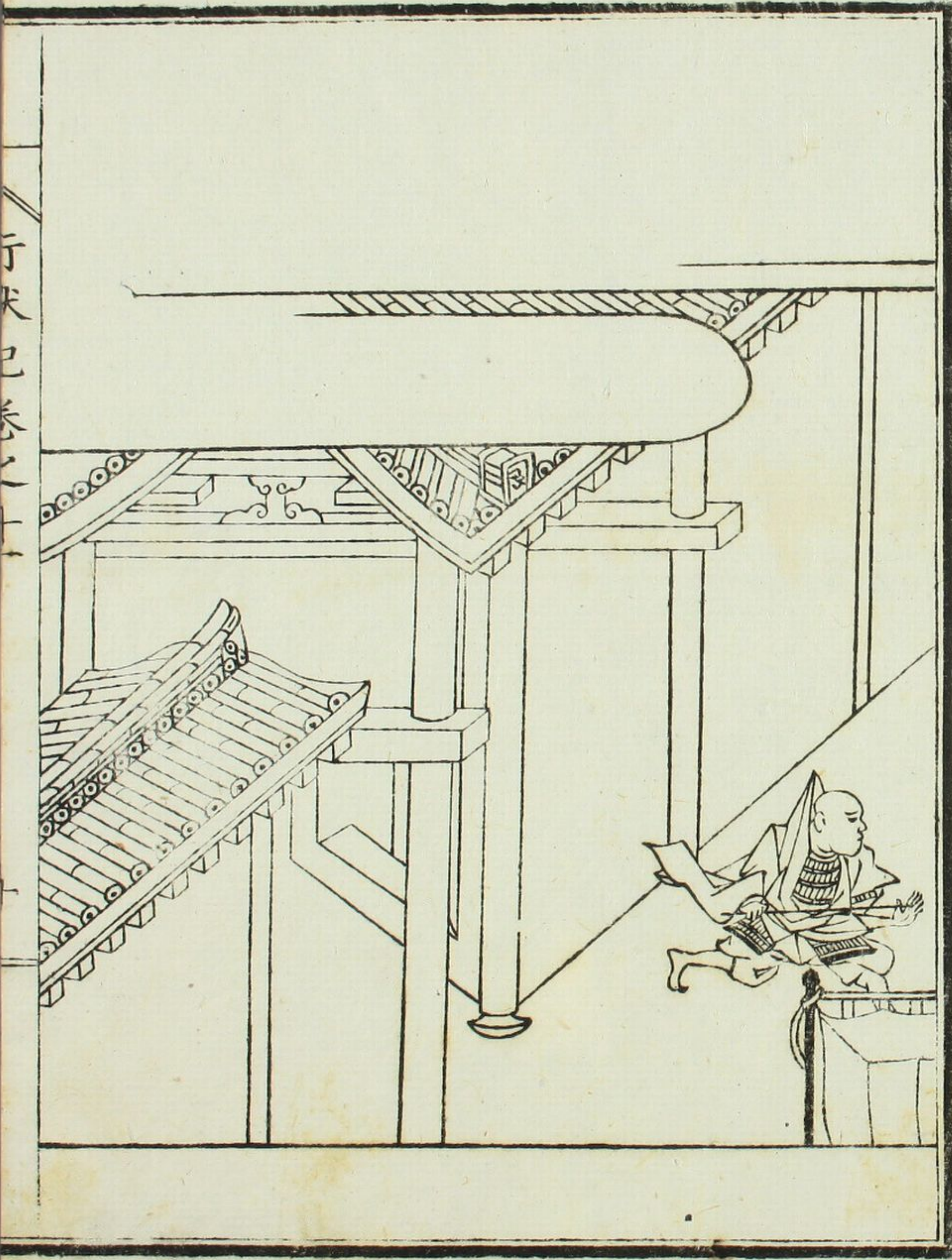
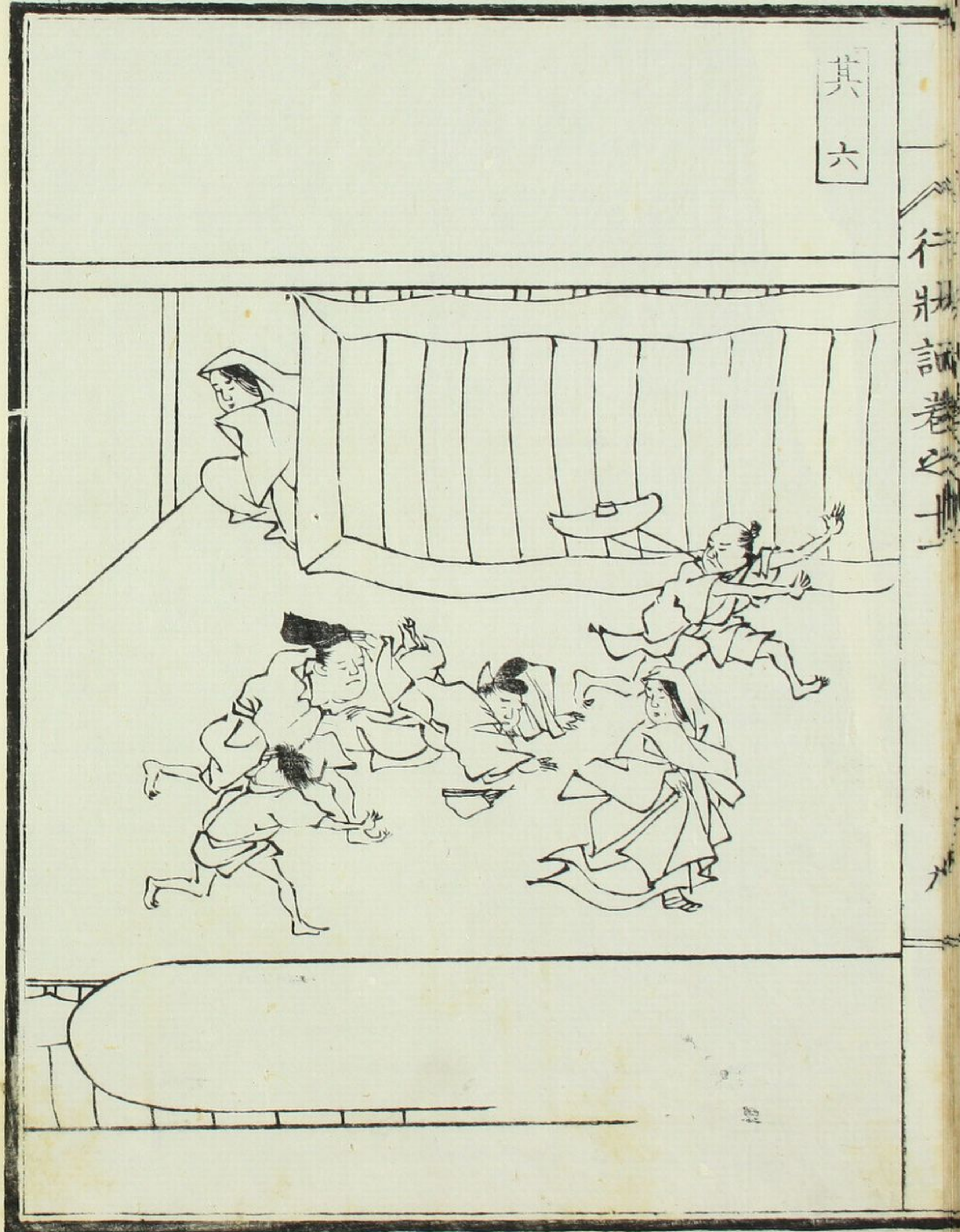
行狀詞卷之十一



行狀詞卷之十一



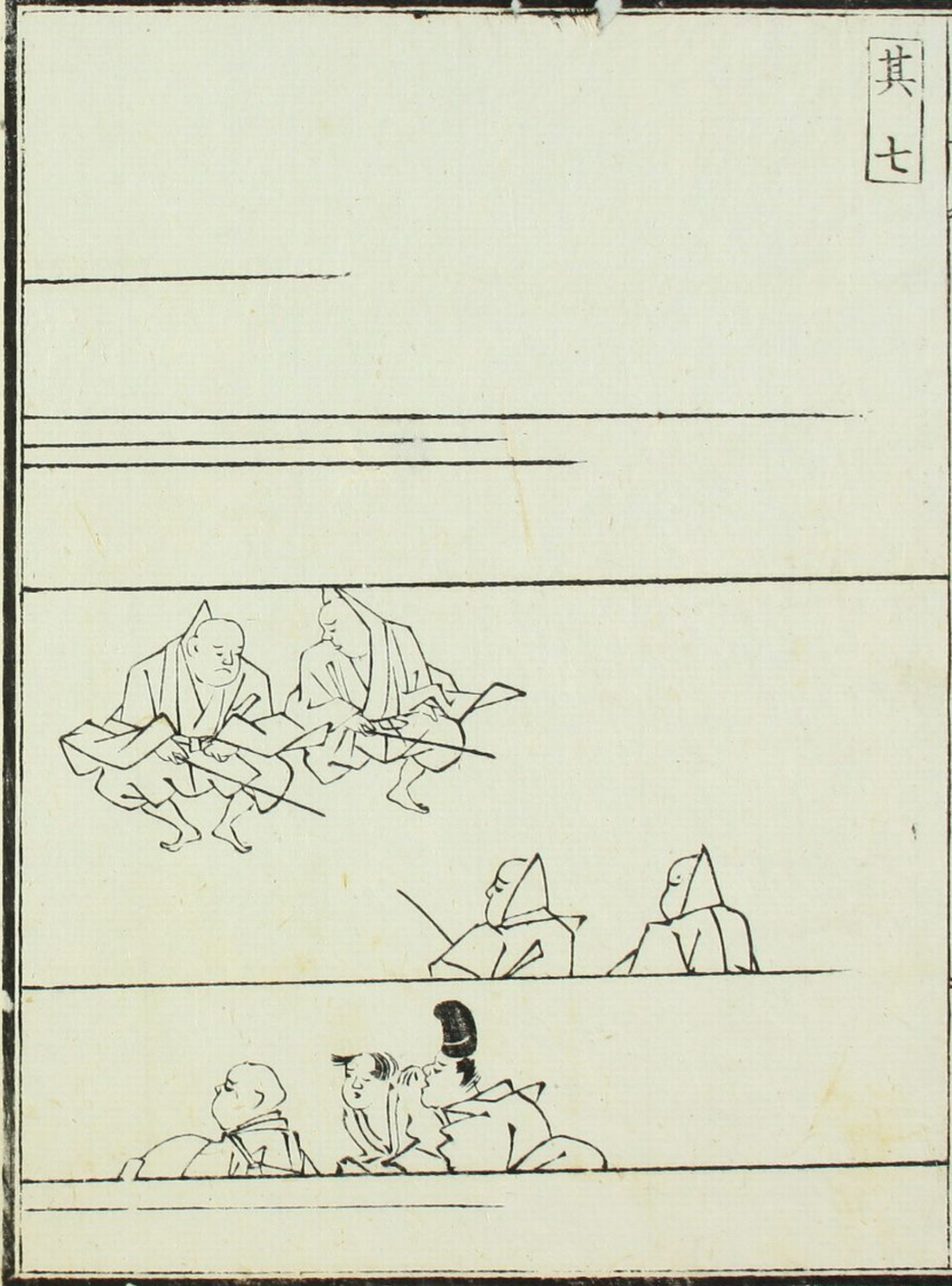
其六





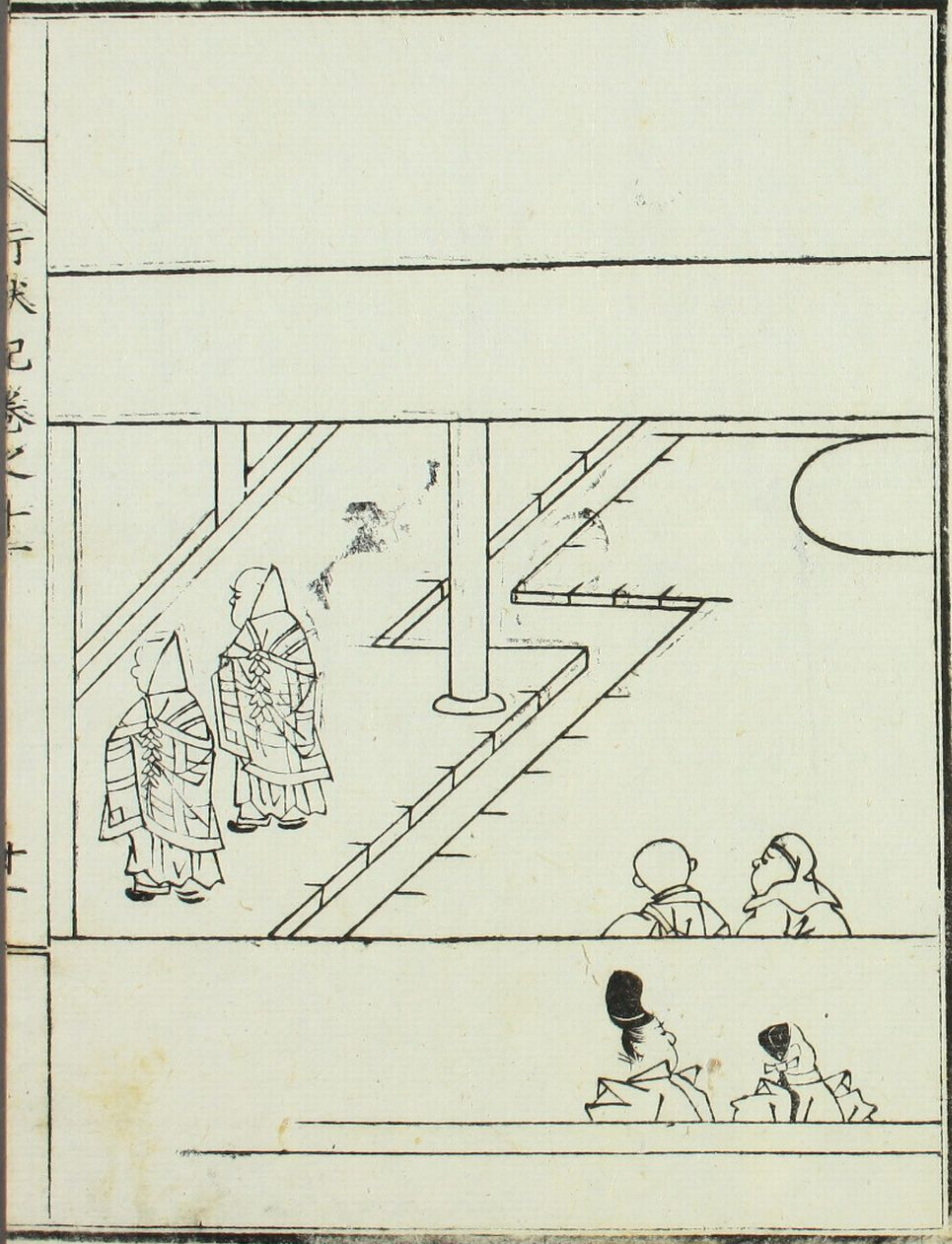
其七

行狀記卷之十一



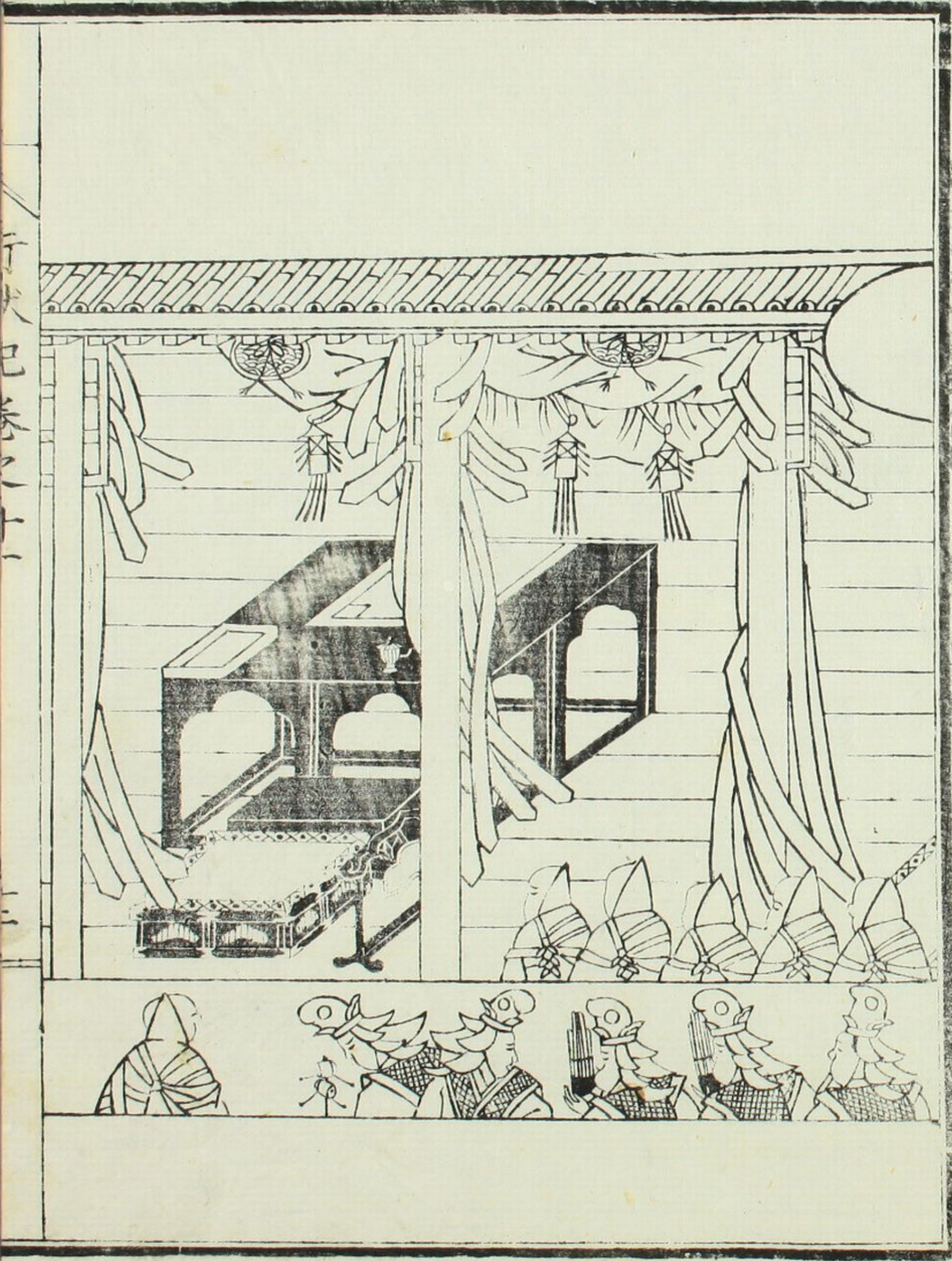
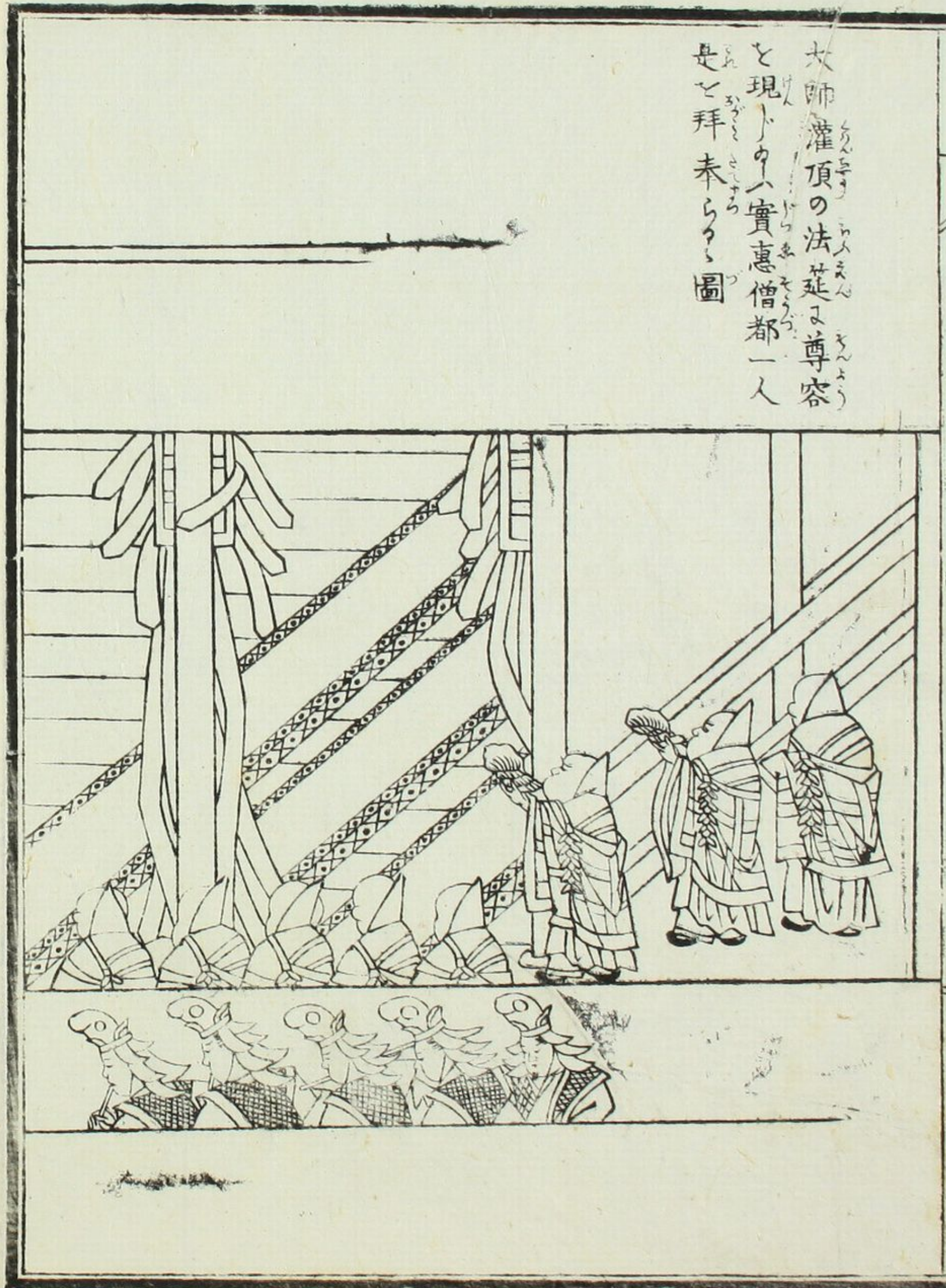
行狀記卷之十一

十一

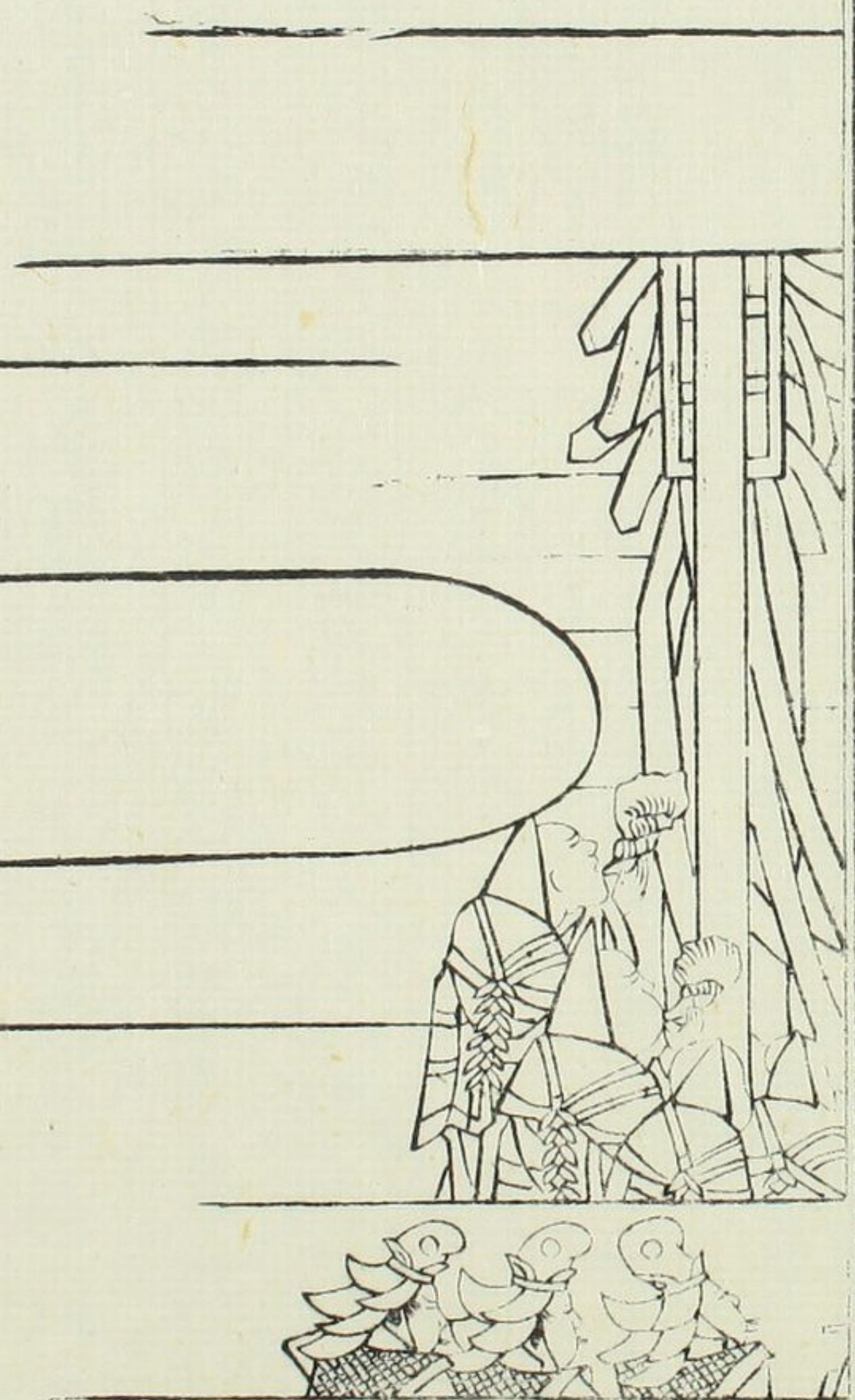




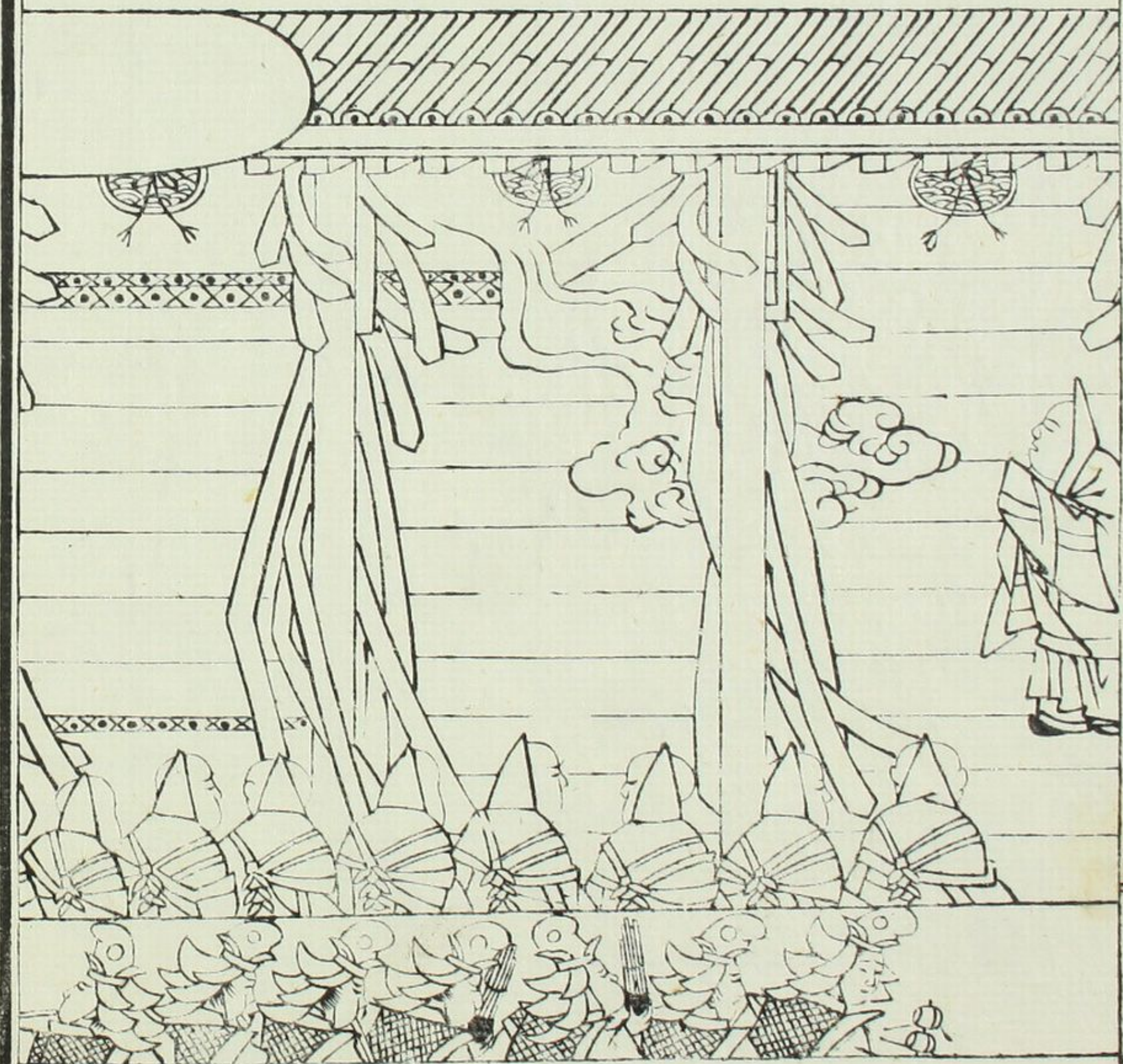
大師灌頂の法延又尊容  
と現卜の實惠僧都一人  
是と拜奉らるる圖







其二





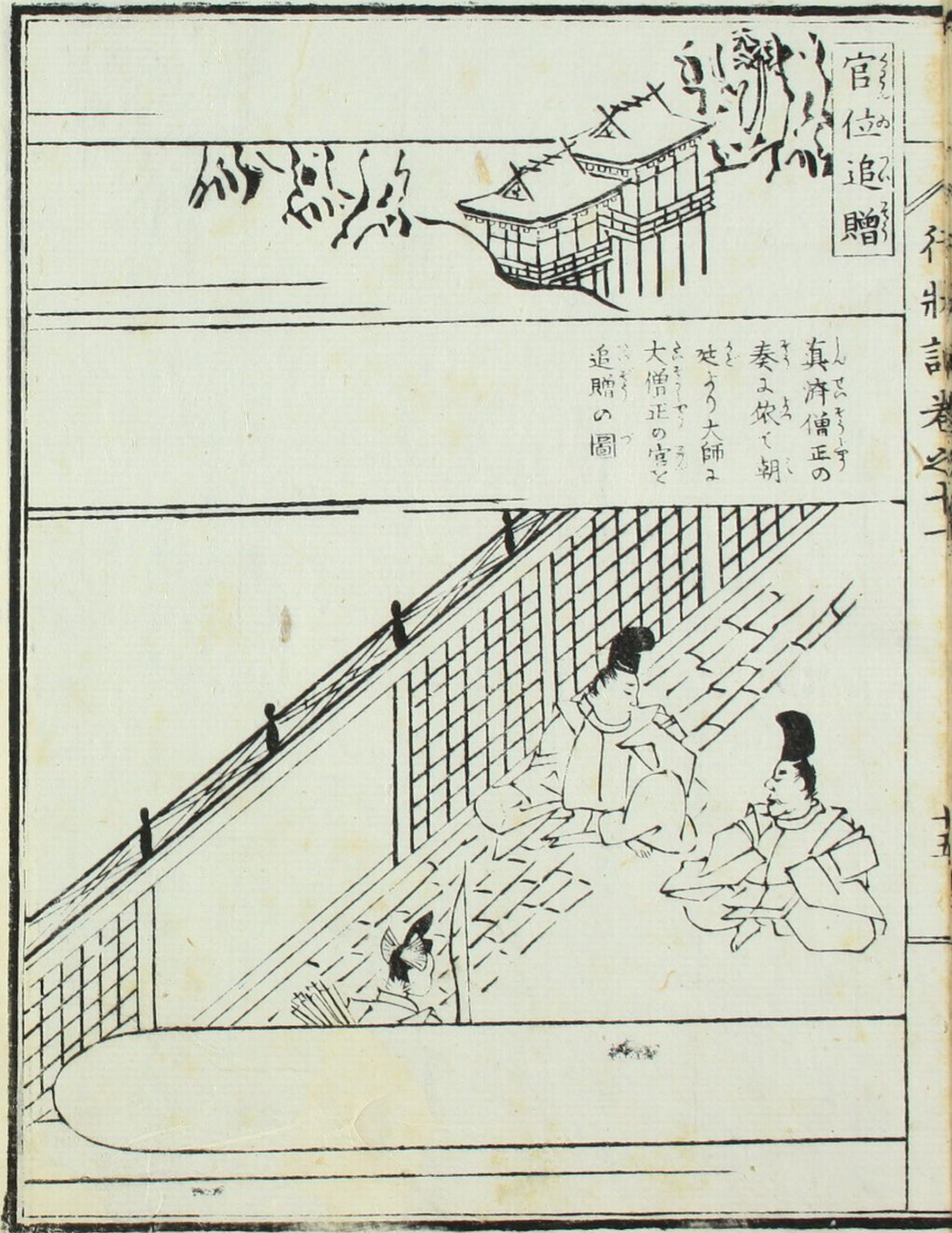
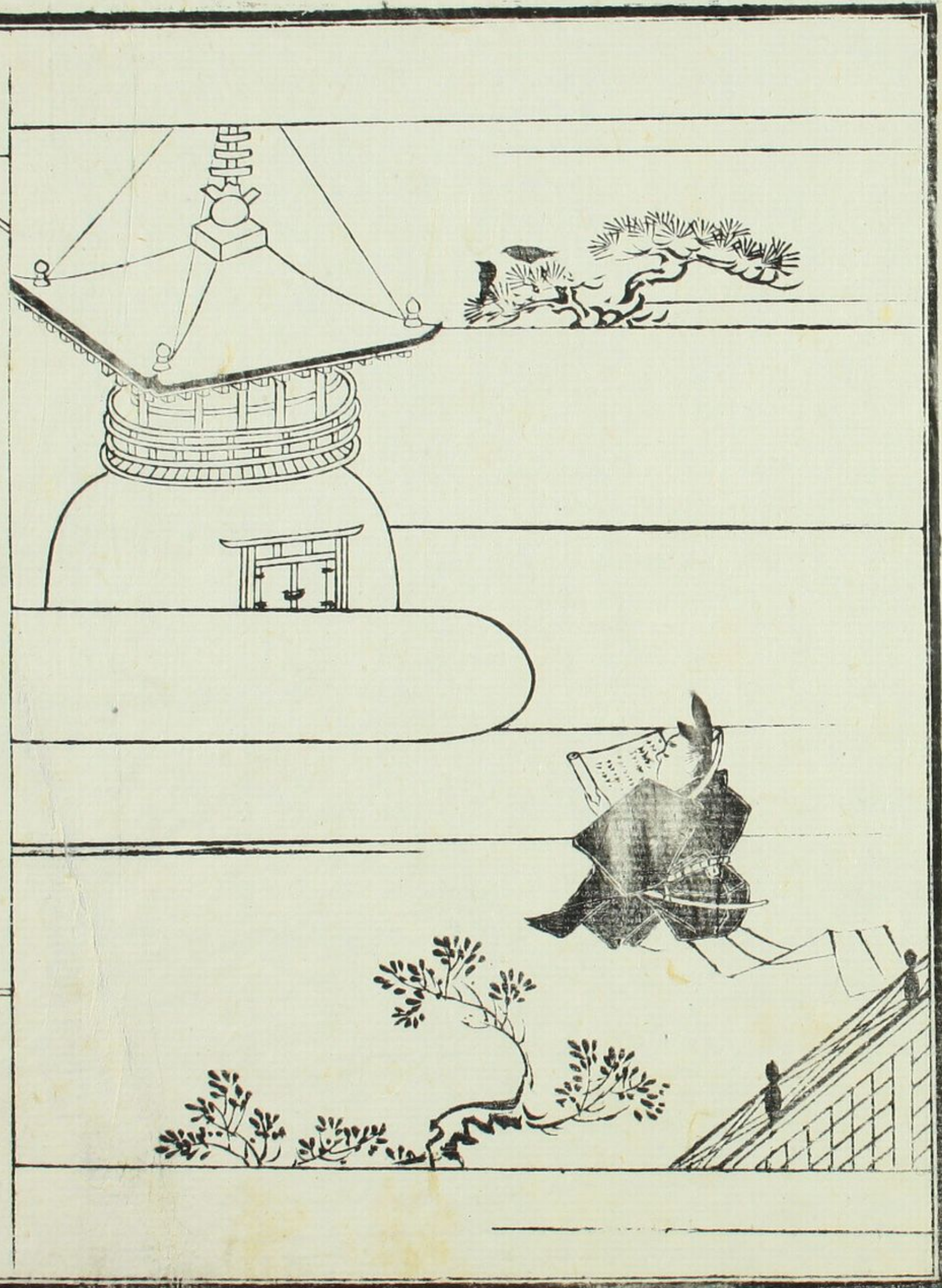




夜の紫班に任じしよりあつた上卿八座の臣雲  
 路蘭香の容法延不列と道後とらふまじりて  
 係延六年の夏秋頃 皇子 降誕の御祈あり  
 一時 二不法親王 修法の賞とりし事あり  
 波瀆頂會とて兼和の舊儀も復きし 是春秋  
 二季ふかきし春節に一會とて法一仁和寺  
 親音院とせしめしをその一宗の大業とて  
 友寺は佳換たる事とて儀局の舊より清まら  
 會の儀式とせしめし尸羅の焼延とのごとく  
 緇素戒珠と慚愧の袂ふらるる事とて愛茶の莊嚴と

とのくを縁覺花と濁作の掌も捧ぎ是機米  
 機米好く解脱は香も妙なり有性元性ひと  
 多惡趣の門とて如來加持の方便その益もか  
 ひう一言祖懇勤の遺誡もくまはりてゆゑ阿  
 う南もまた利益法牽機ふやとあす要との  
 小阿の御祈又安寧とて小象よりけりはうり  
 諸天親とてふも善神迹とたきしとあま  
 家ふるはく良縁と密壇もむきとん業維  
 大師雨露は恩とてふもびとんや  
 文徳天皇は御宇天安元年十月十七日去  
 文徳天皇は御宇天安元年十月十七日去





官位追贈

行狀記卷之十一

真濟僧正の  
 奏より依て朝  
 延より大師  
 大僧正の官と  
 追贈の圖



表とたてまつりて先師の徳功大よそ勅賞すく  
 ぶれととるむき而帯の僧正とすけ大師と  
 おくり給べきは福奏聞ありし時 天皇よとに  
 感激し給く 勅許とありありしく同月廿七日  
 小太海はりやのどく僧正と任じ大師よと大僧正  
 の友とゆくりたすひたり 皇後貞観六年二月十六日  
 大雅僧正はどを僧正の位階と奏し定あ  
 ら是同三月廿七日大師とて法中 大和尚位ふり  
 叙し給へり  
 延喜の頃 聖皇御養志の事ゆきによりて捨

皮巻の御装束一襲と多岐の廊窓小母多り給  
 時僧正親賢 勅使とありありしむる彼僧正と  
 高師聖寶の付法言祖の代の嫡嗣あり顯密の幽  
 致ときはめ智行傍倫ふあたり 朝家乃飯依  
 よとに誓ふして 聖皇の 敵信たぐひるら  
 皇紀志うゆきに入定の禪窟と用て大師乃高顔成  
 孫とんそし給よ蒙霧へだつるがぶとをしそ美容  
 名へ給ふ事終しよとに僧正悲涙となり懺悔  
 と凝して我み欲の境少生るといども三業乃非遠  
 減るは取ふし何ぞ御終とみとてまつるがぶとを

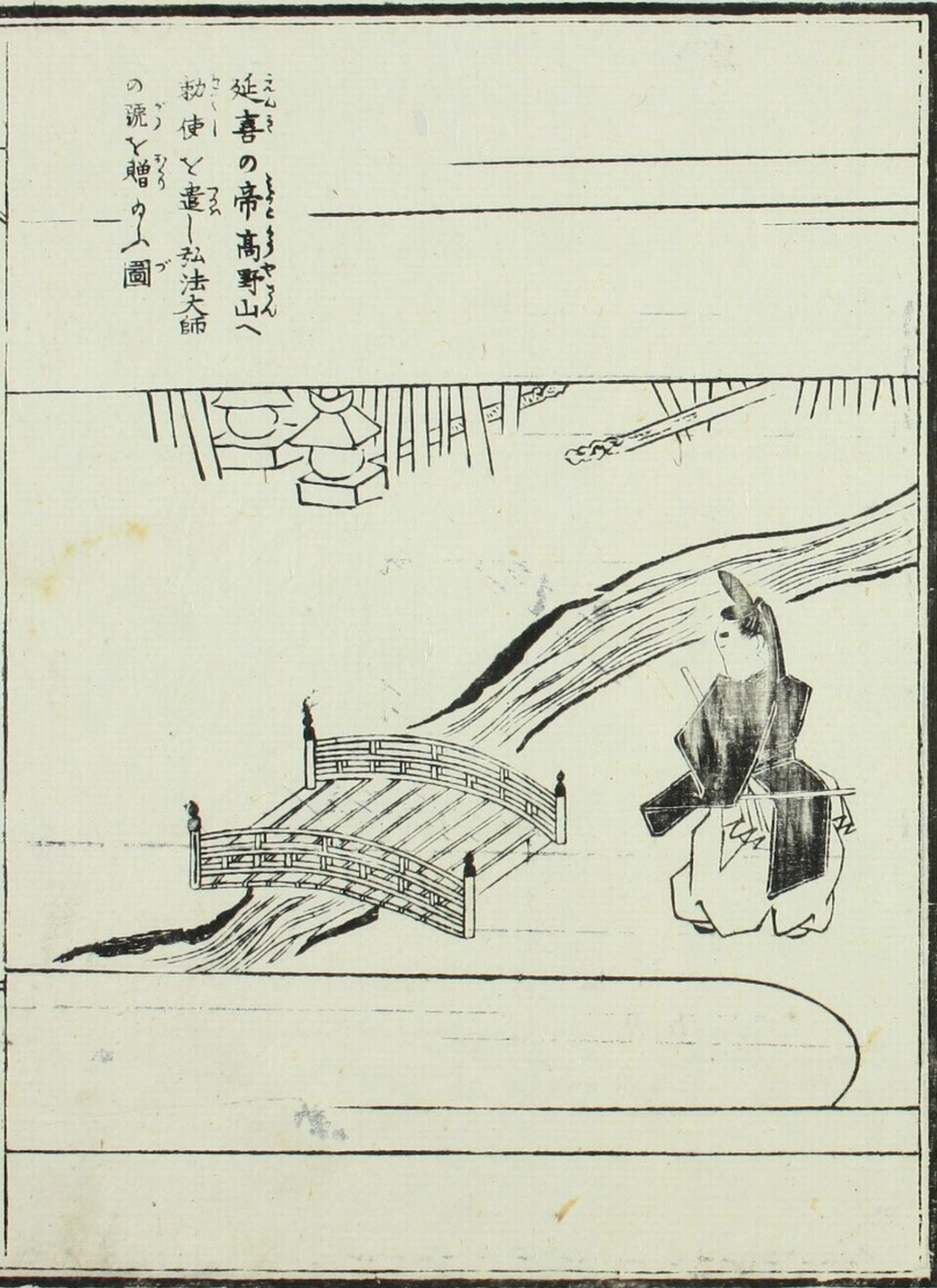


大師諡號

行狀記卷之十一



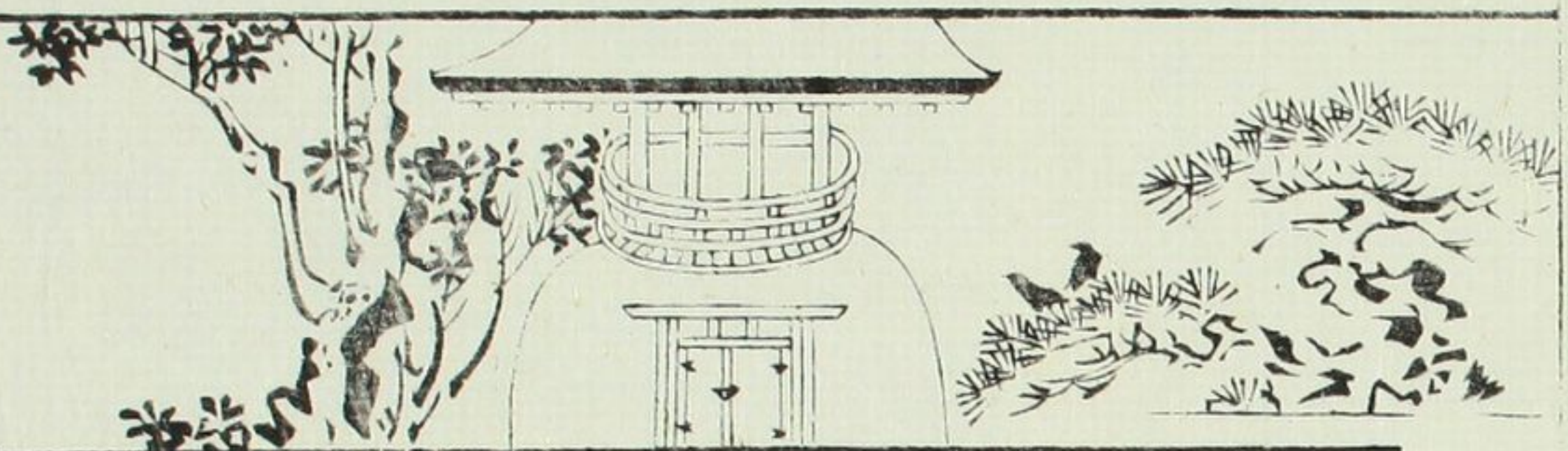
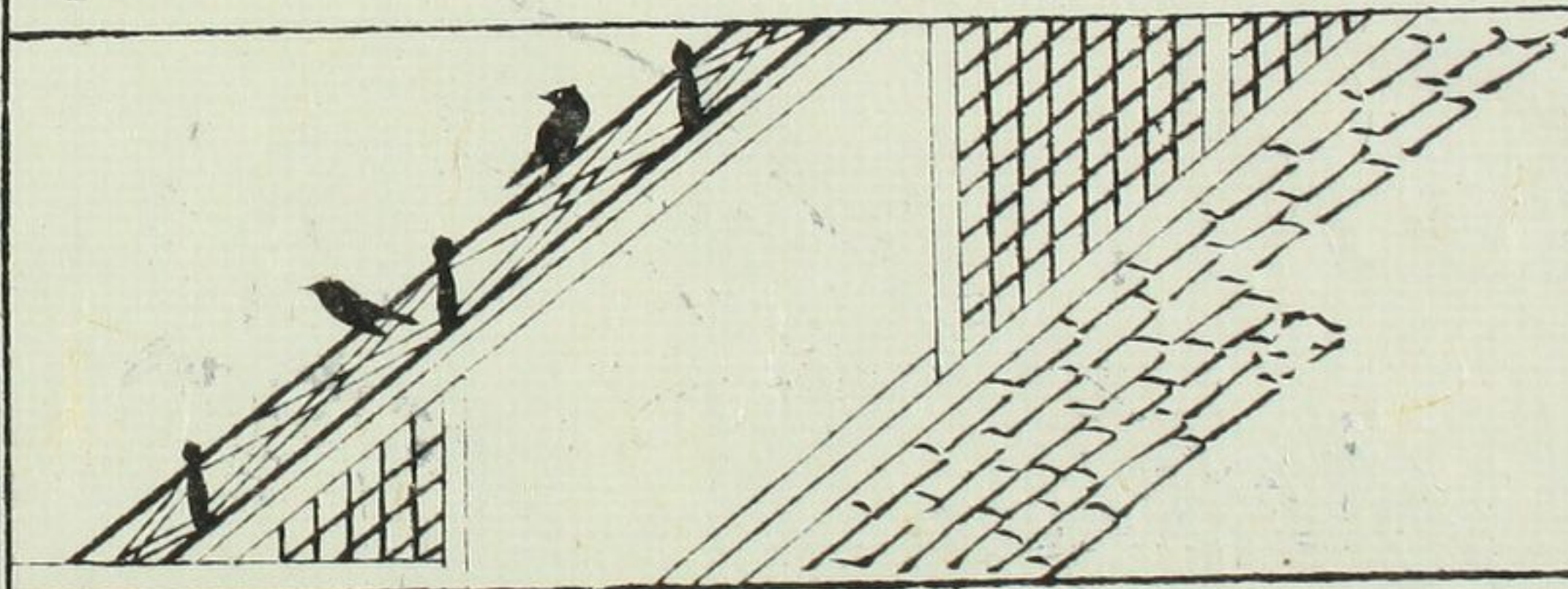
延喜の帝高野山へ  
勅使と遣し弘法大師  
の疏と贈りし圖



行狀記卷之十一



觀賢僧正勅命と  
いけ高野の御廟へ  
詣り御衣と大師  
小捧の人淳祐尊  
容と拜する支那  
ハゴロ 圖





とやまはくしんといひて祈念ありく月  
 此霧といひて此鏡ふらふらぐとく入定  
 の容儀まはあをる龜窟の中少頃の量給ふ頭  
 髪かかく髪ひく衣被破損し給へり僧正悲壯乃  
 涙交流して則新衣とたてまはり漸髪を剃除し  
 給ふり僧正此中子石正の淳祐その傍に留候せ  
 らまはるふ松がみうてまはるやと同給ふみんたま  
 しのりしりさきも新らも紙とりて大師の漸膝上  
 ぬまきさき給りりも手巾うばしを志て沈檀の香  
 匂よ起り一期の間除蕙をほうきざり此僧正

ありひ給く我慚愧の衣と著し戒法の珠とく  
 り由名不幸ふ大師の生身と洋きうりて多くり衣  
 將來不任の業ありてさしひ窟小のぢひきり  
 とも業霧ありてさして洋觀の量とも多ずば久  
 里入定の言儀とらたがひつ雁しとそま後よりら  
 緇素母がみさたまつるりとも先を巖石くみあき死  
 かがく人持出入とあわれなり又僧正表とてまはり  
 温顔遠屋ふら行く後を給位給 勅阿曇と  
 ひとどもいすゞ禮誼の業なりうりみ奏しりさしり  
 ば延壽廿一年十月廿七日 八十七年 崇勝法典法加

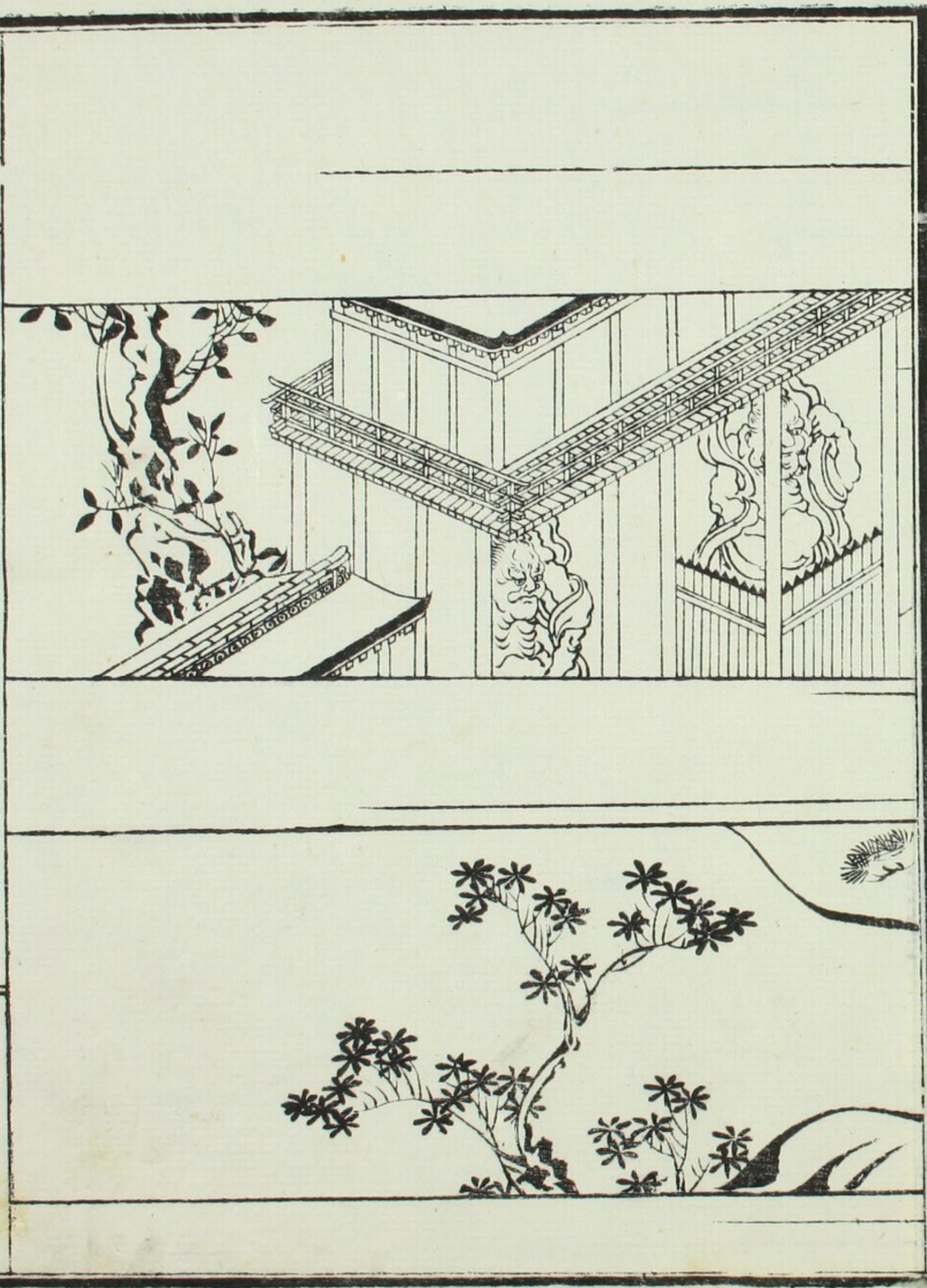
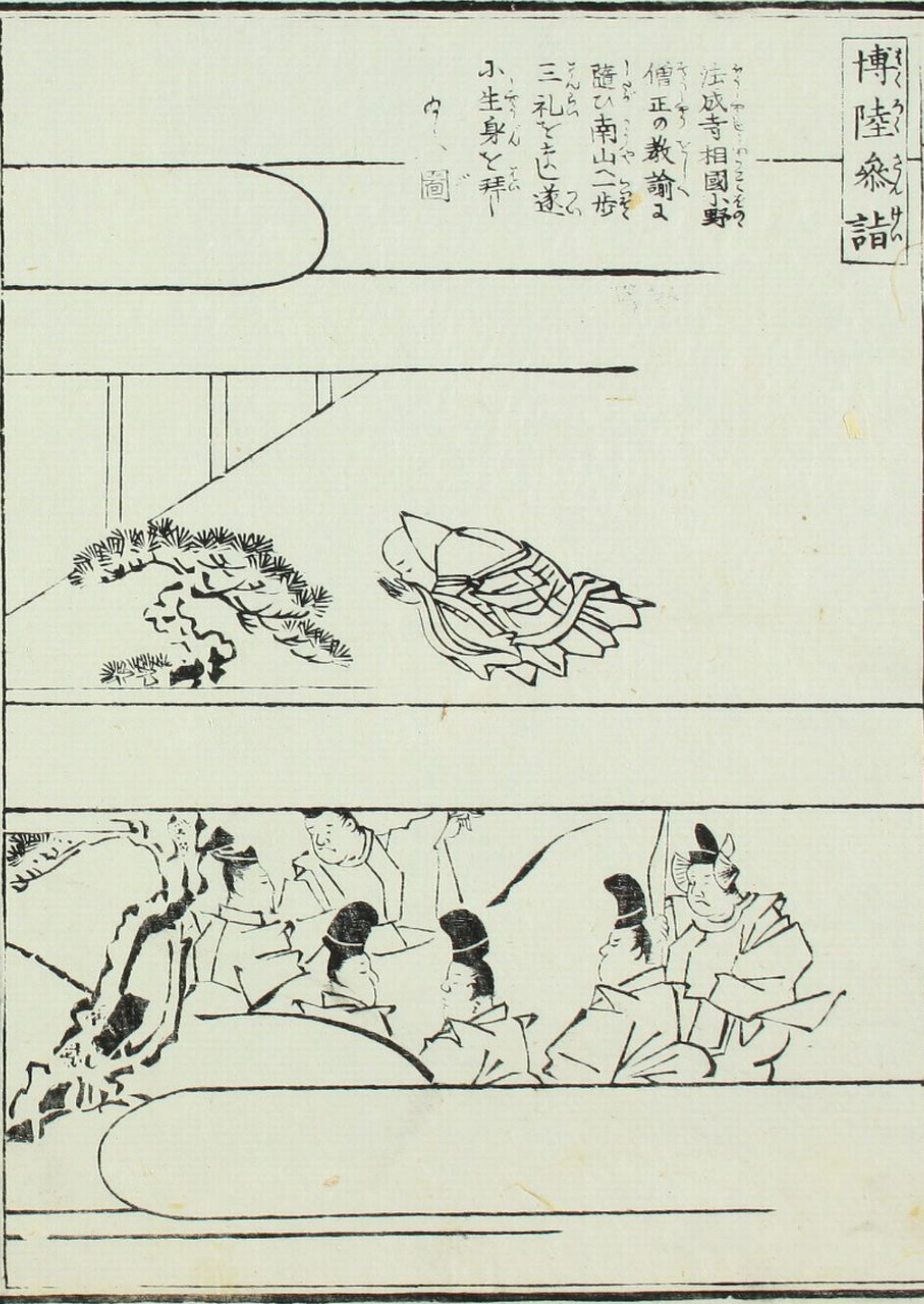




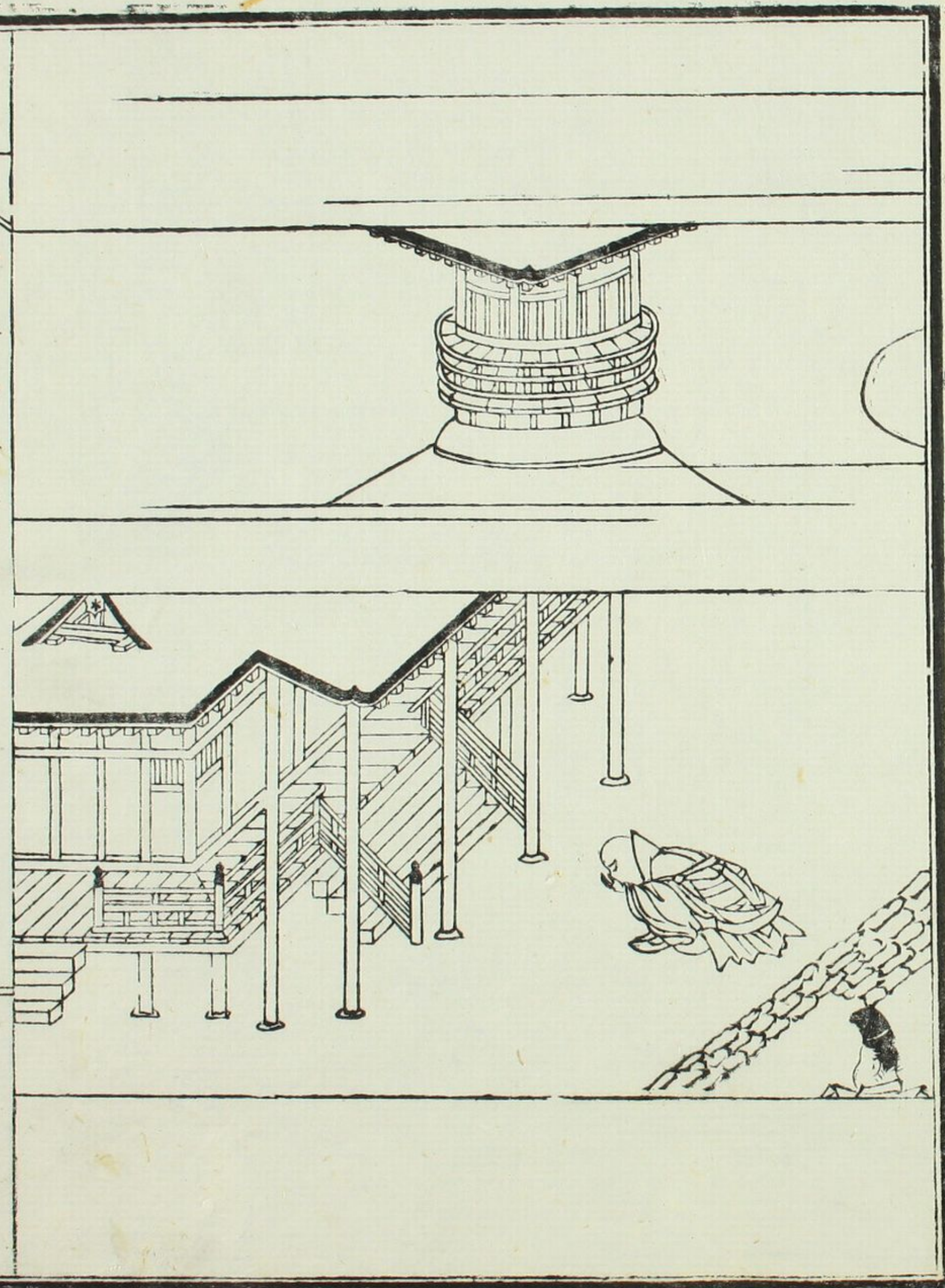


博陸叅詣

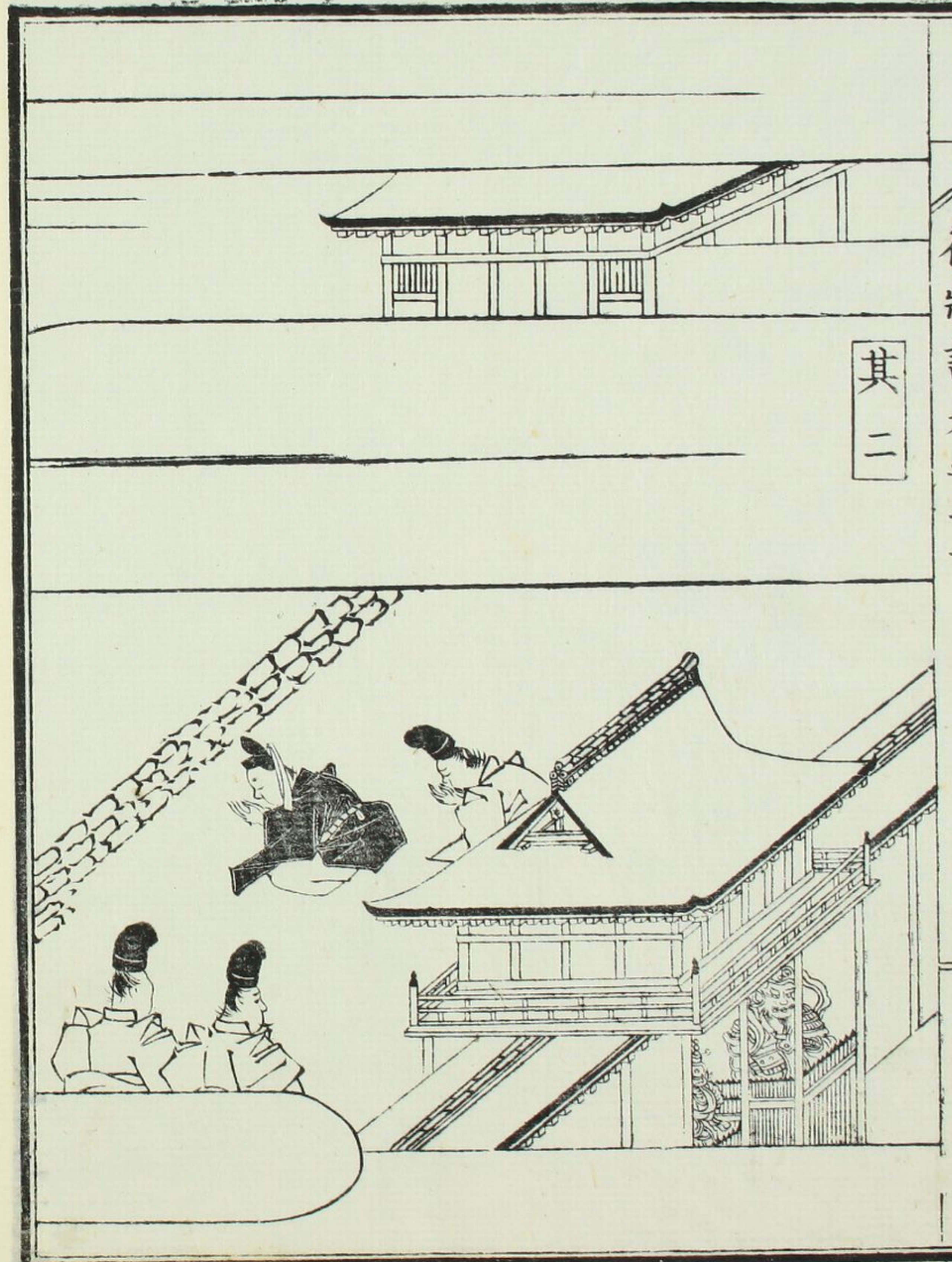
法成寺相國野  
僧正の教諭  
隨ひ南山二步  
三礼とまじ遠  
小生身と拜  
の圖



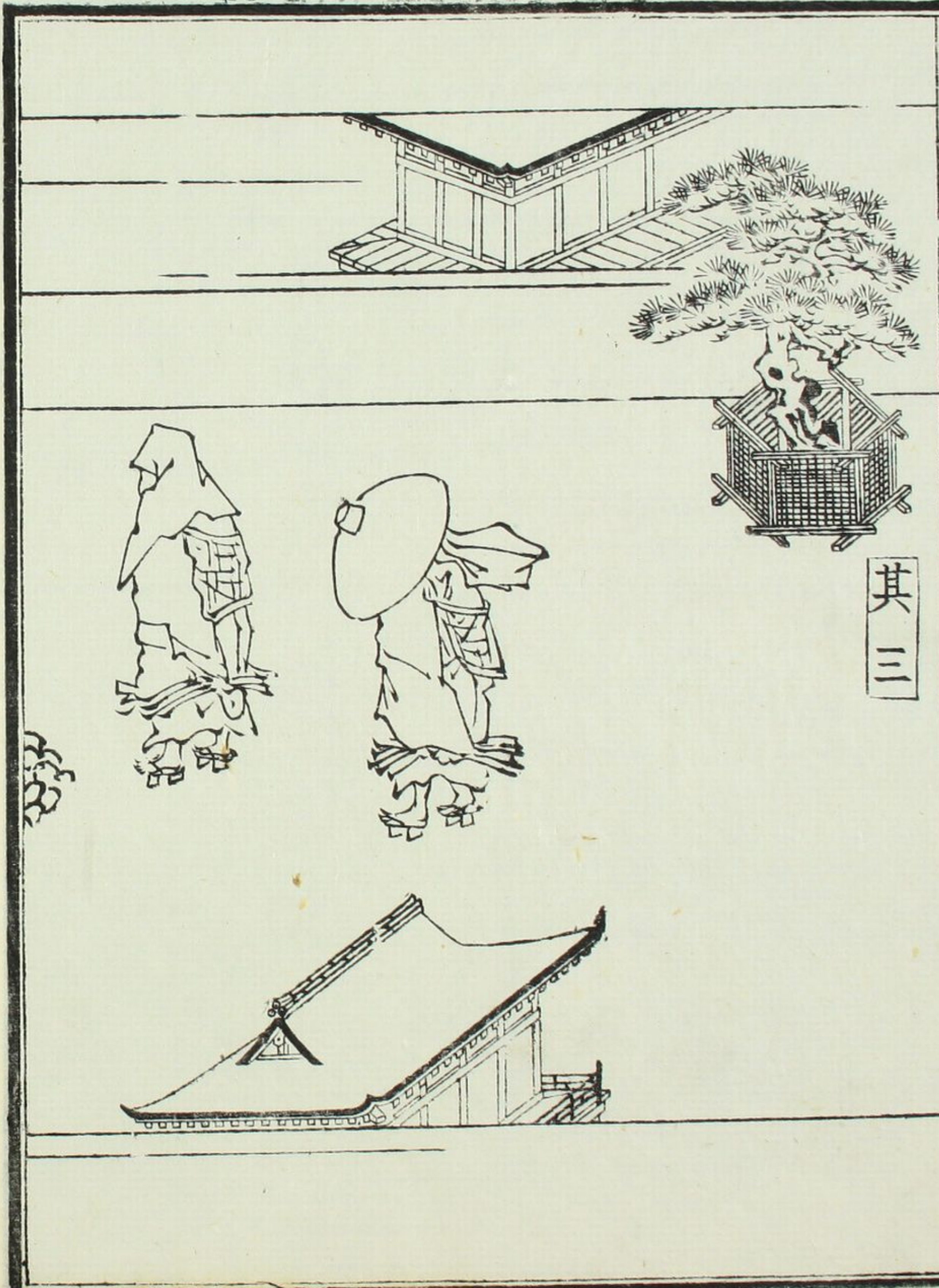
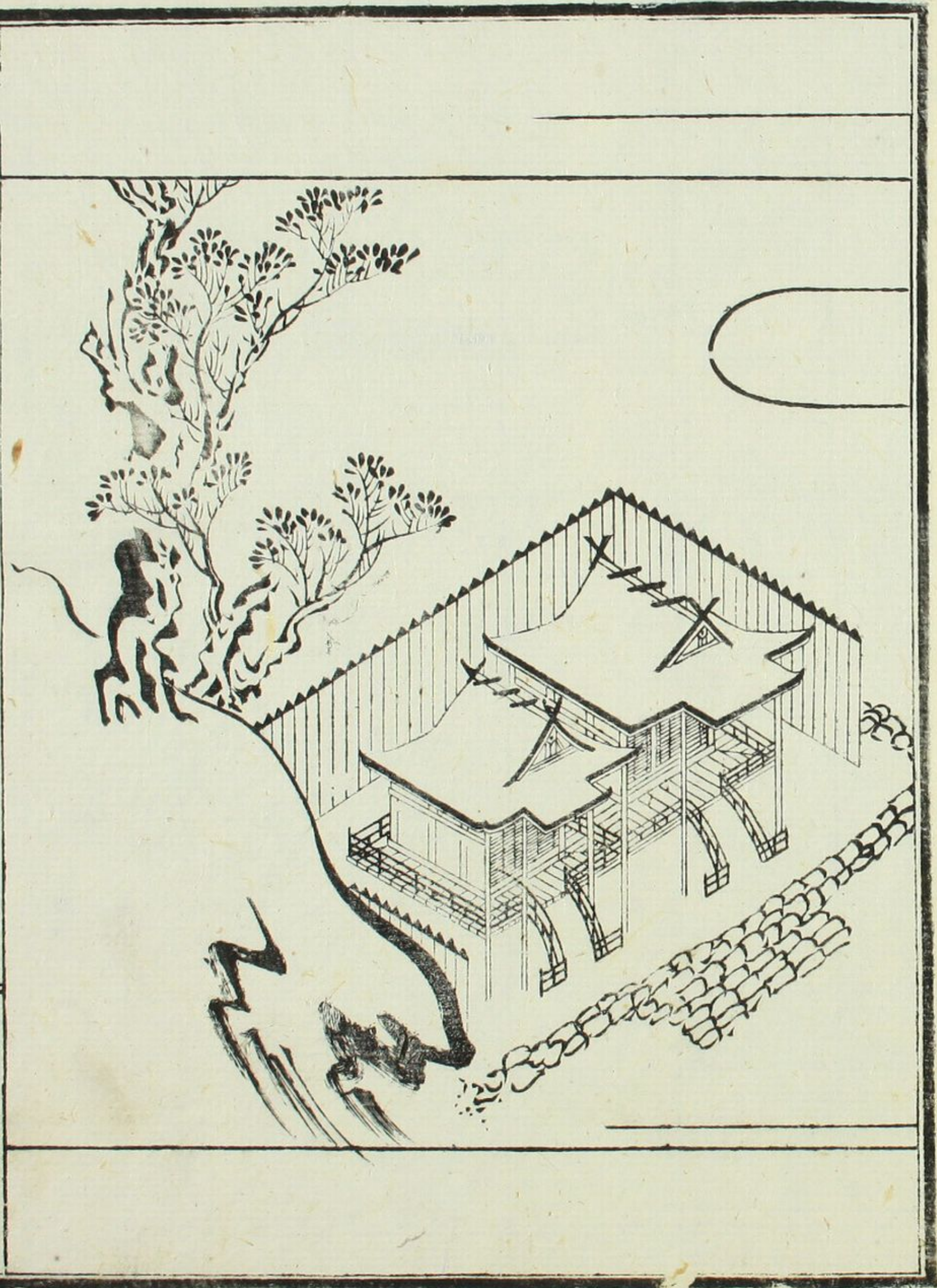




其二

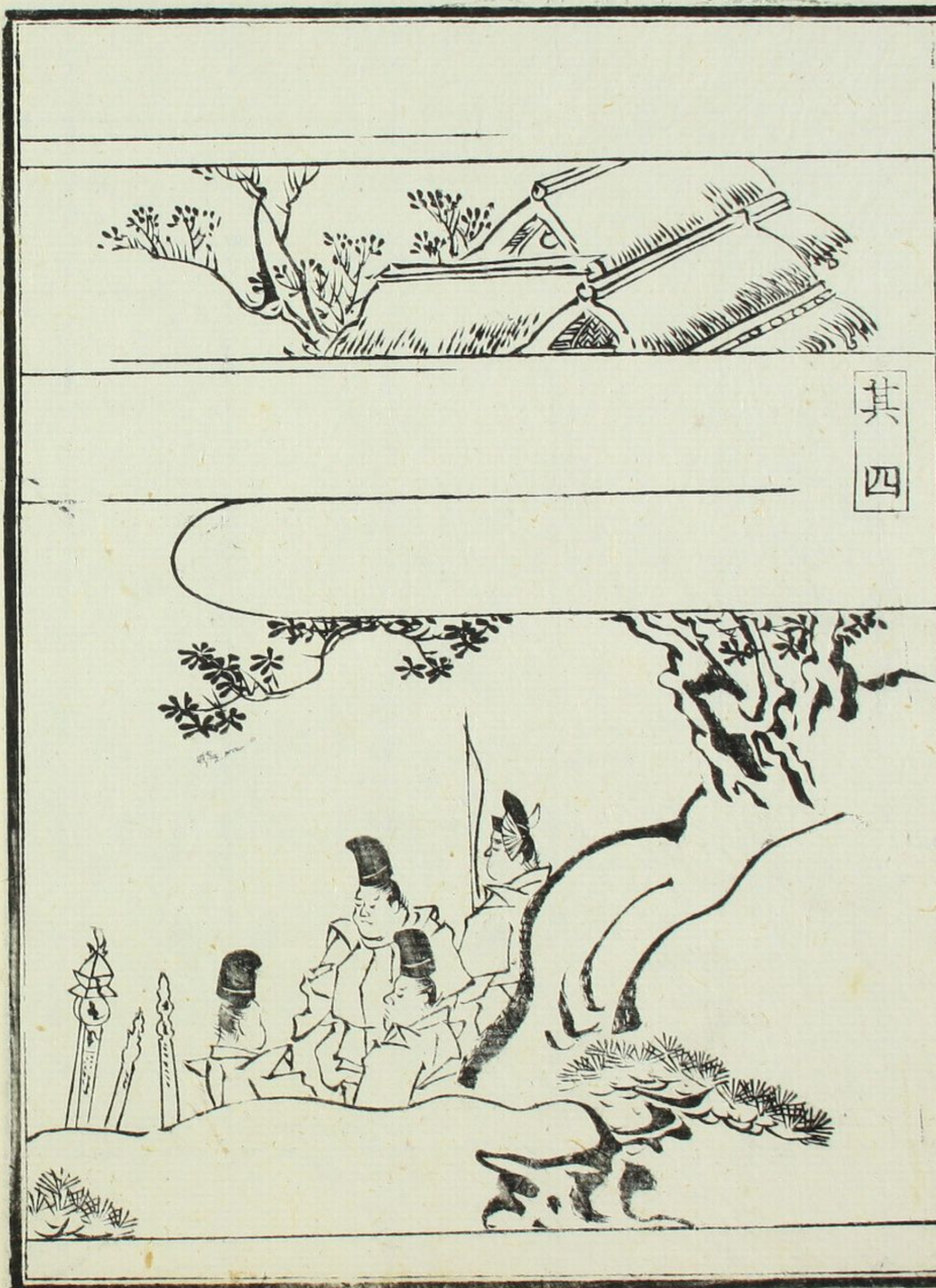
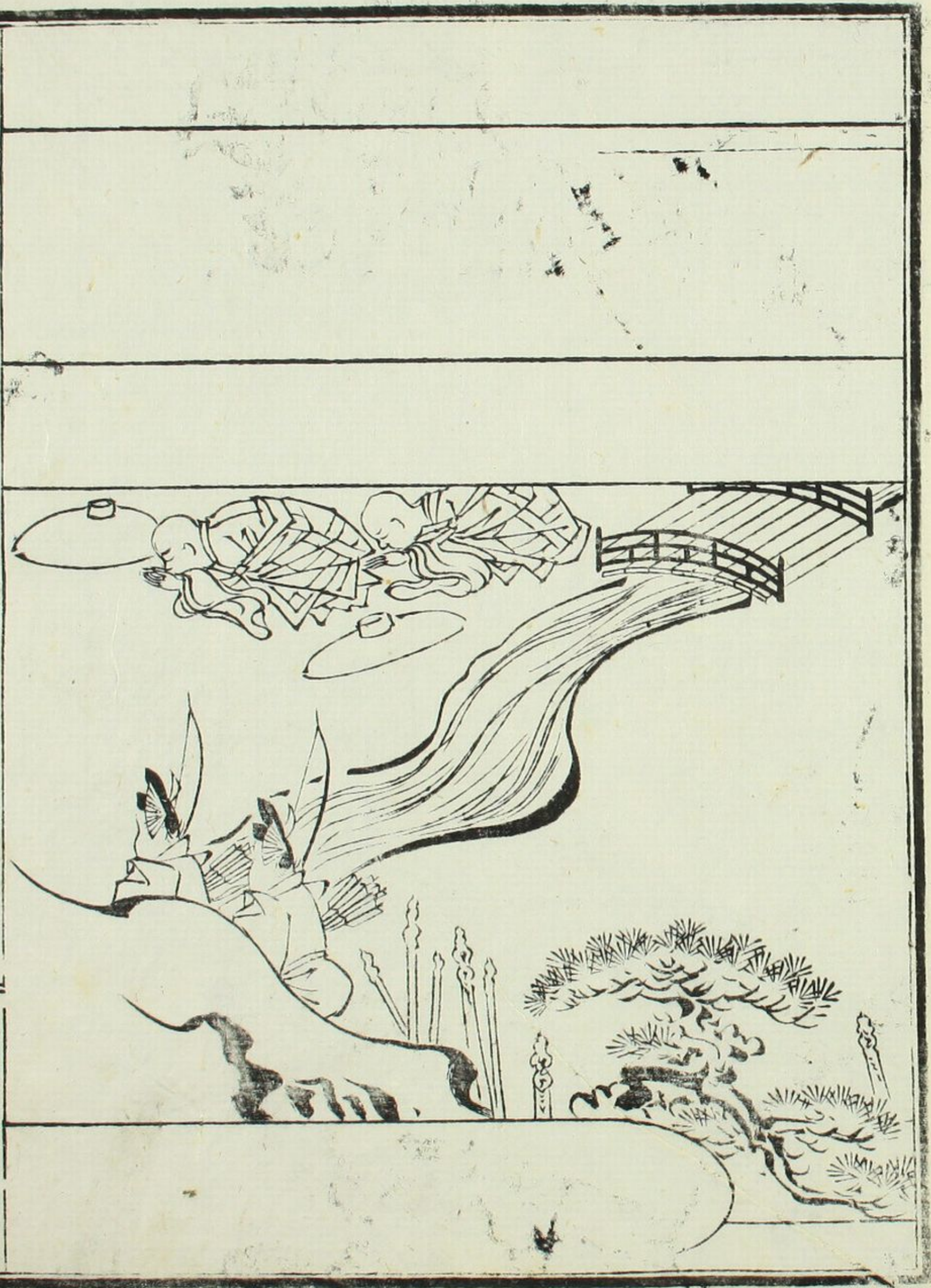






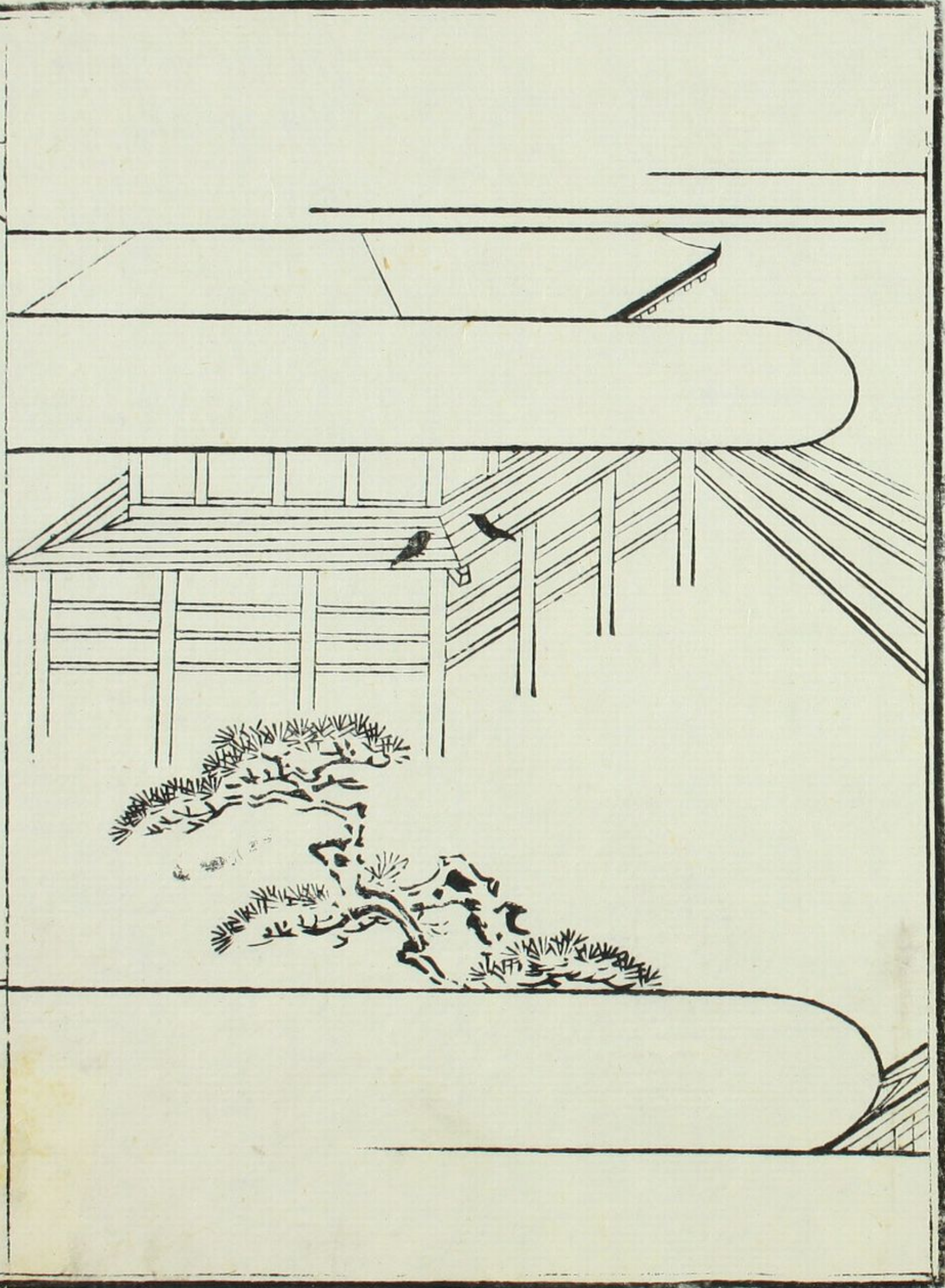
其三



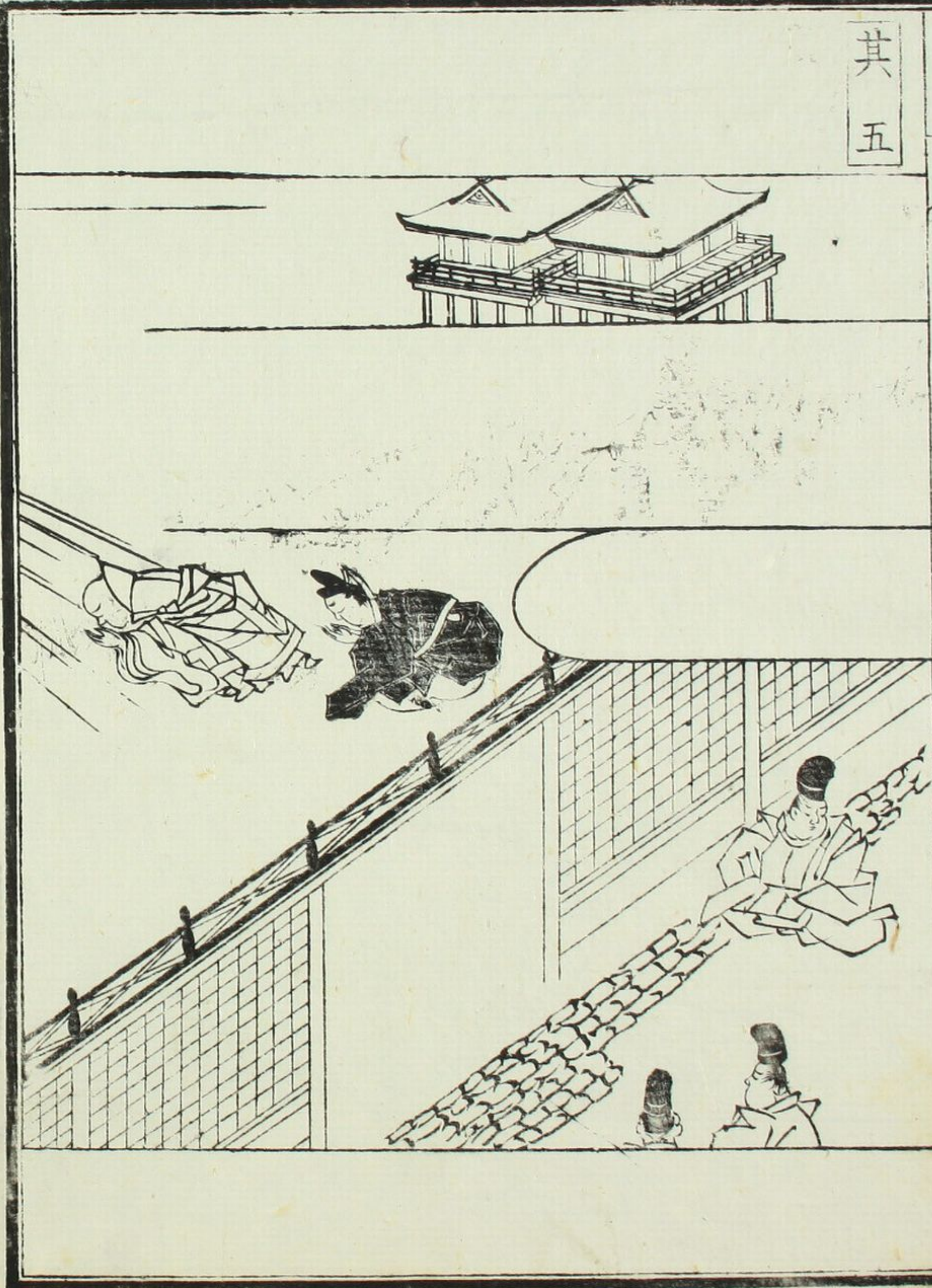


其四





其五





一給びなごう金才と漆一給びる。慶長と  
 の給ひ事んバぜんん禪園ぜんん脚泰治けんの清けんより治けんとほま  
 まさる治安二年十月十七日けん御出治ありて南都七  
 大寺けん清巡けん同廿二日けん言腫けんの清山けんより志けん清河けんの心  
 のふりとも皇院けん少のうらまご一歩けんら積けん才とせわ  
 心けんとつて入定けんの遷けん窟けんのせみ大けん終けんとかけけん雙手  
 と河けんはきて屋けんひさくけん窓念けんとありし給けん一  
 衆けん風窓けん汰けんらちて廟堂けんとほせ印けんけ船日けんの光  
 と發けんらぶととてけん禪けん座けんけらばとわけら  
 みくはと給けんひれ感嘆けん肝けん不けん語けんてけん悦けん涙けん袖けんとらふ

かせり渴作けんまよとに河けんのをけん任けん心けんむけんふけん一けん高時  
 此孫けん事けん末代けんの想けん模けんりけんとけんやけんあけんれけん時けん之間けん此けん終  
 堂けんと廟壇けんの赤けんよたけんてけんらけん合けん泥けんの法けん華けん經けん一けん部  
 墨字けんの理けん趣けん經けん二十けん卷けん三けん井けんの信けん心けん卷けんとけん漏けん  
 てけん藤けん師けんとけん一けん開けん題けん信けん表けんの齋けん造けんとけん展けん一けん共けんたけんらけんま  
 ぶけんりけんりけんりけんあけんれけんりけん代けんの博けん陸けんの賢けん治けん治安  
 の佳けん濁けんと尋けんてけん兼けん治けんの光けん依けんとけんのけんへけんるけんはけんぶけんさ  
 よ志けん於けんまけんとけん違けんあけんらけんばけんまけんとけんにけんいけんんけんどけんかけんらけん一けん事  
 ざけんらけんあり

弘法大師行狀記卷之十一終



弘法大師行狀記卷之十二

高野山金剛峯寺と峯八葉少座びへて華苑と  
 心海小鏡ト心友部とくはて曼荼羅石壁と  
 弘法大師結界の文と云ふの東南西北維上下  
 一切正法と名づる毘那耶迦り  
 此悪鬼神等と皆悉我結界は七里外に出  
 去若正法とまりん若鬼神等我弘法のたす  
 利益ありし者ハ悉くあつてまは伽藍  
 位一擁護とすべし相兼の金剛峯法門

行狀記卷之十一







して淨刹とらるるをたがよの御あり貞観僧正  
 の書記の詞も周匝より連筆ハ法仁の華蓋と表し  
 正平たる幽系ハ他仁の浄土小類と悪人ありに趣け  
 は愚谷小入がとおく毒獸情とひくくひるる金  
 比島小似たり纒も彩とさす物と信因と悦べ一  
 して止そのハ希業と恨べと書まする誠も故あり  
 そのややおやくを甚山一類の石と満人と却と後  
 七劫思趣は苦報とまぬくべきひん殺泥酒乃言  
 典ふ出たり彼ふがやうくあるは成おりのよ曼荼  
 信の果峯衆聖都令の幽窟一境一瞻との益をお

うるべし若ハ仍若ハ任務利豈むかーびんや  
 小よりそ 白河院の時時を智の雲客 浄  
 程候もくまよりなるふくしく浄雑の  
 勅定ありまふけ 日本玉邊鄙粟散の境ありと  
 いへども 我玉主する天下に自在と得たり高時  
 如來法在世ありまよは天竺はらひ遙ありと諸王  
 の王の中あり系法あてじ物と 作出されたり  
 あれが江帥匡房卿 浄前小儀多う恐るるこ  
 ありい惟へどもまよ 勅定いふ河るべき儀らむ佛  
 法在世ありま持儀もいども 我玉の内よ果地務り







平子多丸武者所小假して銀の水角と申すは  
 又権信正仁覚権大僧都澄明権少僧都寛意廂堂  
 乃法會と申すは羈旅の護持といふ事なり  
 同道と経て共々中華と稱す是皆多世もとの河共  
 ありて外系出の供奉人ありて攝政  
 内大臣左大将 師通 按察使実季右衛門督 俊明 左侍物  
 保実 左大辨匡房侍従実隆以下卿相雲客數と法  
 くして 為儀と申すはたゞしつ活きては  
 としはありて尚日午刻小 上皇平常院へ  
 入河按政河る是より河劔とてまづらふ 上皇又

河を按政少致きりたり今日ハ南無  
 河一宿東大寺別南慶任法下が住房東南院  
 河苗あり東大寺無後也 河巡禮あり廿三日火打  
 河へ 恙河廿四日ハ高野法政所へ法う坊給ふ本  
 河河等玉司河和と儲く縁とけり茵とく又  
 本は假橋と申すは多く難人等法後を刻意尋院へ  
 入らせ給河堂の水也と河取と民同廿六日の世法  
 刻小 河歩仍あり 河登山あり萩の中より  
 よりて信長以下松明とて経権大納言師志仲実弱法  
 時 為儀と申すはたゞしつ活きては



仙院臨幸

白河上皇南山  
御幸の圖

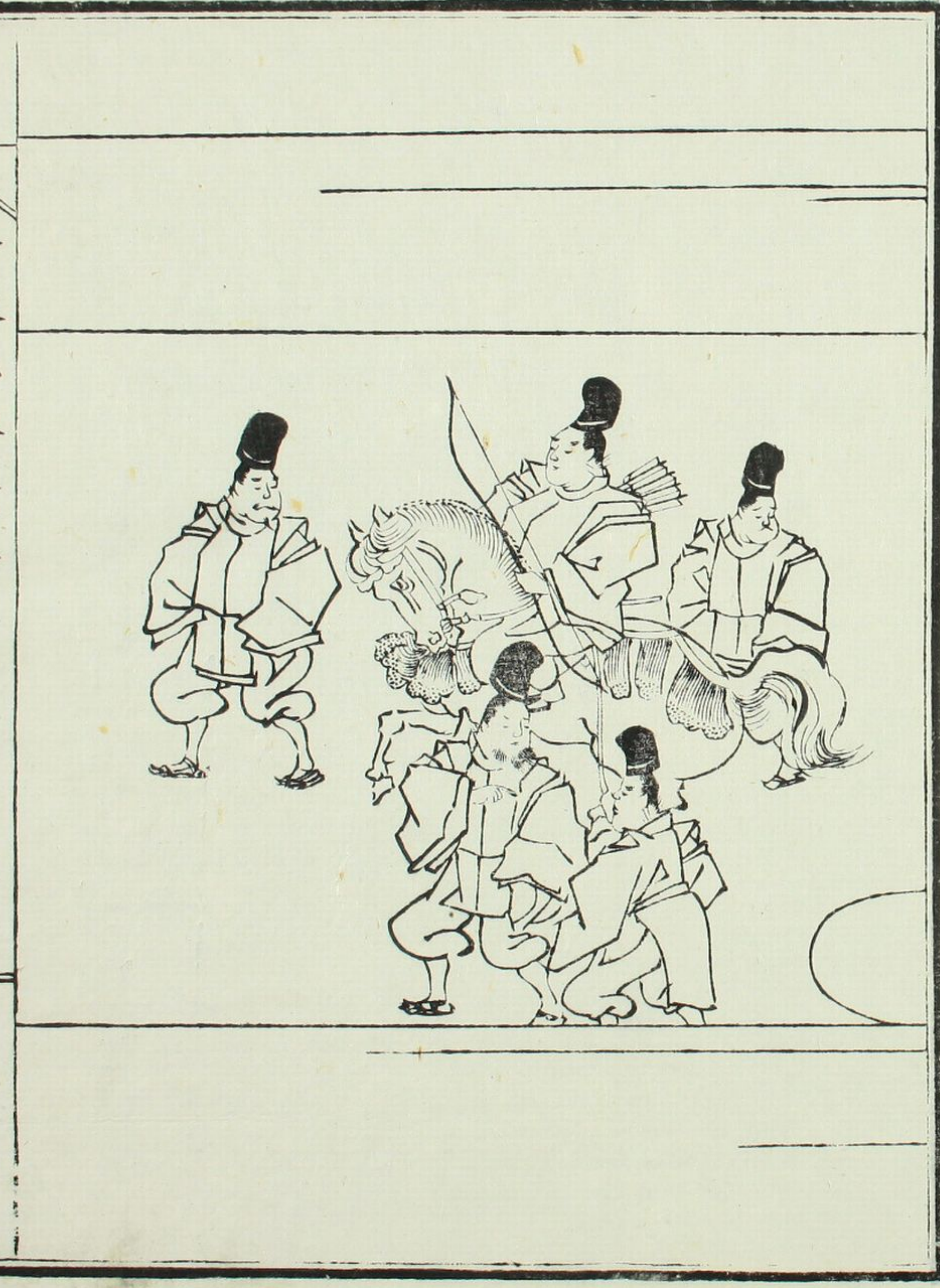


行狀記卷之十三

五

行狀記卷之十三

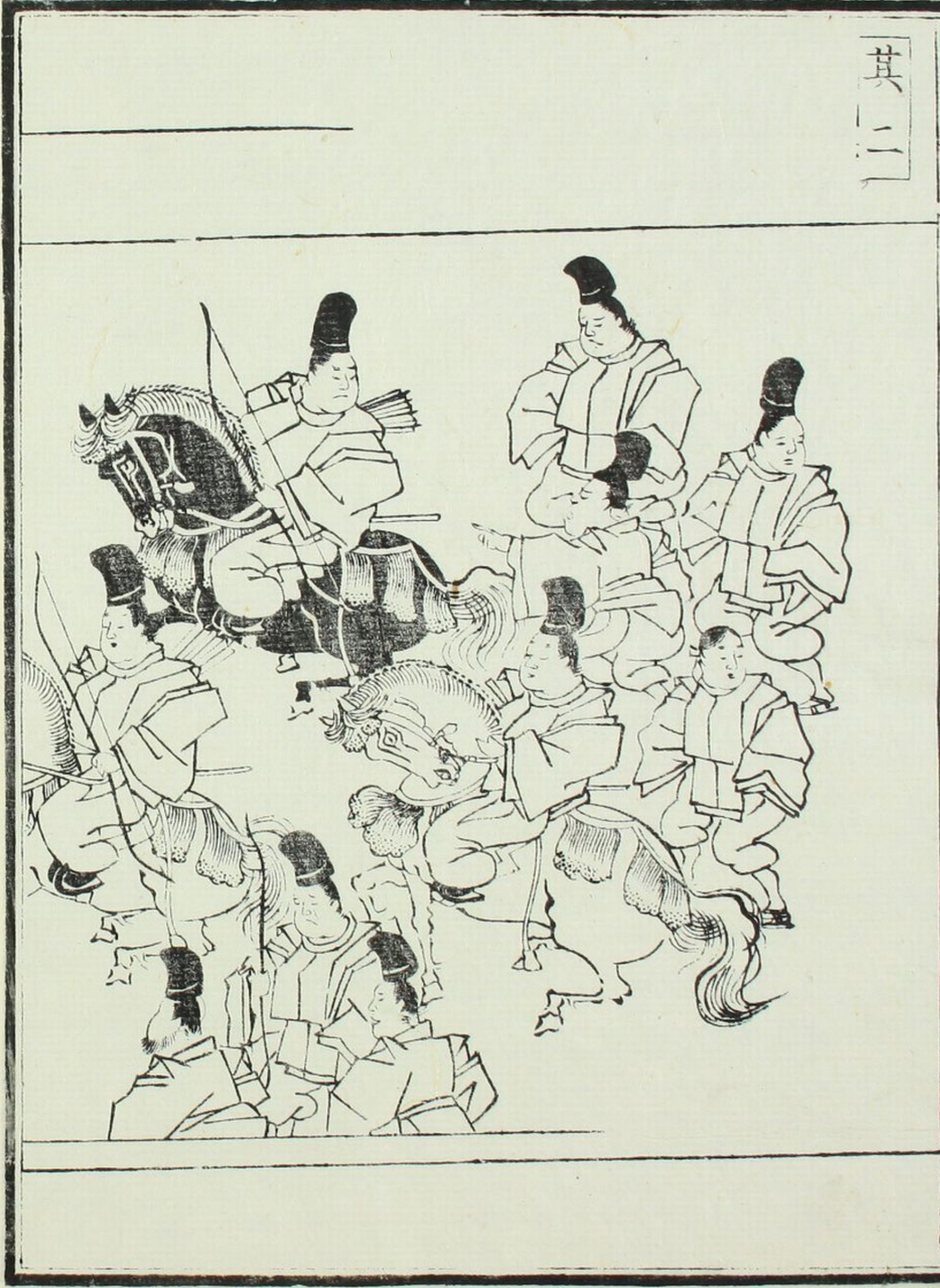
六





其二

行狀記卷之十三



行狀記卷之十三

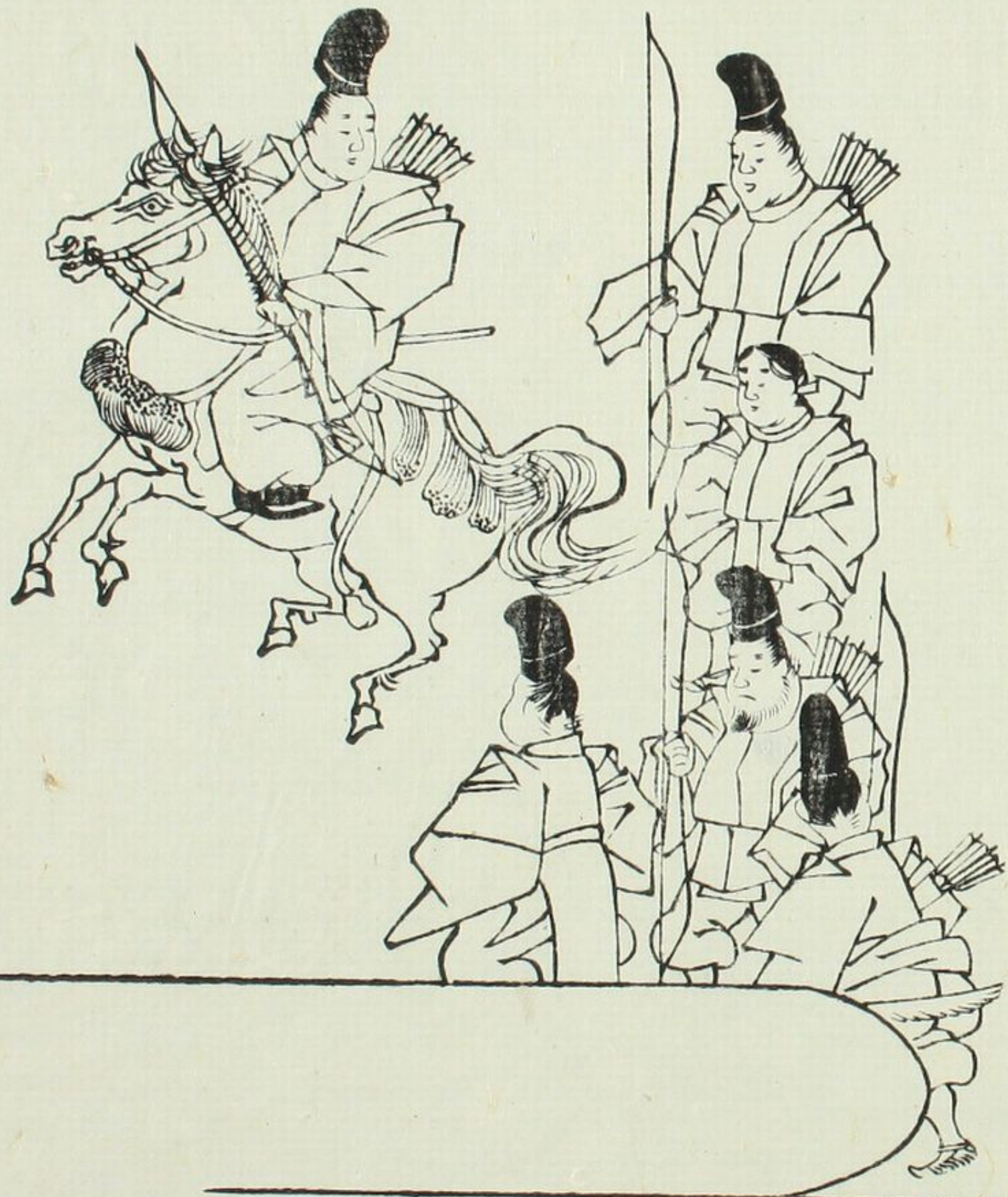




其三



行狀記卷之十一



行狀記卷之十一



其四

行狀記卷之十二



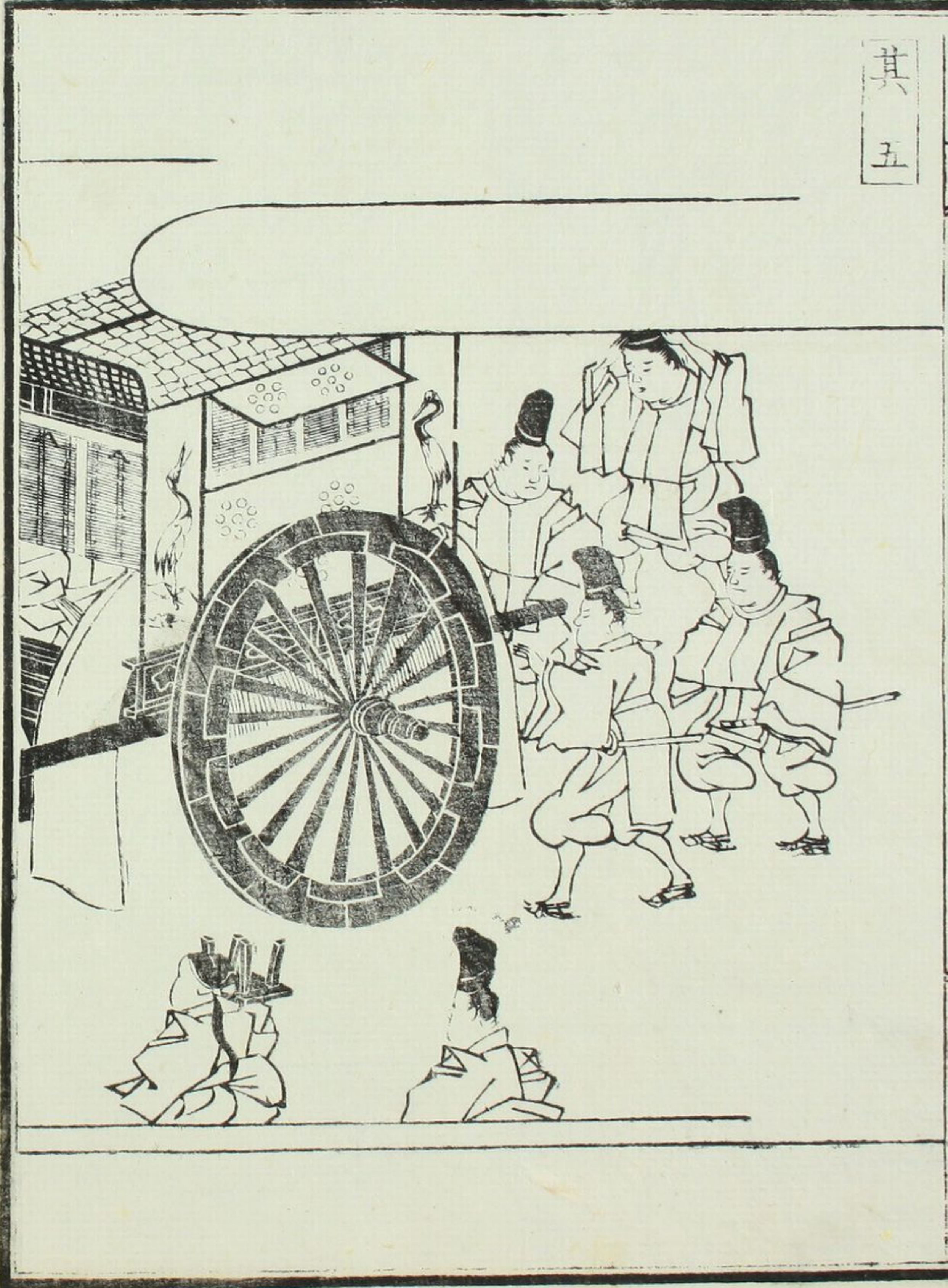
行狀記卷之十二





其五

不辨言卷之十三



九



行天記卷之十三



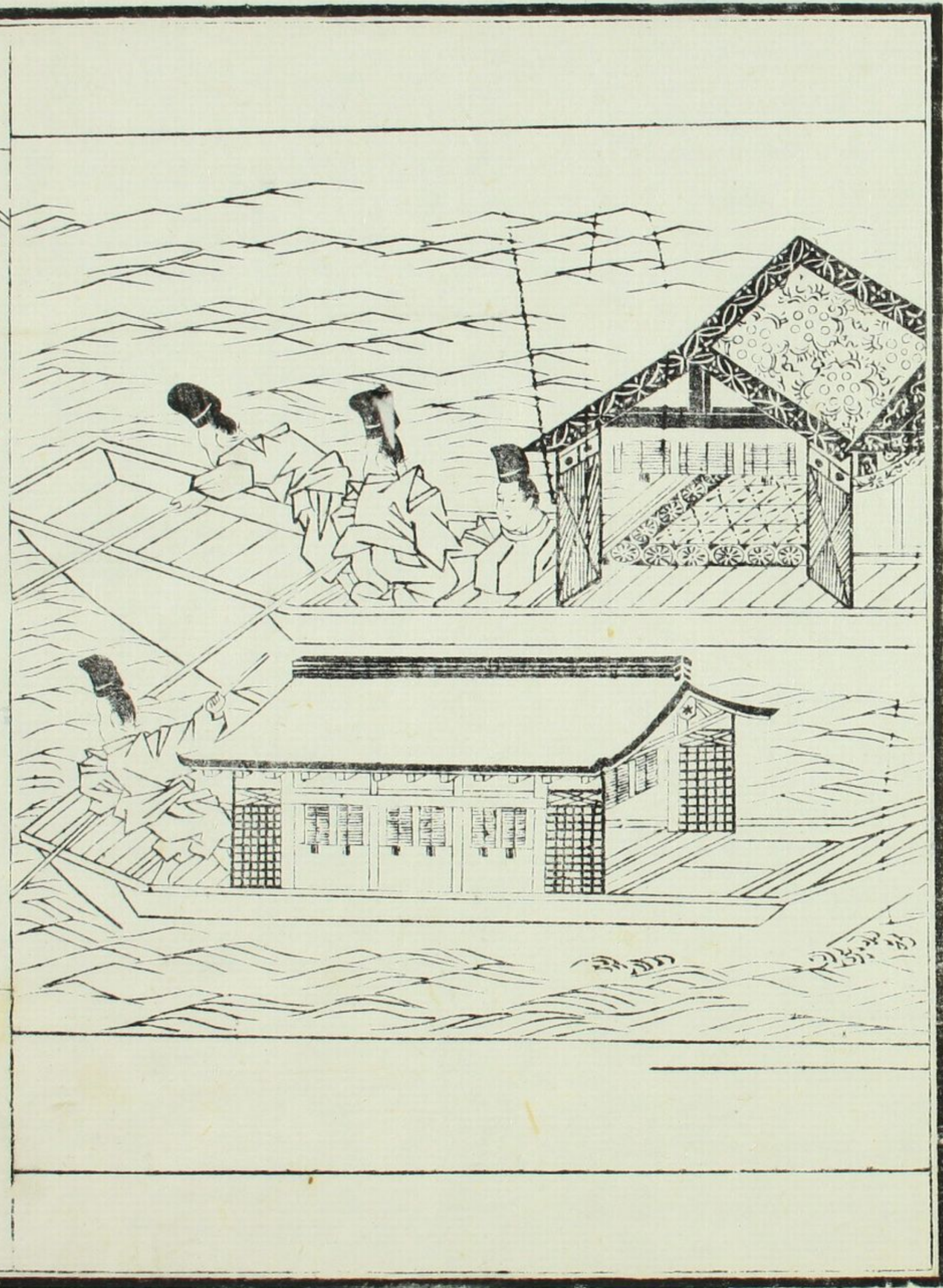
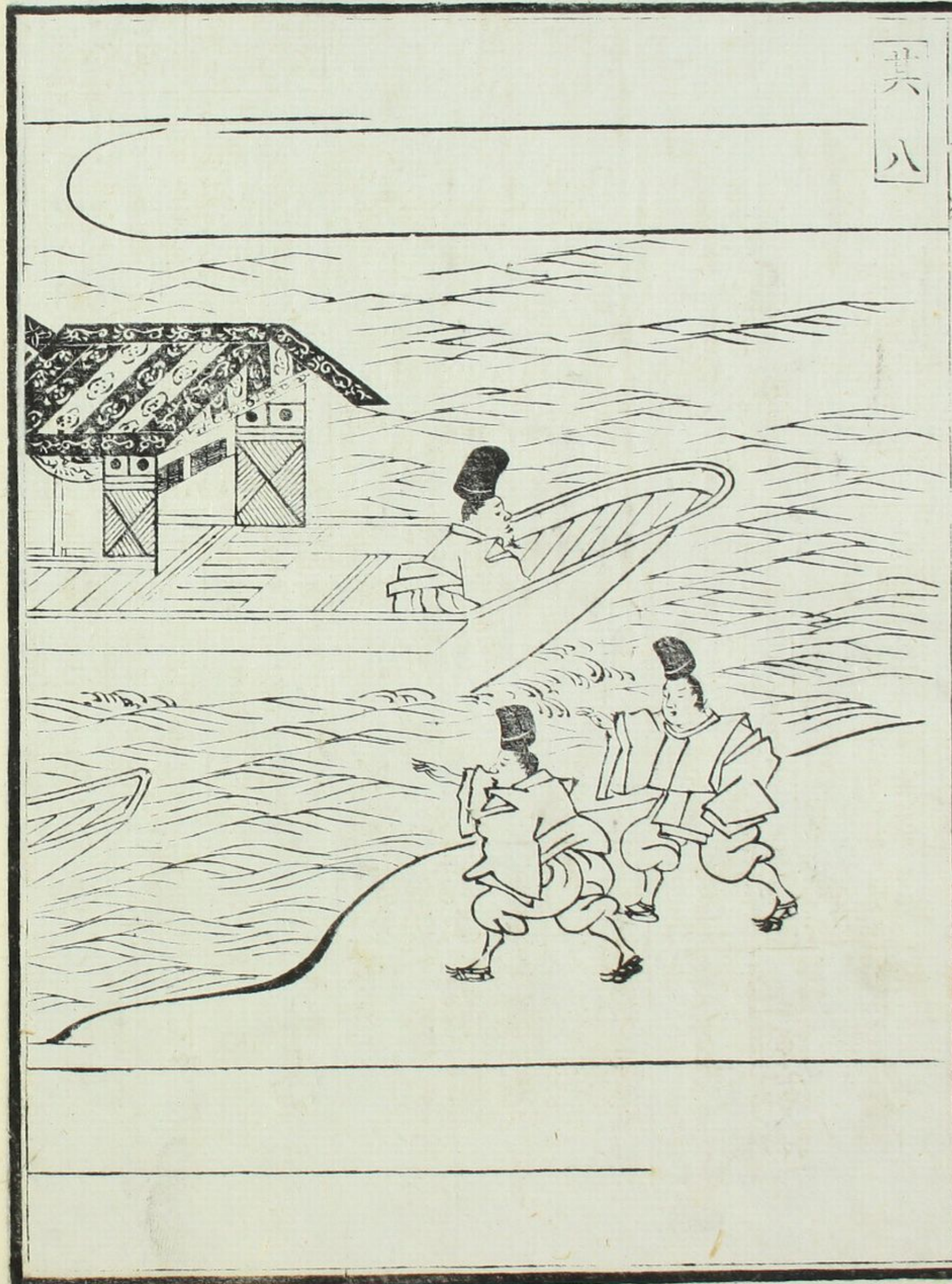






其七







其九

行狀記卷之三



三



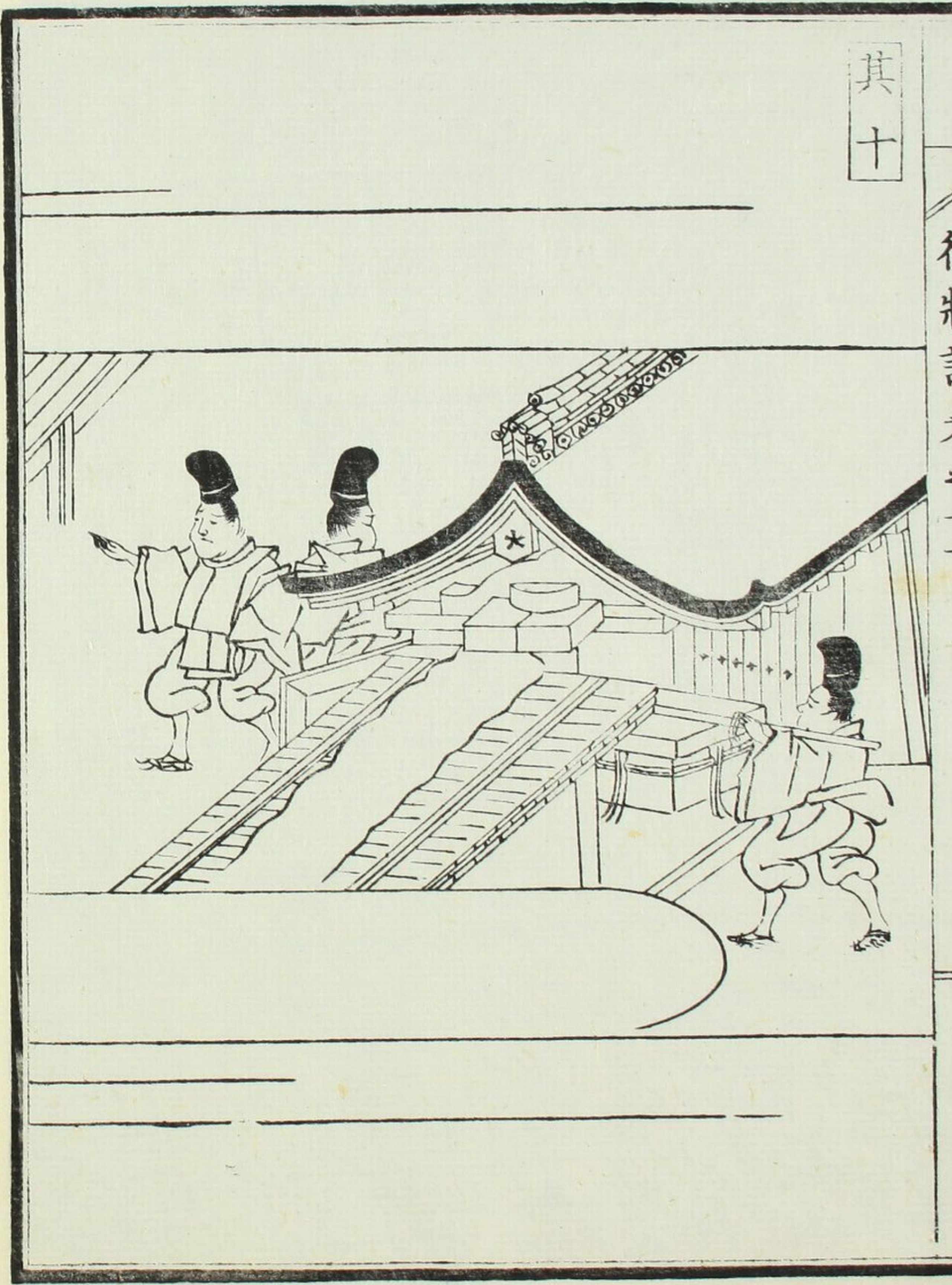
行狀記卷之三

三

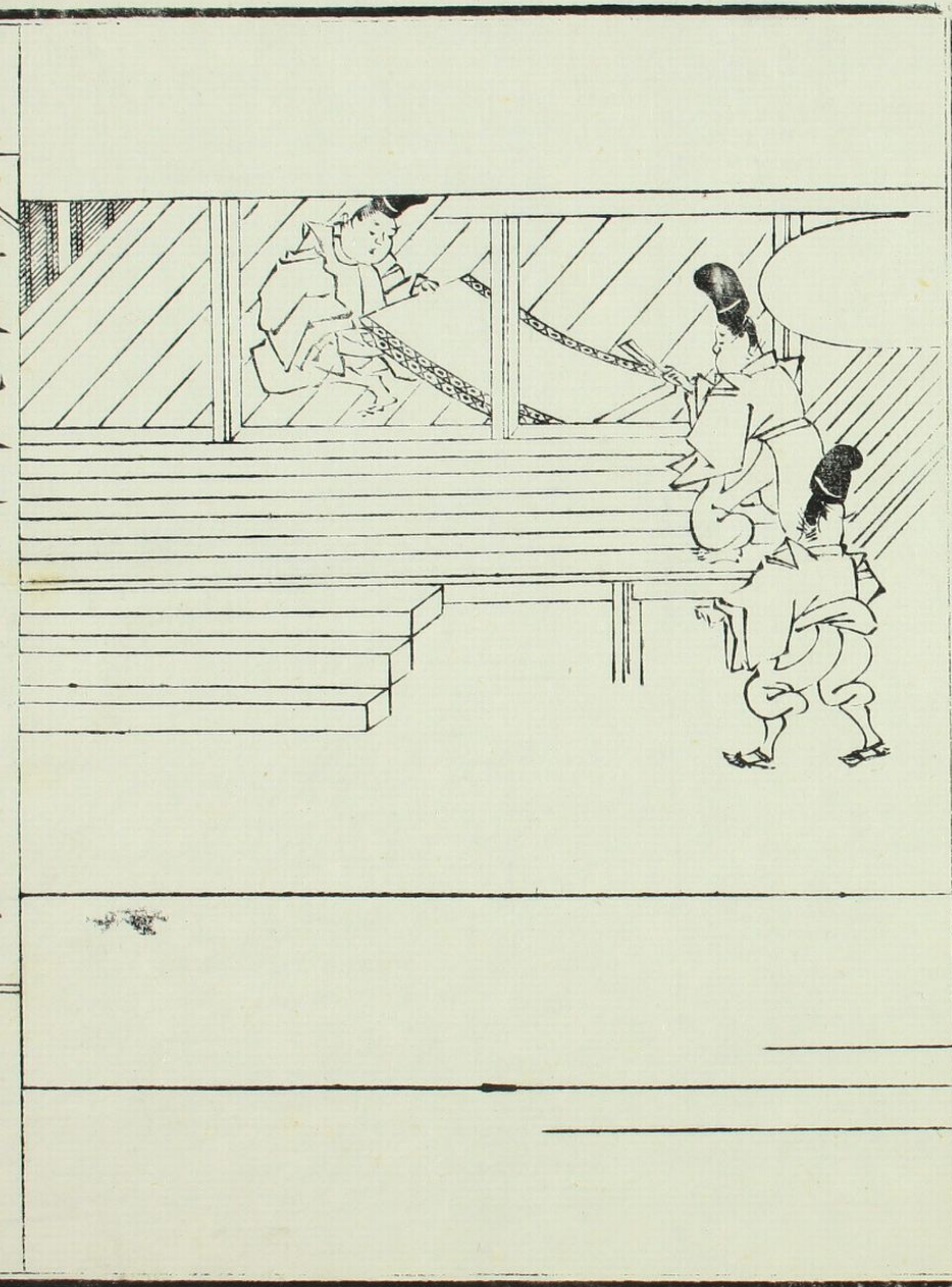


其十

行狀記卷之十三



十四



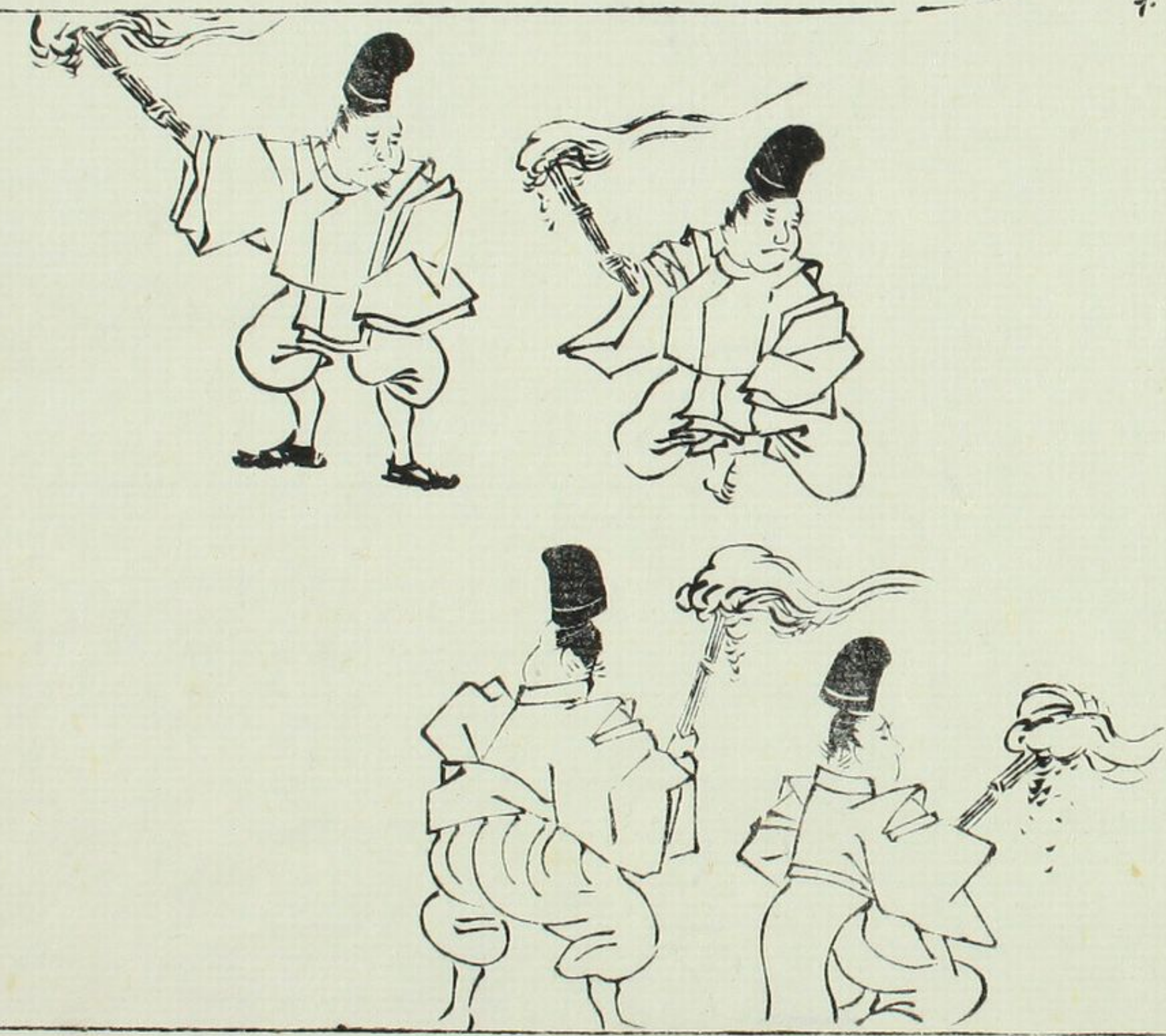
行狀記卷之十三

十四





十一



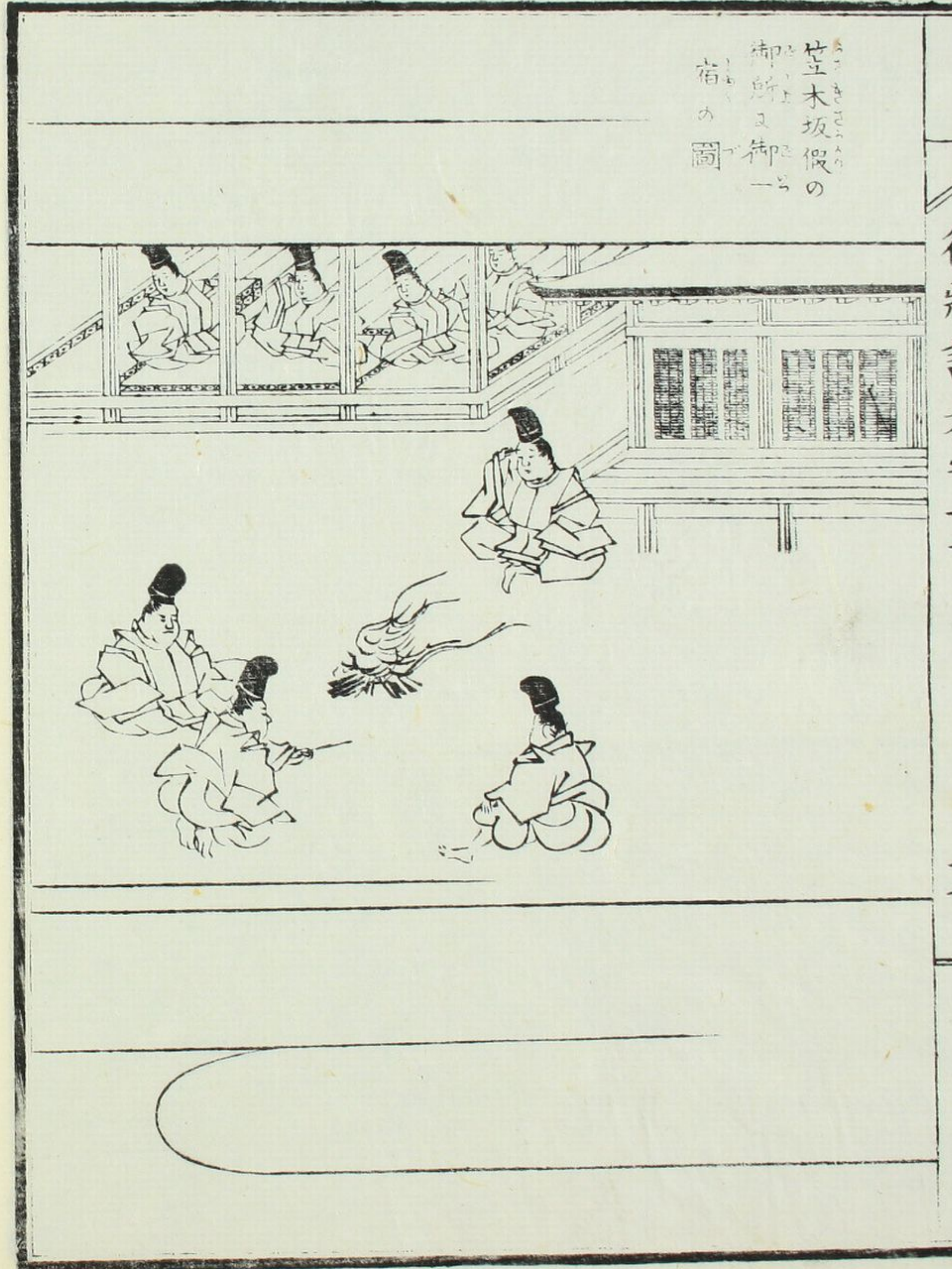








笠木坂假の  
 御所又御一  
 宿の圖









都定賢之禮持少保都寛意なり頼昭澄成永尋維寛  
 頃散花等の役とつとむし時皇城と解して道と改し今  
 子の惠達太子とりし時皇城と解して道と改し今  
 太上天皇の寶位と抛て具源公攀踏性昔未聞将来又  
 可鑑其の詞のまじにたまはるるに隆明才つらう海江と  
 貴妹源とのまはるる事なり一風月の金句  
 みゆりゆども道理のゆり感志とともやす故なり  
 比間公家より頭中将源雅俊物はと  
 御補佐物とたてまつらふ又  
 とりて勅賞と  
 仰うまにいの阿闍梨と坐て傳法流

白河上皇

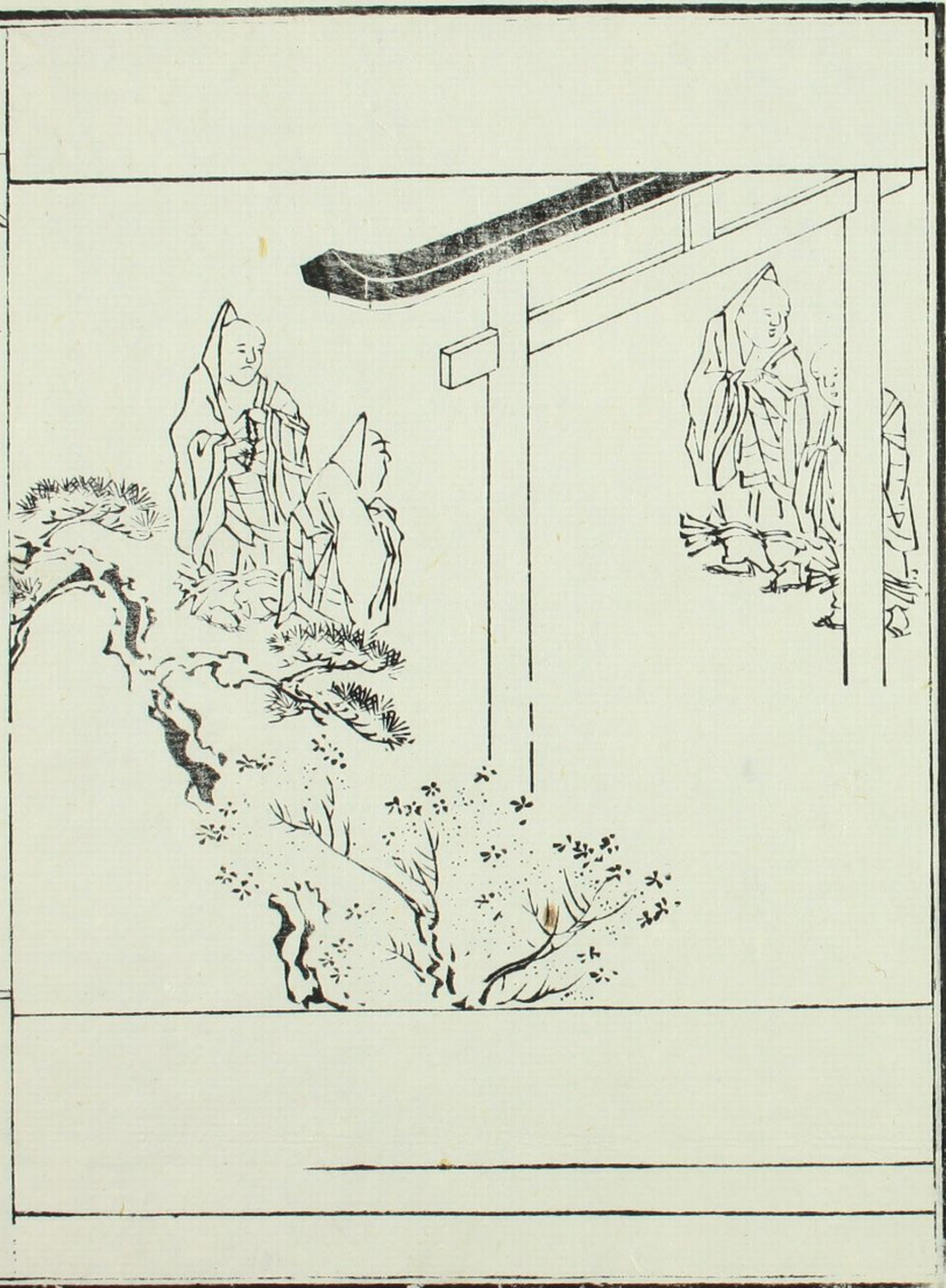
高野山

中院へ入御の

圖



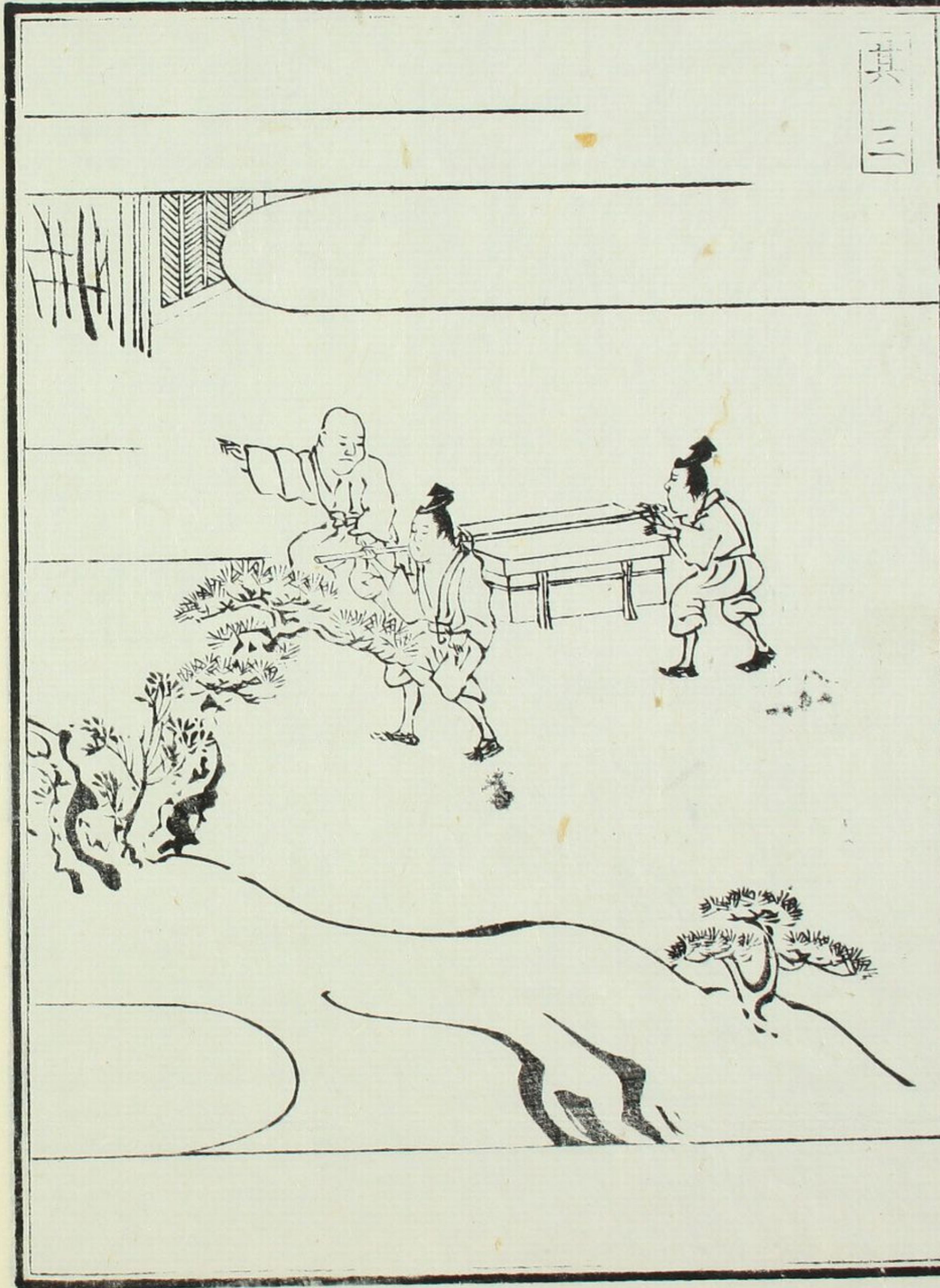






其三

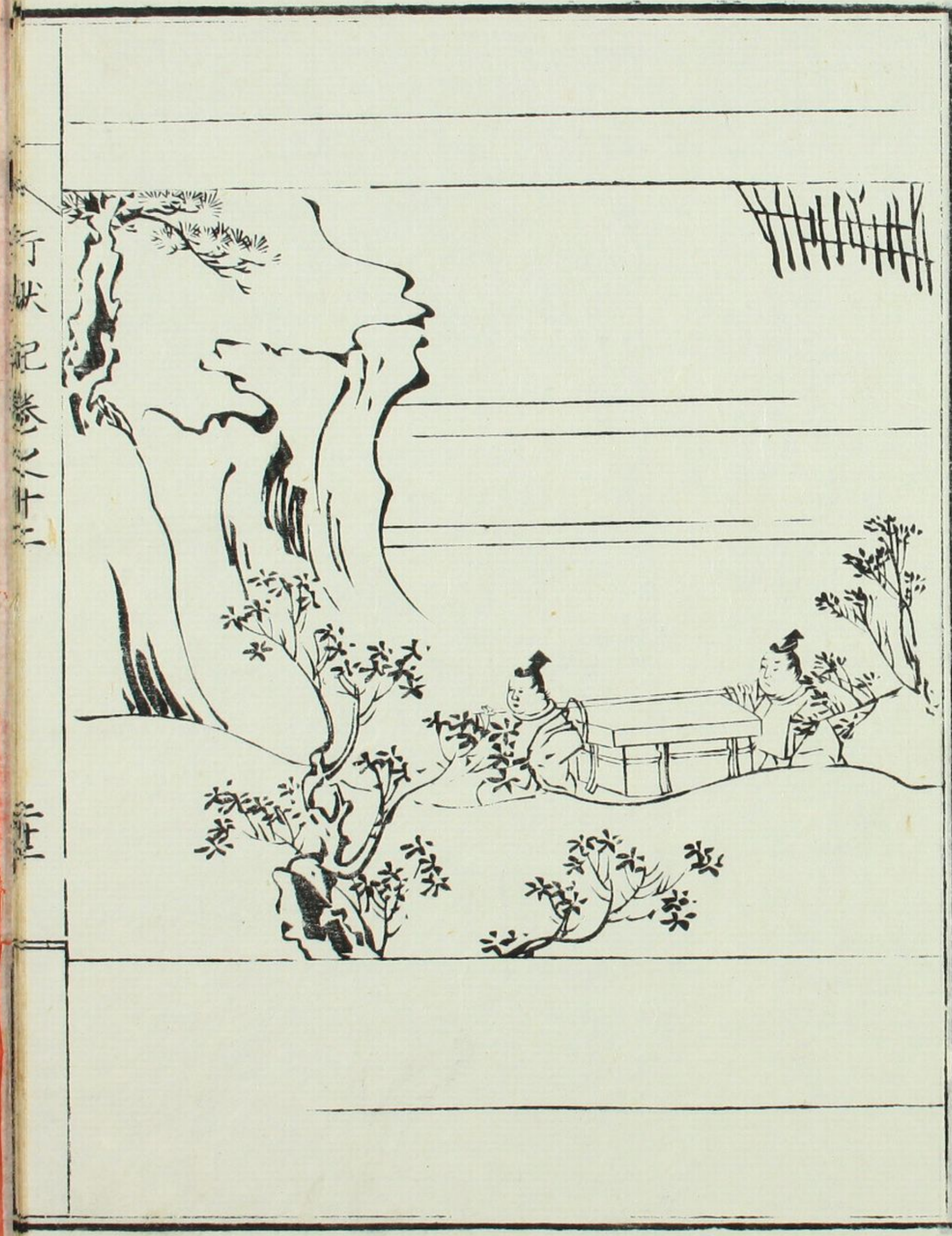
行狀記卷之十三



三

行狀記卷之十三

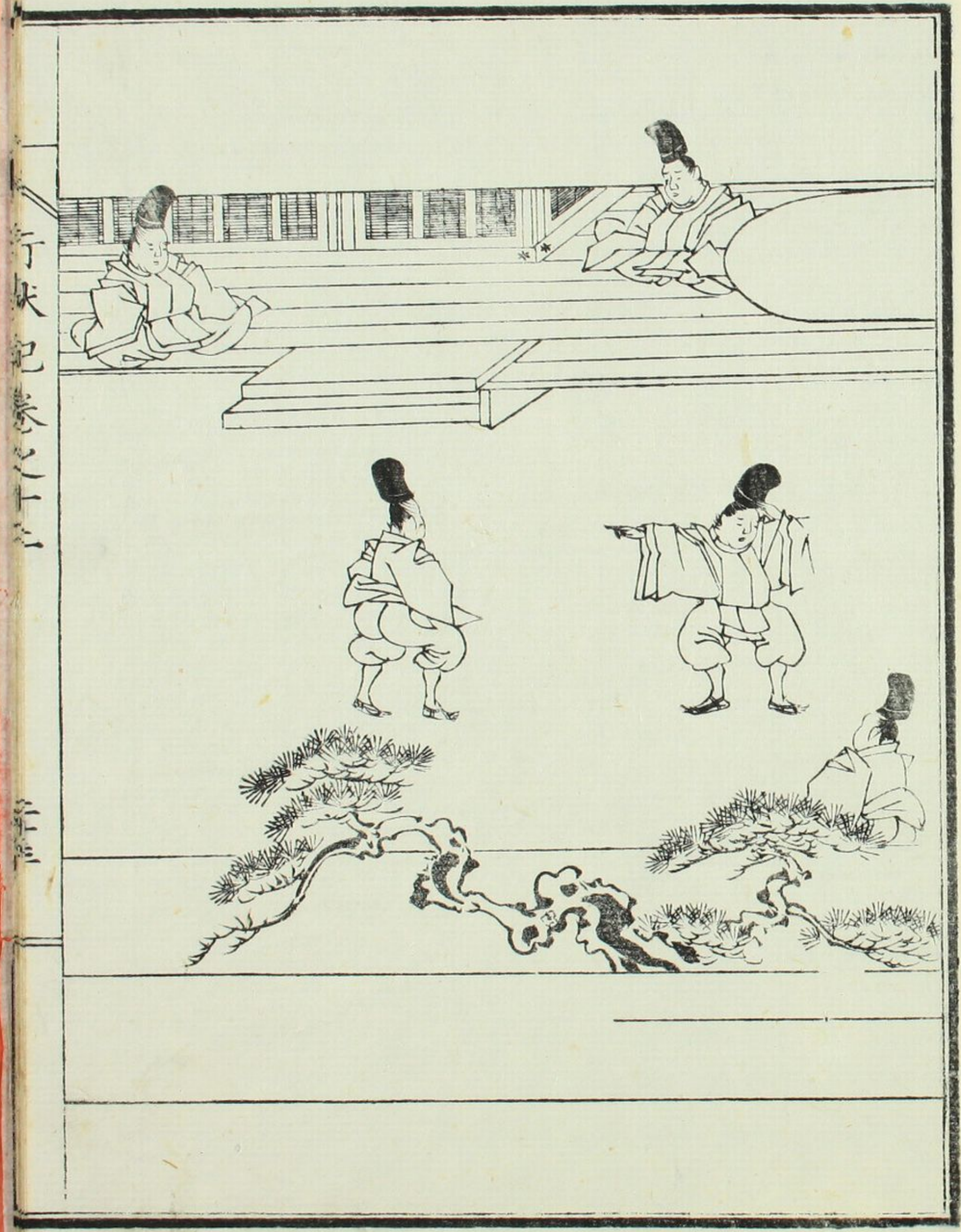
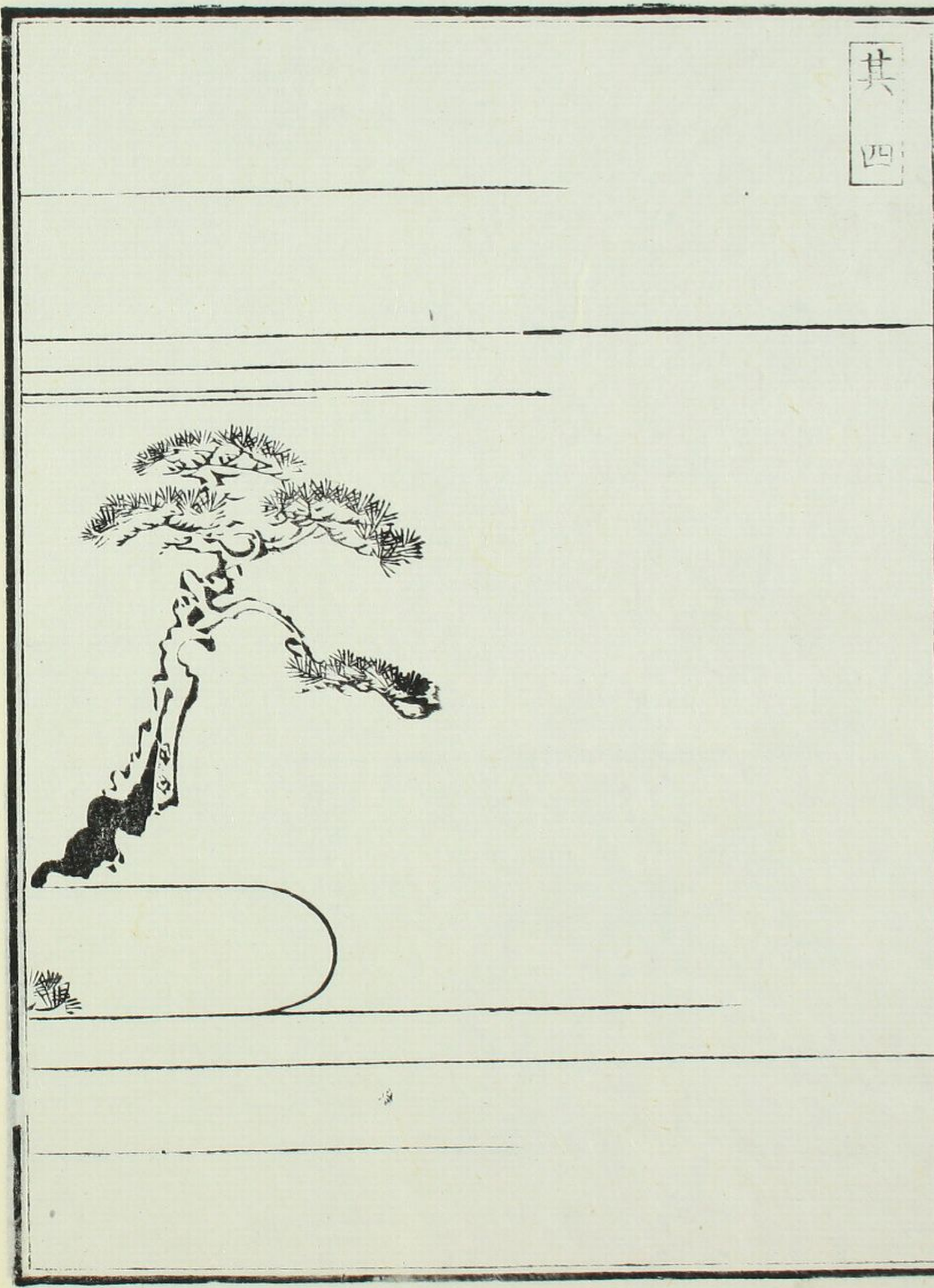
三





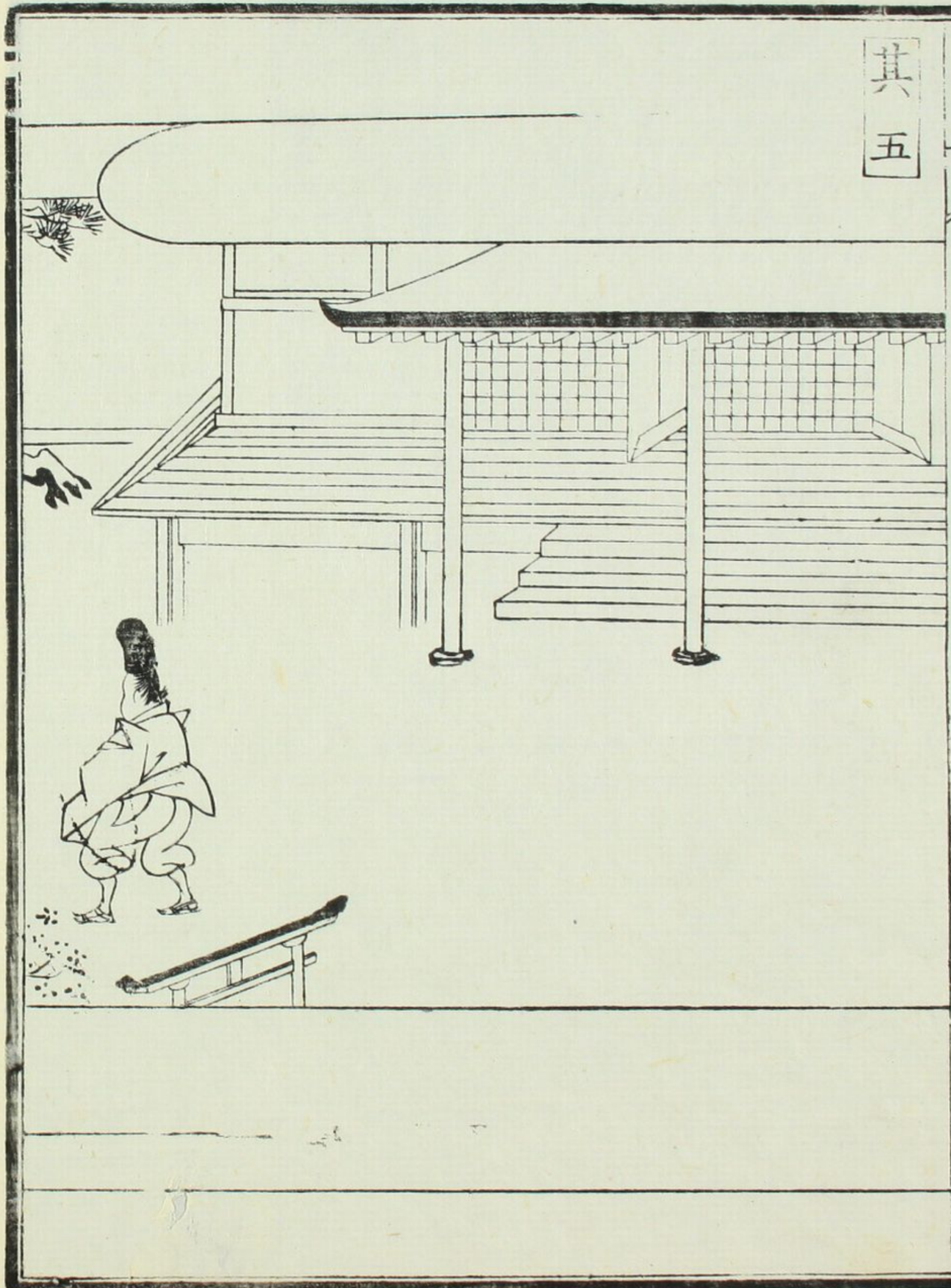
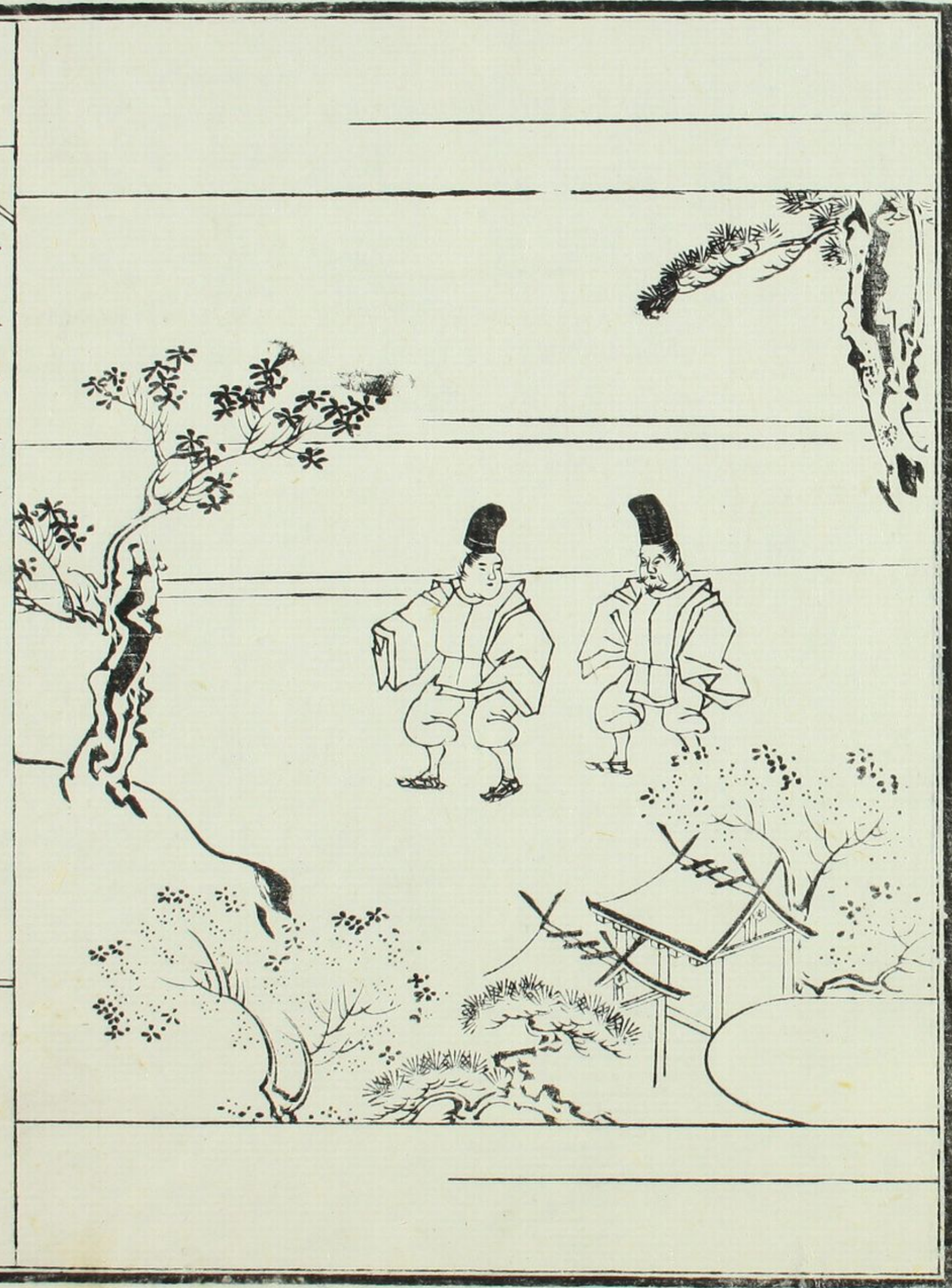
其四

行狀記卷之十三

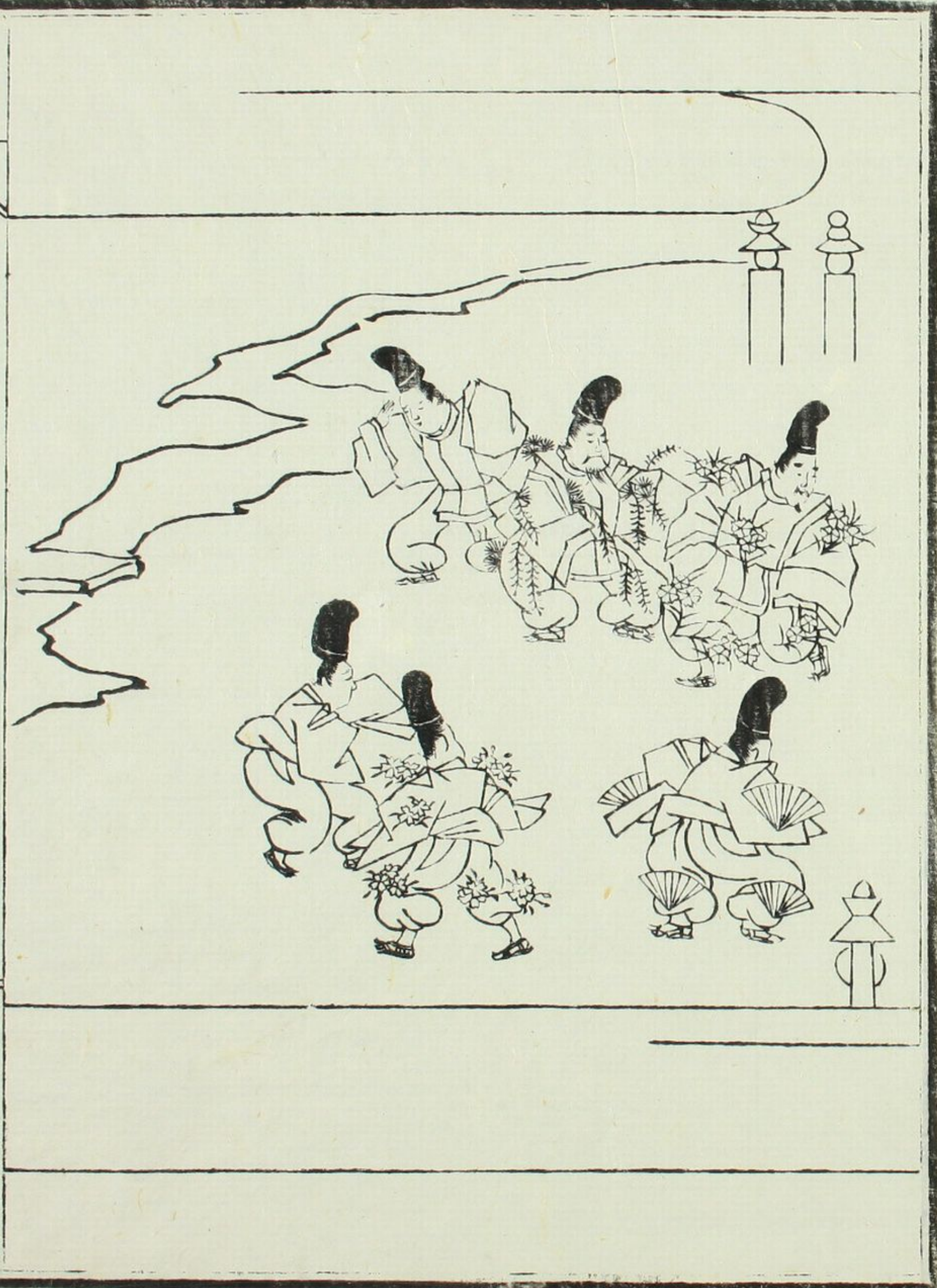


行狀記卷之十三

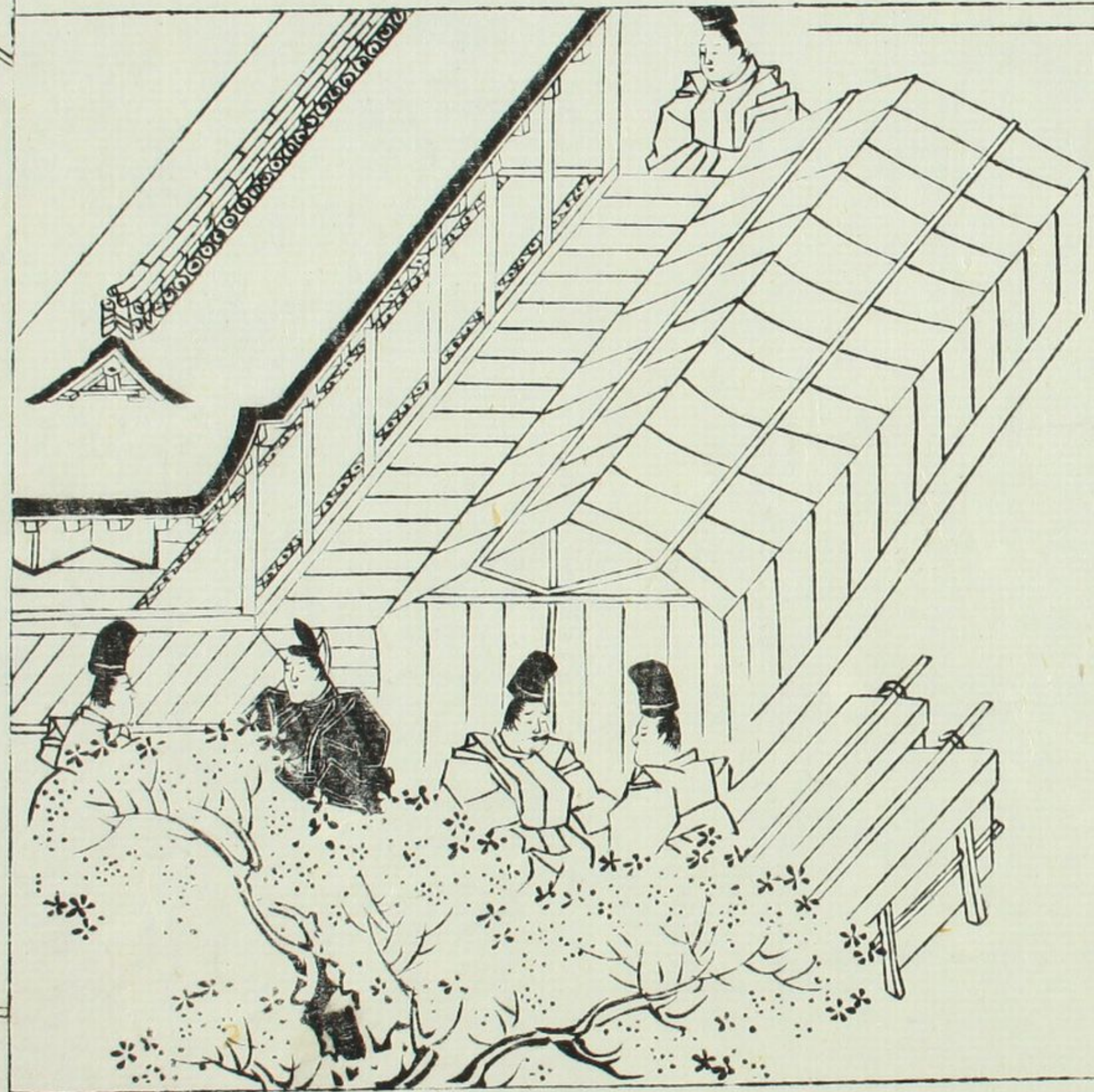




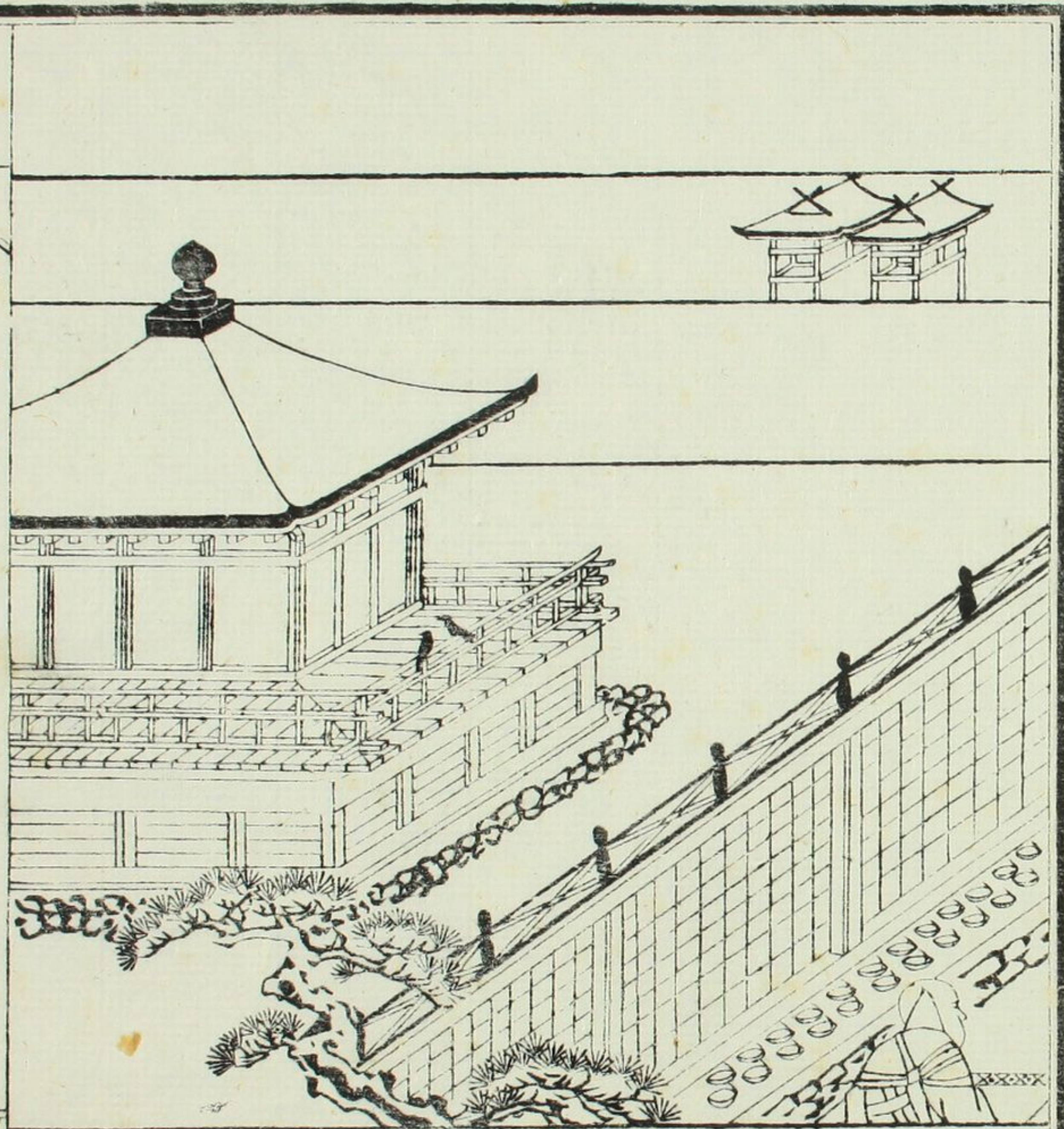




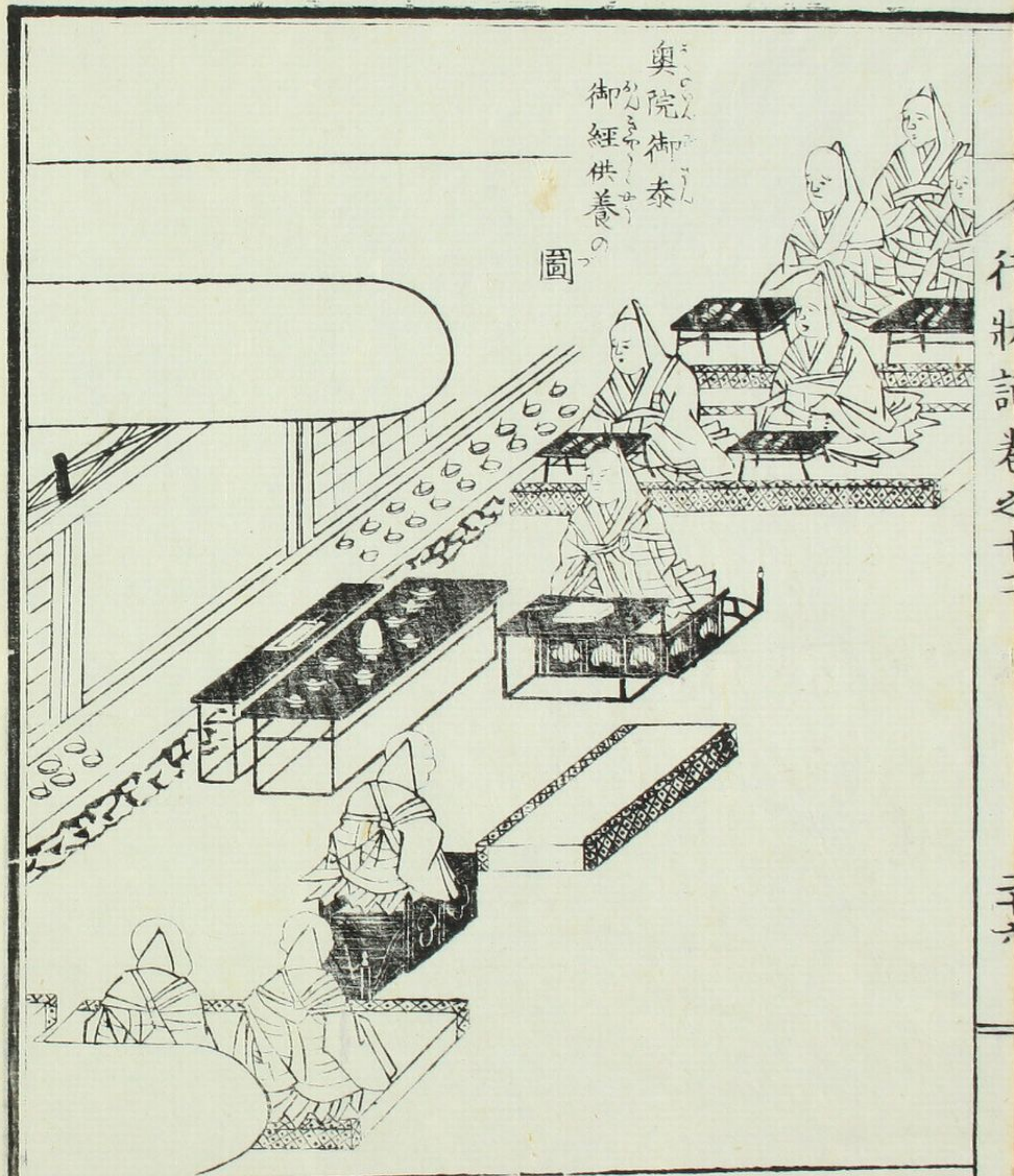






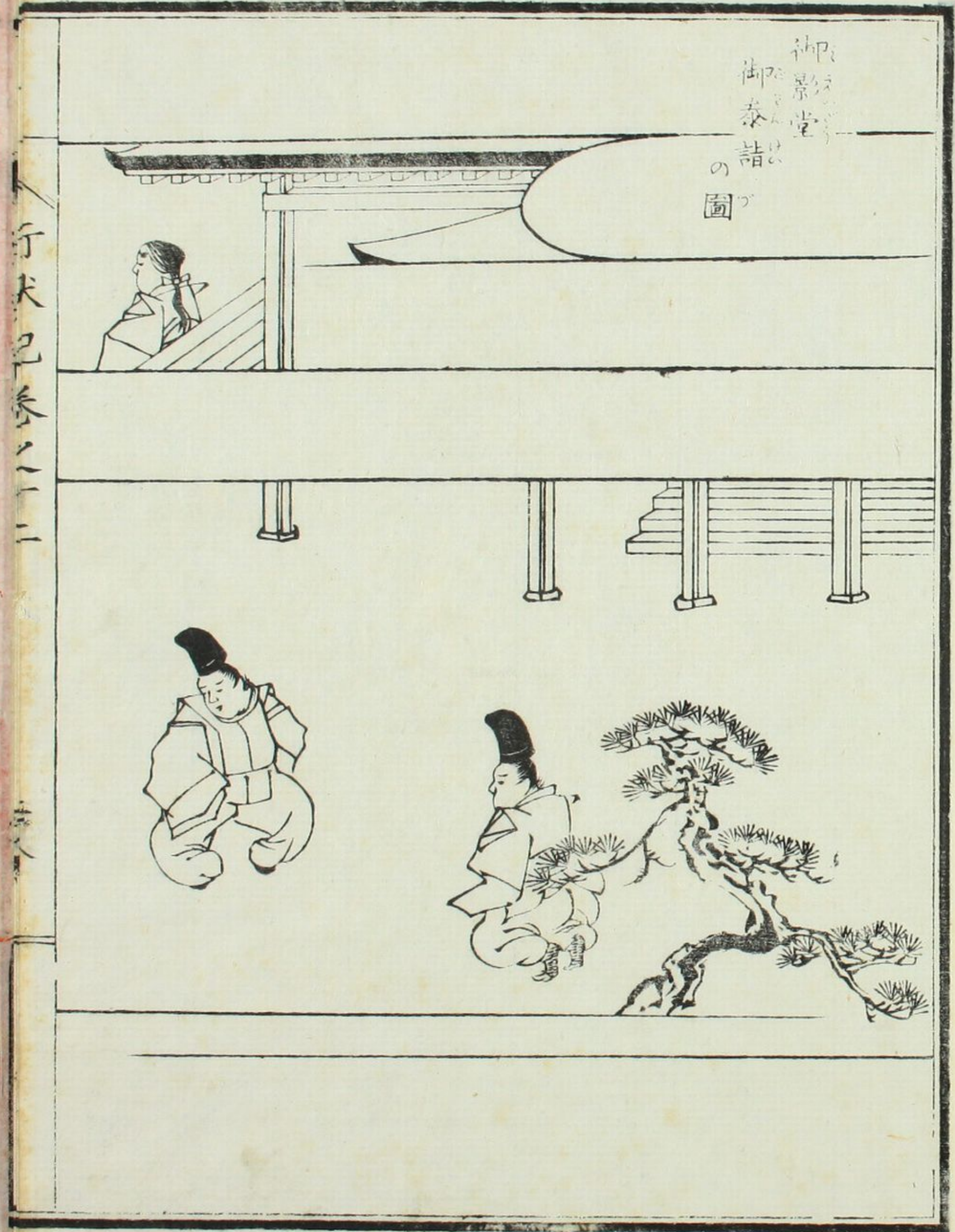


奥院御泰  
御經供養の  
圖





頂と法りがり先大塔と造らりて蕭さう俊しん小復せうままべきはし  
 ありき漸しん經きやう信しん表ひょうののち後ご礼らい殿でんやや々々ののち母はは口ののち信しん侶りやう証しやうりて  
 理り趣しゆ三さん昧まいととたたおお好こうははるる禮らい殿でんののち南なんののち方かたよよ三さん宮みやののち假かり  
 尾びとと云いて 漸しん融じゆう字じ不ふとと以もつてて後ご長ちやう者しや定ぢやう質しやく信しん都と大だい師し  
 漸しん筆ひつ二に卷くわんととたたててままつつるる桂けい大だい納なつ言げん雅や実じつ卿しやう去き重じゆう証しやう傳でん  
 へへををずず事じ終しゆうて 上じやう皇かう中ちゆう院いんへ 還くわん漸しんありりるる  
 同どう廿じふ八はち日にち又また漸しん新しん堂だうへ 漸しん系けい阿あり 執しやく行ぎやう良りやう禪ぜんととりりと  
 いいへへどもども凡かん鄙ひ比ひ身み 漸しん系けい人にん進しんぐぐとと以もつてて比ひ由ゆへへりり寛くわん意い  
 信しん都と作さくままりりてて堂だうののち戸こととひひくく大だい師しののち漸しん新しんとと證しやう  
 拜らい 在ざい不ふ什じつ物ぶつと 叡えい覽らんありり漸しん共きやうののち信しん侶りやう証しやうととまま

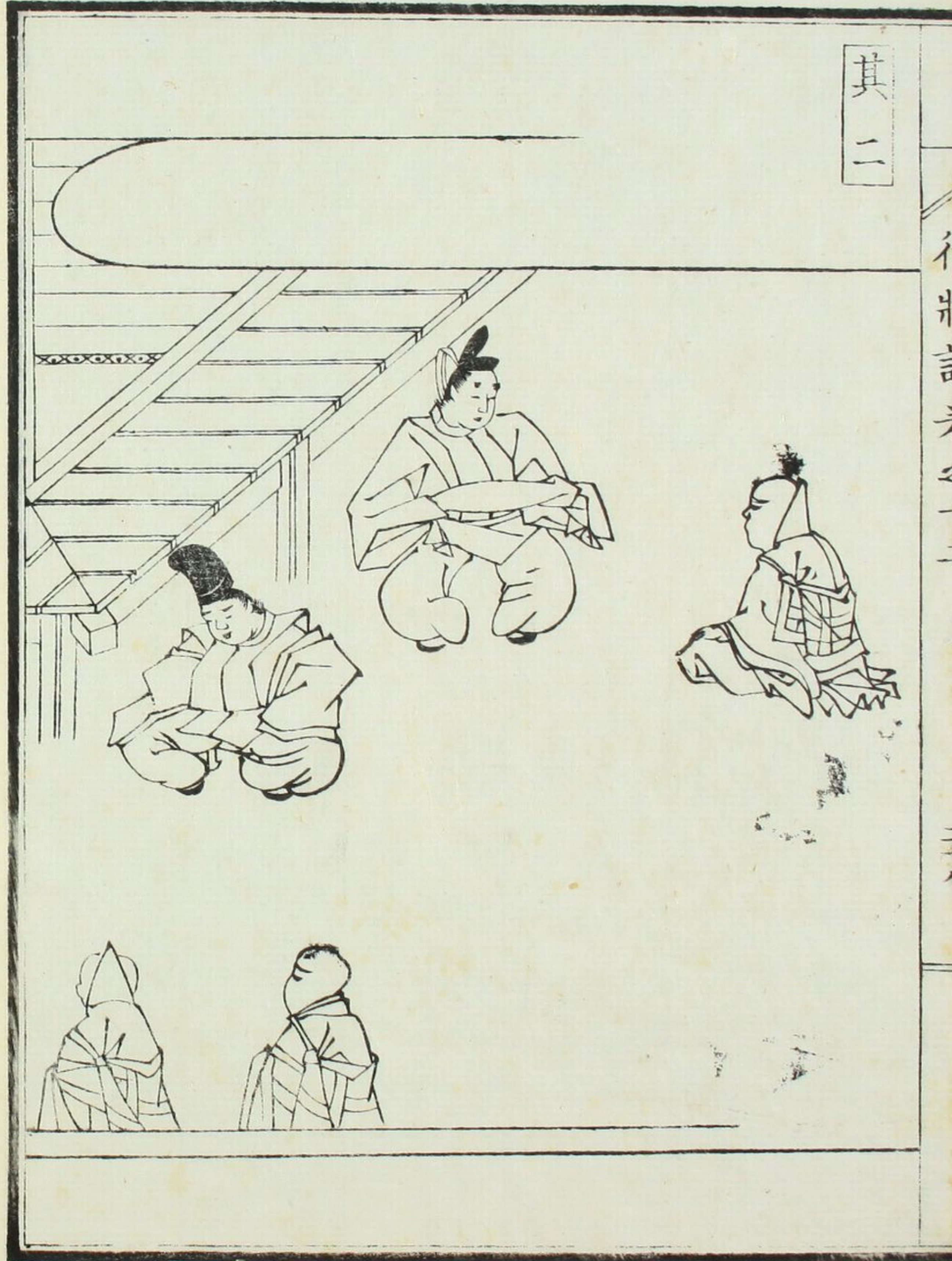


行狀記卷之十二

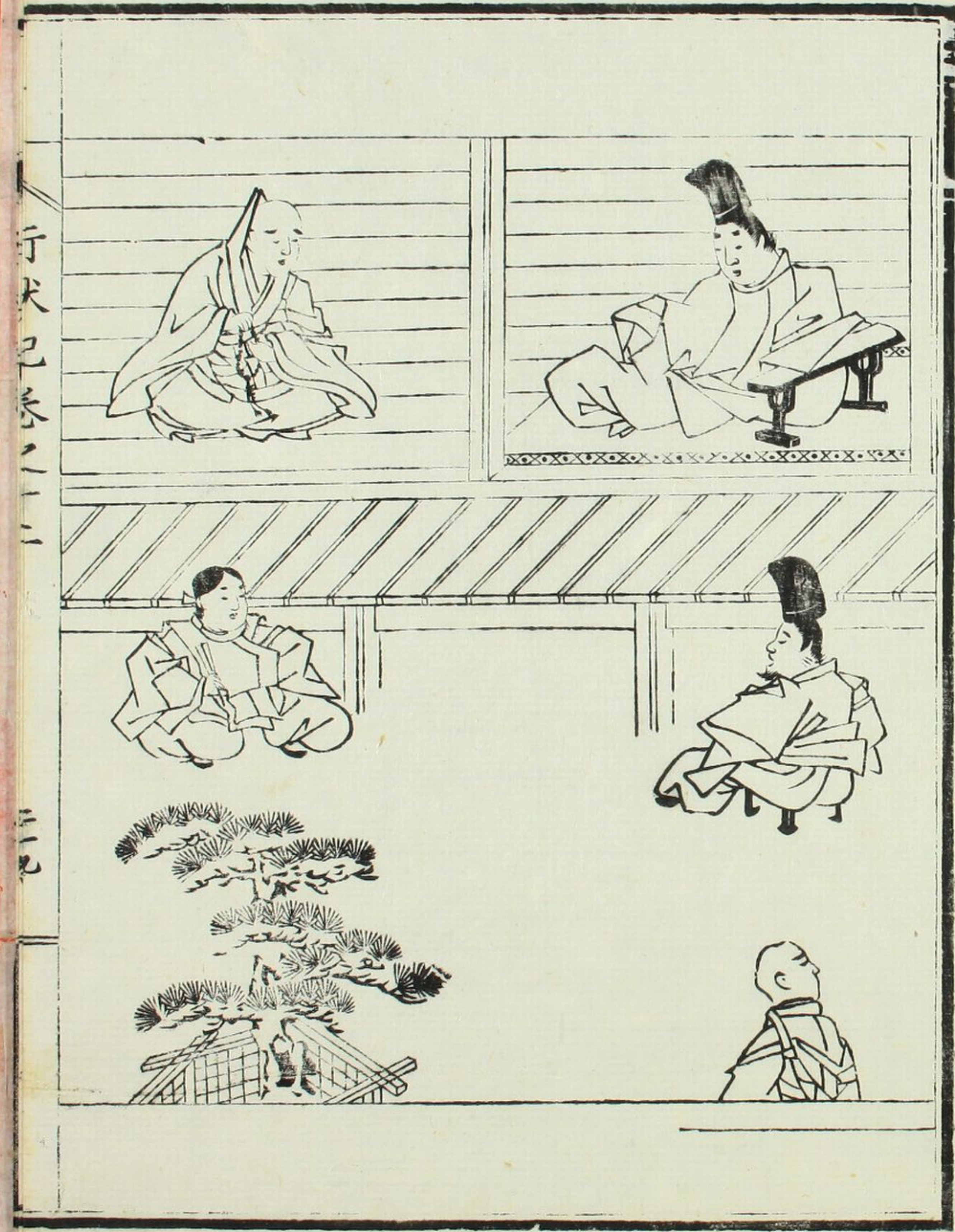


其二

行狀記卷之十二



三六



行狀記卷之十二

三六



細細して之松の松林由来とてひ陸て結縁の爲  
 二名を枝と於て懐み以て長者毎に之綱等乃  
 祿物と給てのち業師堂へ 浄業すむる中院へ  
 入河あり廿九日 還浄すべく始中終乃儀  
 式をまゝに注するに母はばど大師入定の後二  
 百餘廻おねぶとへども  
 上皇は  
 隆幸はきくは兼和の 聖代を以て後一十九代と  
 應一かども尚志の止は 浄ゆきなりり以寛治  
 いま希代の例との未ゆら志は一且の 獻儀の  
 おりくば定て多生浄宿園たくりい 遠く

都城の震と出て紀州の買地は 幸一遠く源  
 止は露とけあて坐禅の窟岨に法給へるふうに  
 浄志大師いづばうりり浄納交ありあんそまうりこの  
 々々明時の佳例とて代は 上皇 仙降と  
 従まつみかりし事どもあり識よまの山を法伝  
 老後の峯眞衆守護の洞あまば一夜あゆみとはこぶ  
 人も好むく之途のともなふはち一念信心ととり者ハ  
 必二世は身法とて心ある人を次作の志と法を  
 はくはん類と系法の類ととくべきあや  
 弘法大師行狀記卷之十二 大尾



寶曆八年戊寅出版  
明治十年十月購版

弘法大師行狀記跋

惠乘於終焉之際遺告生徒曰  
余寓居于當寺有年於茲遂陳  
平生之力描繪我弘法大師  
行狀記蓋欲使人知大師之所  
以為大師也庶幾永為完璧於  
長久院而宜續吾志矣然後位



持不能其事而轉任于他寺已  
二世矣嘉永己酉年小僧尊清  
來住于當寺歛盡舉之廢置於  
是年盡衣衾之資就事於茲靜  
報高祖無窮之德者則所以  
續惠衆之業也庚戌之秋八月  
江都長久院住持尊清謹誌焉

是以考之欽其德者固是以識之則其  
大師之所以為 大師蓋以歛然矣是  
則前世撰者之意而亦在儕所報於  
師德之微衷也已矣薰世之向斯道者  
潛思而觀焉

天保四年歲次癸巳冬十有一月

東寺十輪院住持慧乘謹誌

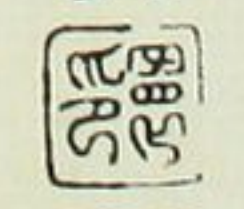


行狀記略

於東武之客舍



玄憲謹錄



佛敎學各種圖書 御經類一切

和漢洋書籍無量 新古本賣買

製本 出版 良品廉價發賣店

京都市寺町通五條上ル

尚舞山城屋 文政堂

各宗學林御用堦書肆 藤井佐兵衛



